

平安京左京四条四坊二町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇〇八―一二

平安京左京四条四坊二町跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京四条四坊二町跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成 13 年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、地下駐車場建設にともなう平安京跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

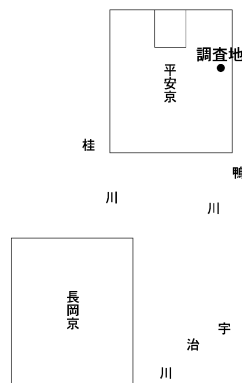
平成 21 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京四條四坊二町跡
- 2 調査所在地 京都市中京区東洞院通蛸薬師上る御射山町他地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2008年4月11日～2008年10月31日
- 5 調査面積 838 m²
- 6 調査担当者 東 洋一・山本雅和・能芝妙子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「三条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 調査区ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 東 洋一・山本雅和・能芝妙子・近藤奈央
付章1：丸山真史（京都大学大学院人間・環境学研究科）
付章2：パリノ・サーヴェイ株式会社
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 調査地の位置と環境	2
(1) 位置と環境	2
(2) 周辺の調査	5
3. 遺 構	11
(1) 基本層序	11
(2) 1区第1面	14
(3) 1区第2面	18
(4) 1区第3面	21
(5) 1区第4面	23
(6) 2区第1面	23
(7) 2区第2面	29
(8) 2区第3面	31
4. 遺 物	34
(1) 遺物の概要	34
(2) 土器類	34
(3) 瓦類	43
(4) 土製品	44
(5) 石製品	46
(6) 金属製品	47
(7) 骨角製品	48
(8) 木製品	49
(9) その他の出土遺物	49
5. ま と め	50
付章1 動物遺存体について	65
(1) 概要	65
(2) 種類別の出土状況	66
(3) 平安京左京四条四坊二町跡にみる中・近世の動物利用	67
(4) 小結	68
付章2 自然科学分析	73
(1) 1区の中・近世の遺構のベースをなす堆積物の形成年代の検討	73
(2) 2区第1面出土の植物遺体	77

図 版 目 次

- 図版 1 遺構 1 区第 1 面遺構平面図 (1 : 150)
- 図版 2 遺構 1 区第 2 面遺構平面図 (1 : 150)
- 図版 3 遺構 1 区第 3 面遺構平面図 (1 : 150)
- 図版 4 遺構 1 区第 4 面遺構平面図 (1 : 150)
- 図版 5 遺構 2 区第 1 面遺構平面図 (1 : 150)
- 図版 6 遺構 2 区第 2 面遺構平面図 (1 : 150)
- 図版 7 遺構 2 区第 3 面遺構平面図 (1 : 150)
- 図版 8 遺物 土器実測図 1 (1 : 4)
- 図版 9 遺物 土器実測図 2 (1 : 4)
- 図版 10 遺物 土器実測図 3 (1 : 4)
- 図版 11 遺物 土器実測図 4 (1 : 4)
- 図版 12 遺物 土器実測図 5 (1 : 4)
- 図版 13 遺物 土器実測図 6 (1 : 4)
- 図版 14 遺物 土器実測図 7 (1 : 4)
- 図版 15 遺物 土器実測図 8 (1 : 4)
- 図版 16 遺物 土器実測図 9 (1 : 4)
- 図版 17 遺物 土器実測図 10 (1 : 4)
- 図版 18 遺物 土器実測図 11 (1 : 4)
- 図版 19 遺物 瓦類拓影・実測図 1 (1 : 4)
- 図版 20 遺物 瓦類拓影・実測図 2 (1 : 4)
- 図版 21 遺物 瓦類実測図 3、土製品実測図 1 (1 : 4)
- 図版 22 遺物 土製品実測図 2 (1 : 4)
- 図版 23 遺物 石製品実測図 (1 : 4)
- 図版 24 遺物 金属製品、骨角製品実測図 (1 : 2)
- 図版 25 遺構 1 1 区南壁断面 (北北東から)
2 2 区西壁断面 (北東から)
- 図版 26 遺構 1 1 区第 1 面全景 (東北東から)
2 1 区溝 160 断面 (北から)
- 図版 27 遺構 1 1 区据付穴 177・182 (東北東から)
2 1 区竈 218 (南から)
- 図版 28 遺構 1 1 区第 2 面全景 (東北東から)
2 1 区土坑 390 土器出土状況 (南東から)

- 図版 29 遺構 1 1区井戸 435・452（北北西から）
 2 1区井戸 304（北東から）
 3 1区井戸 430（東から）
- 図版 30 遺構 1 1区地下室 410（北から）
 2 1区地下室 410 南端（北から）
- 図版 31 遺構 1 1区第3面全景（東北東から）
 2 1区井戸 583（西から）
 3 1区糞据付穴群（北から）
- 図版 32 遺構 1 1区流路 632 南壁断面（北北東から）
 2 1区流路 632 縄文土器出土状況（西から）
 3 1区流路 632B 弥生土器出土状況（西から）
- 図版 33 遺構 1 2区第1面全景（北から）
 2 2区穴蔵1（南から）
- 図版 34 遺構 1 2区石室 168（南から）
 2 2区石室 169・170（南東から）
 3 2区穴蔵1 土器出土状況（北北西から）
 4 2区土蔵 70 土器出土状況（北西から）
- 図版 35 遺構 1 2区第2面全景（北から）
 2 2区溝 230 断面（南から）
 3 2区集石土坑 275（東から）
 4 2区井戸 364（西南西から）
 5 2区井戸 368（南南東から）
- 図版 36 遺構 1 2区第3面全景（北から）
 2 2区井戸 394（東から）
 3 2区井戸 395（東から）
- 図版 37 遺物 土器 1
- 図版 38 遺物 土器 2
- 図版 39 遺物 土器 3
- 図版 40 遺物 土器 4
- 図版 41 遺物 瓦類 1
- 図版 42 遺物 瓦類 2
- 図版 43 遺物 石製品
- 図版 44 遺物 金属製品
- 図版 45 遺物 1 ウシの角芯（2区土坑 58）
 2 魚類（コチ科・マダイ）と鳥類（カモ科）（2区土坑 128）
 3 アカニシ（1区溝 160）

挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	調査前全景（南西から）	2
図4	調査風景（東から）	2
図5	京都盆地の地層分布図	3
図6	応仁の乱前の京都市街図	3
図7	戦国期の京都市街図	4
図8	下京四番組町割図	5
図9	周辺の調査地位置図（1：5,000）	6
図10	1区南壁断面図（1：150、1：80）	12
図11	2区西壁断面図（1：150、1：80）	13
図12	1区溝160断面図（1：50）	15
図13	1区竈218実測図（1：30）	16
図14	1区竊据付穴158・177・182実測図（1：30）	16
図15	1区土坑155実測図（1：30）	17
図16	1区井戸298・304・430・435・452実測図（1：50）	19
図17	1区地下室410実測図（1：50）	20
図18	1区土坑390実測図（1：30）	21
図19	1区井戸580・583実測図（1：50）	22
図20	1区竊据付穴群実測図（1：50）	22
図21	1区土坑399実測図（1：50）	23
図22	2区柵1実測図（1：50）	24
図23	2区穴蔵1実測図（1：50）	25
図24	2区穴蔵7実測図（1：50）	26
図25	2区土蔵70土器出土状況平面図（1：30）	26
図26	2区石室168・169・170実測図（1：50）	27
図27	2区集石土坑45平面図（1：50）	27
図28	2区井戸4実測図（1：50）	28
図29	2区溝230断面図（1：50）	30
図30	2区集石土坑275実測図（1：30）	30
図31	2区井戸364・365・368実測図（1：50）	31
図32	2区井戸394・395実測図（1：50）	32

図 33	2区井戸 397 実測図 (1 : 50)	32
図 34	縄文土器実測図 (1 : 4)	35
図 35	遺構変遷図 1 縄文時代から飛鳥時代 (1 : 300)	51
図 36	遺構変遷図 2 I ~ IV期 (1 : 300)	52
図 37	遺構変遷図 3 V期 (1 : 300)	53
図 38	遺構変遷図 4 VI期 (1 : 300)	55
図 39	遺構変遷図 5 VII期 (1 : 300)	56
図 40	遺構変遷図 6 VIII期 (1 : 300)	57
図 41	遺構変遷図 7 IX期 (1 : 300)	58
図 42	遺構変遷図 8 X期 (1 : 300)	59
図 43	遺構変遷図 9 XI期 (1 : 300)	61
図 44	遺構変遷図 10 XII期 (1 : 300)	62
図 45	遺構変遷図 11 期 (1 : 300)	63
図 46	動物遺存体の組成	65
図 47	タンチョウ属の指骨	66
図 48	イルカ類の肩甲骨	66
図 49	1区溝 160 ニホンジカ骨出土状況	66
図 50	1区の遺構のベースをなす堆積物の累重状況	73
図 51	微細物 (種実・骨・土器)	85
図 52	灰像	86
図 53	炭化材 1	87
図 54	炭化材 2	88
図 55	炭化材 3	89
図 56	炭化材 4	90
図 57	炭化材 5	91

表 目 次

表 1	遺構概要表	14
表 2	遺物概要表	34
表 3	時代別遺構数変遷表	50
表 4	種名表	65
表 5	動物遺存体一覧表	70
表 6	放射性炭素年代測定結果	75

表 7	曆年較正結果	75
表 8	分析試料一覽	77
表 9	微細物分析結果	79
表 10	灰像分析結果	79
表 11	樹種同定結果	80

平安京左京四條四坊二町跡

1. 調査経過

本発掘調査は、京都市中京区東洞院通蛸薬師上る御射山町他地内に所在する御射山公園内に自転車等の地下駐車場が建設されることになり、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」と略する）の指導のもと、建設に先立ち実施することとなった。

調査地は、平安京左京四條四坊二町跡に該当し、四條坊門小路（現蛸薬師通）と東洞院大路（現東洞院通）との交差点北東部に位置する。また調査地は、『京都市遺跡地図台帳』によれば、平安京跡の他に、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である烏丸綾小路遺跡と烏丸御池遺跡の中間に位置する。

調査地は公園として利用されていたため近代以降の攪乱が少なく、各時代の遺構の稠密な重なりが想定できた。また、今回の調査では、上記遺跡の調査とともに中・近世都市京都への変貌の指標となる構などの区画施設や建物・井戸などの状況から「下京」の構造と動向を探ることに主眼を置いた。

調査範囲は地下駐車場が建設される公園北側と東側にL字型の調査区を設定し、排土仮置場の

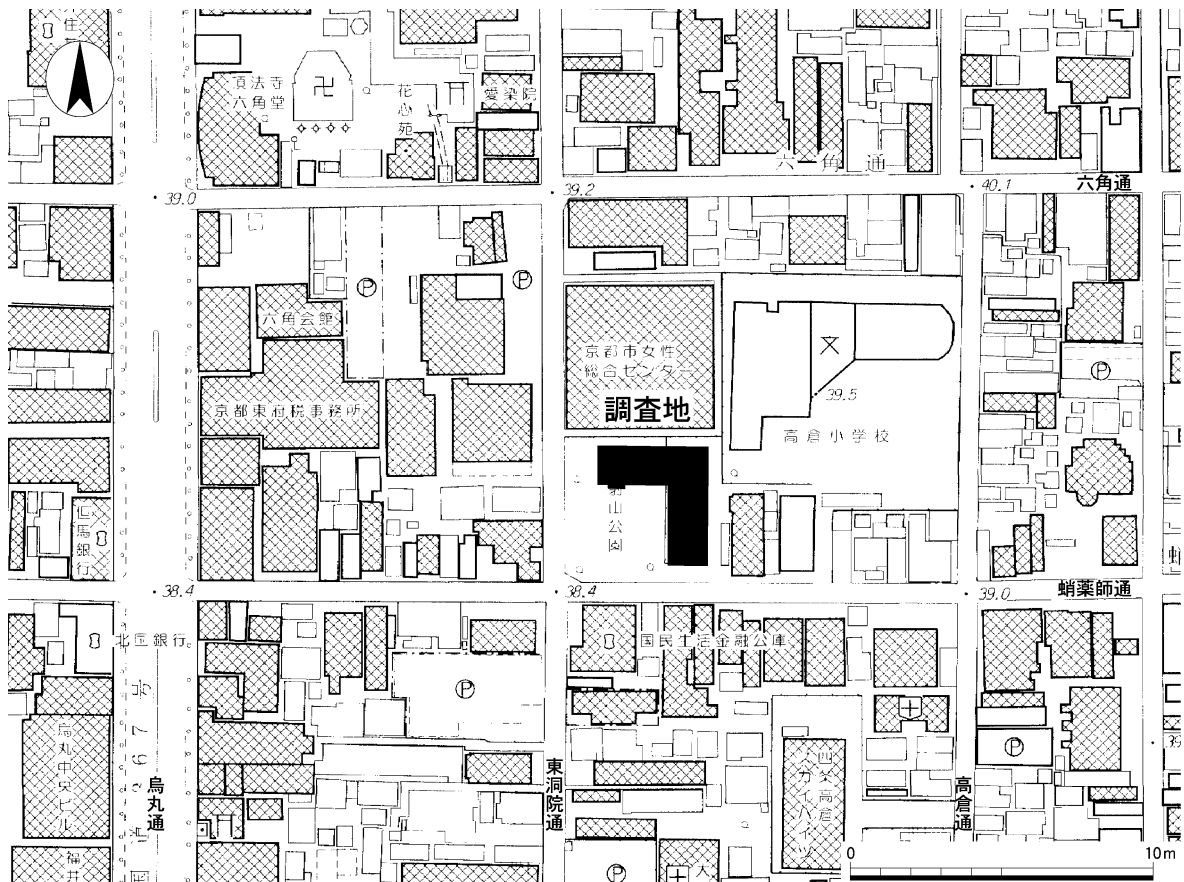


図1 調査位置図（1：2,500）

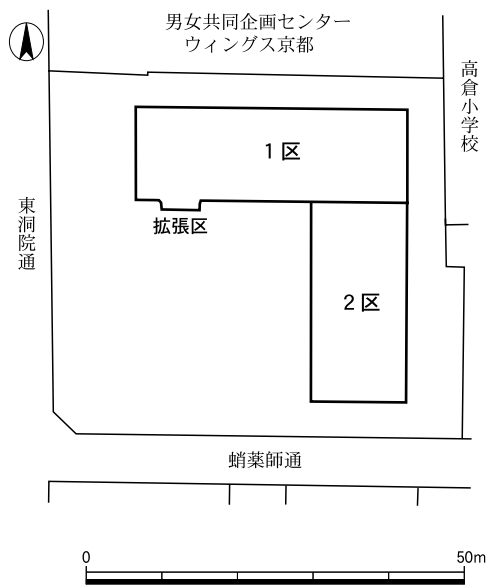


図2 調査区配置図（1：1,000）

確保のため調査区を2つに分けて、北側の東西方向に長い調査区を1区、南東側の南北方向に長い調査区を2区とした。なお、1区では、検出遺構の追及を目的として南側の一部を拡張した。調査面積は1区452㎡、2区386㎡の合計838㎡である。

2008年4月11日から開始した公園設備の撤去などの準備工事の後、調査は1区・2区の順に進めた。各調査区では、周辺の調査成果や調査期間などを考慮して、基本的に第1面を江戸時代、第2面を室町時代、第3面を鎌倉時代から平安時代の遺構面として調査した。さらに1区第3面で縄文時代・弥生時代の土器を包含する流路を検出したことにより、流路がある西半部分を第4面として調査した。

調査中は調査区設定段階および各遺構面の終了時に文化財保護課の検査を受け、2008年10月31日に調査区の埋め戻しを完了し、調査を終了した。

調査では、前記流路から縄文土器・弥生土器が出土し、また平安時代中期の井戸、鎌倉時代から室町時代にかけての井戸・地下室・溝・土取穴、江戸時代の井戸・溝などを検出する等の成果を挙げた。これをうけて、9月13日には「関西考古学の日」の一環として現場公開を催し、約200名の参加があった。また、現地説明会を10月4日に開催し、約320名の参加者があった。その他にも隣接する京都市立高倉小学校の児童を対象として6月14日に遺跡見学会（75名）、7月7日に5年生の発掘体験授業（84名）、8月8日に自由研究夏休み体験発掘（4名）を受け入れた。さらに中学校生徒を対象にチャレンジ体験授業を実施し、6月10日に京都市立上京中学校（4名）、24日には同神川中学校（2名）を受け入れた。10月3日には同春日小学校（13名）に説明会を開催するなど、普及啓発活動を行い、好評を博した。

註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局 2007年



図3 調査前全景（南西から）



図4 調査風景（東から）

2. 調査地の位置と環境

(1) 位置と環境 (図5～8)

調査地は京都盆地を南流する鴨川右岸に砂礫層が堆積した鴨川扇状地の高まりに位置しており、北東が高く南西が低い地形に立地している。平安京左京の大半はこの鴨川扇状地上に位置している。平安時代中期には衰退する低湿地の右京とは異なり、乾燥地でありながら井戸を掘れば新鮮な地下水が得られたことが都市を存続させた一因であろうと考えられる (図5)。

調査地がある平安京左京四条四坊二町についての文献史料は、大治四年 (1129) にこの町から出火したとの記録があるのが初出である¹⁾。また、12世紀前半に一町か二町のいずれかに民部卿藤原宗通の邸宅²⁾が、12世紀後半には大納言藤原重通の邸宅があった可能性が指摘されている³⁾。調査地の北西側には、平安時代中期に創建された六角堂 (頂法寺) がある。また、調査地西側の東洞院大路には高倉院・花山院・大炊御門内裏・二条内裏・三条東殿・五条東洞院内裏・六条内裏・六条中院・八条院などが建ち並び、左京の主要街路として機能していた。

鎌倉時代以降になると平安京の左京域に相当する範囲のほぼ全域に、酒屋・油屋・土倉などが点在していたことが文献史料より窺える。調査地周辺にもそれらの存在が確認できるが、調査地を含む街区については存在を示す記録はない (図6)。また、室町時代前期に六角東洞院付近に佐々木六角氏が屋敷をかまえ、六角氏の建立した禅刹・大慈院が六角高倉付近に存在したとされているが、詳細は不明で

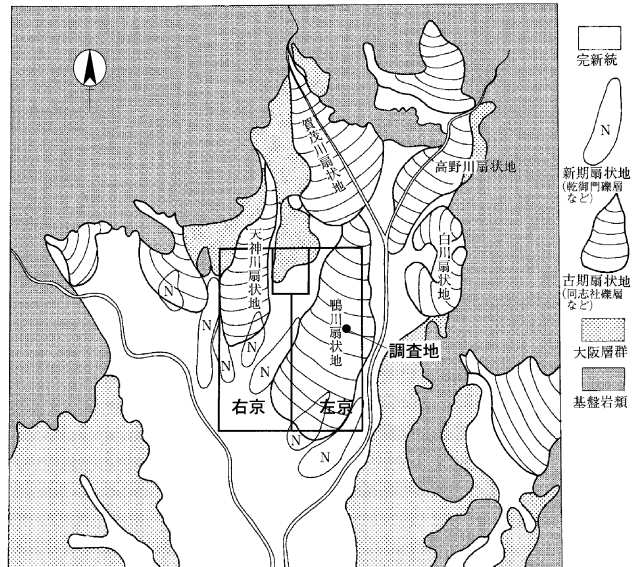


図5 京都盆地の地層分布図 (横山卓雄「京都の自然環境」『平安京提要』角川書店 1994年より抜粋加筆)

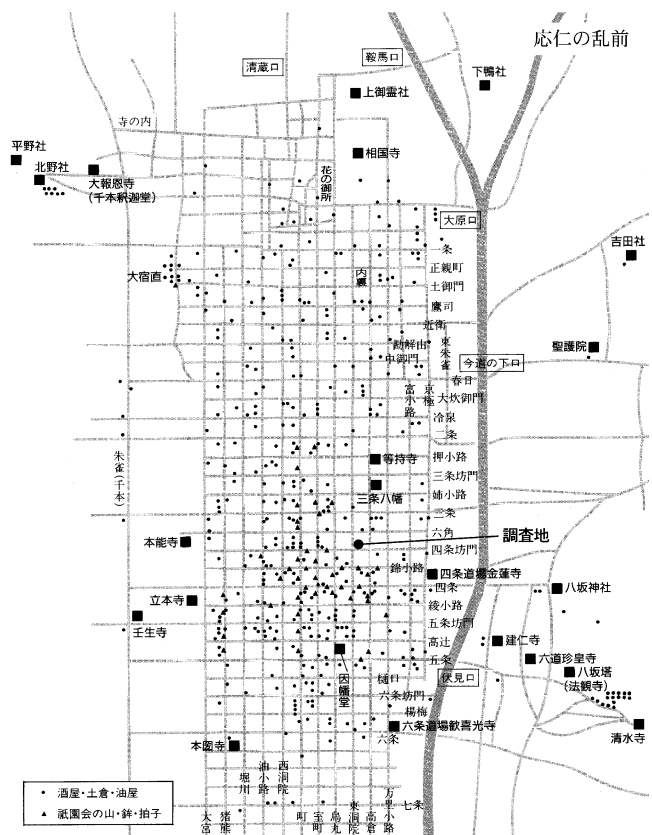


図6 応仁の乱前の京都市街図 (高橋康夫『洛中洛外一環境文化の中世史』平凡社 1988年より抜粋加筆)

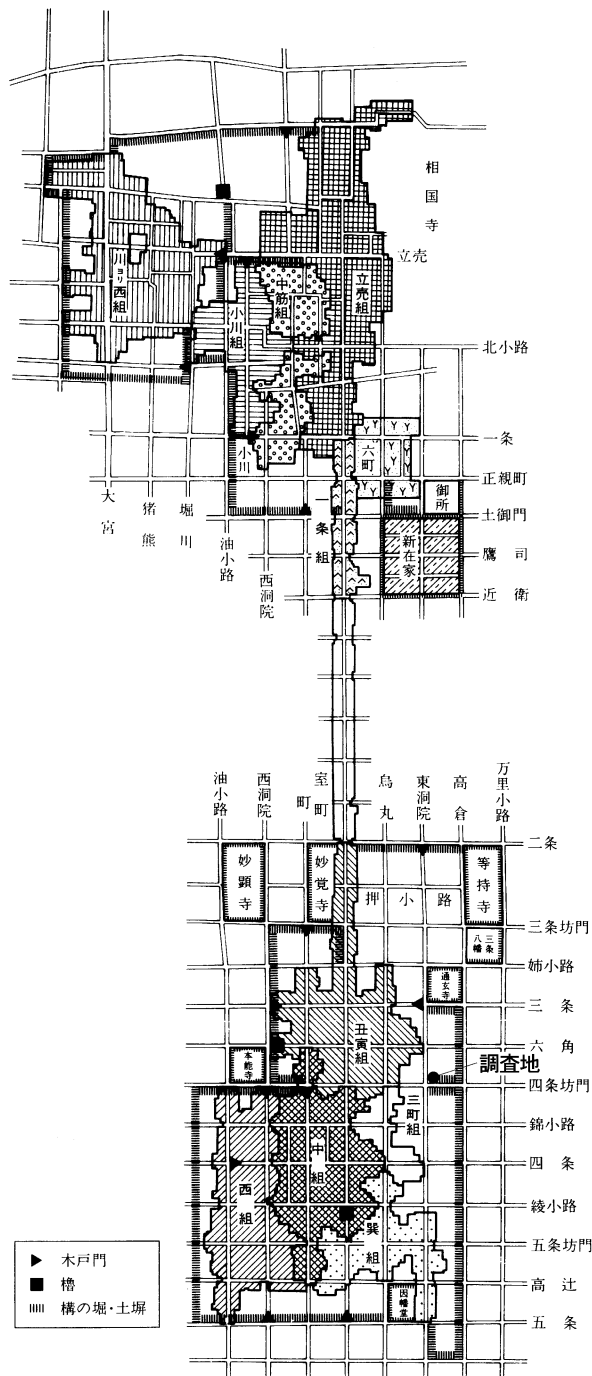


図7 戦国期の京都市街図(高橋康夫『京都市中世都市史研究』思文閣出版 1983年より抜粋加筆)

ある御神山として御射山の名称をとったものである。「せいしょうじ町」は、江戸時代中期の宝暦十二年(1762)に刊行された『京町鑑』以降から現在の「泉正寺」の字が当てられる。しかし、この寺院の存在は確認されていない。

これらの町は下京町組の「三町組」に属していたが、鉾町を中心とした「古町」に対し、いずれも「新町」となっている。「御射山町」が「三町組新町」の「東洞院壺町半組」に、「泉正寺町」が「三町組新町」の「三四組」に組織されていた。

また、貞享二年(1685)に刊行された『京羽二重』によれば「御射山町」には泉州岸和田藩岡

ある。

室町時代後期の応仁の乱(1467年)から天文法華の乱(1532)の頃になると京都の市街地は縮小し、「上京」と「下京」のまとまりが形成されたと考えられている。調査地は下京の町組北東部近辺に位置している(図7)。

桃山時代になると豊臣秀吉は伏見城を造営すると同時に、内裏に面した東洞院通を京都と伏見を連絡する竹田街道に直結する主要街路として再生させた。また、秀吉は慶長二年(1597年)に東洞院通に面した「三条坊門ヨリ四条坊門マデ四町、又西ハ東洞院ヨリ東へ四町」に「東洞院町太閤之御屋敷」を造営する計画をたてた。調査地はこの南西隅に該当する。

江戸時代前期には調査地周辺は東洞院通・蛸薬師通に面した両側町として、公園の西側が「諏訪の町」、公園の南側が「せいしょうじ町」と呼ばれていた。これらの町は江戸時代を通じて、東洞院通・蛸薬師通に面して町屋を形成していたことが、様々な絵図などから確認できる。

「諏訪の町」は江戸時代後期の寛保年間初め頃に現在の町名である「御射山町」に変更されたことが絵図で確認できる。町名の由来は町内に「諏訪ノ社」が祀られていることにより、諏訪信仰の対象で

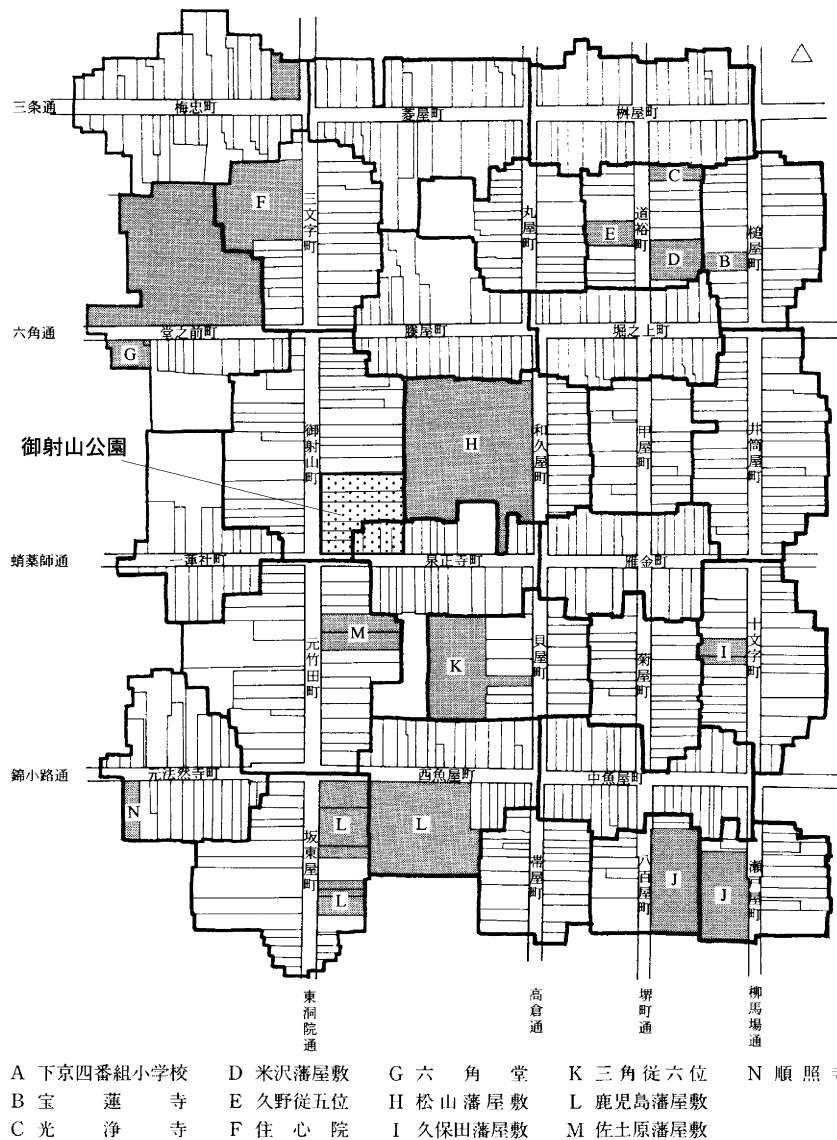


図8 下京四番組町割図(日向進『近世京都の町・町屋・町屋大工』思文閣出版1998年より抜粋加筆)

部家の京屋敷があったとされ、両町に様々な職人・商人が居住していたことが記録されているが場所は特定できない。調査地東に隣接する高倉小学校(旧日彰小学校)敷地は、江戸時代初頭は織田辰之助(織田信則、織田信長の甥)の屋敷、その後は明治維新まで伊予松山藩松平家の京屋敷として踏襲されていた。

明治維新以降も調査地には町屋が建ち並んでいたが、第二次世界大戦中に空襲避難所として調査地の町屋は強制撤去され、戦後、跡地が御射山公園として整備され現在に至っている(図8)。

(2) 周辺の調査(図9)

調査地を含む地域は、現在、オフィスビルや大小の商業施設が建ち並ぶ繁華街で、近年は再開発が盛んに行われている。そのため、周辺の試掘調査や立会調査の件数は非常に多い。調査地周辺の試掘調査や立会調査では、遺構として確認できたものは多くないが、弥生時代の流路や平安時代から江戸時代に至る遺物包含層を各所で検出している。また、弥生時代から江戸時代の遺物

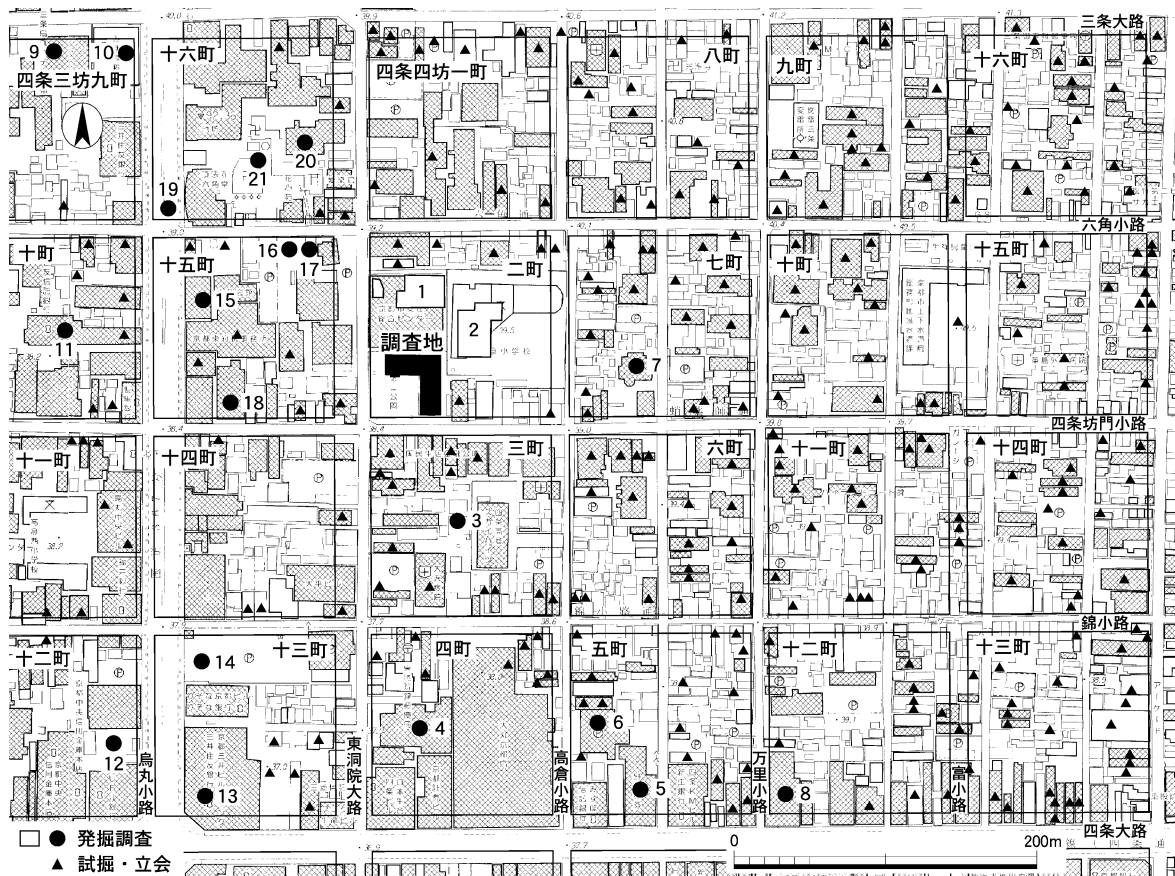


図9 周辺の調査地位置図（1：5,000）

を多量に採集している。

ここでは調査地周辺の左京四条四坊および四条三坊東半部で実施された主要な調査の概要について、発掘調査を中心に平安京の条坊に準じて述べる。

左京四条四坊

一町 1993年の立会調査では、古墳時代前期の土器を含む流路、室町時代の包含層・土坑を検出した⁴⁾。1996年の立会調査では、南北方向の弥生時代の流路、平安時代中期・鎌倉時代・江戸時代の土坑などを検出した⁵⁾。

二町 調査地を含む二町内では過去2件の発掘調査が行われている。調査地に北接する1990～1991年の発掘調査（図9-1）では、縄文時代から飛鳥時代の大規模な流路、平安時代中・後期の区画溝・井戸・土坑、江戸時代前期の溝・土坑を検出した。また、調査地に東接する1993年の発掘調査（図9-2）では、平安時代後期から鎌倉時代の区画溝・井戸・土坑、室町時代の建物・礎敷遺構・柱穴、桃山時代から江戸時代の柵・建物・井戸・土坑・石室などを検出した⁷⁾。

三町 2007年の発掘調査（図9-3）では、弥生時代の竪穴住居・流路・土坑、室町時代の堀・石組井戸・石組土坑・溝・建物・柵・土取穴、江戸時代中・後期の掘立柱建物・土坑を検出した⁸⁾。1991年の立会調査では、飛鳥時代の流路西肩口を検出した⁹⁾。

四町 1991年の発掘調査（図9-4）では、弥生時代の溝、中世の土壇墓、江戸時代初期の鏡鑄造工房を検出した¹⁰⁾。

五町 1986年の発掘調査(図9-5)では、平安時代前期から後期の土坑・柱穴・落込、鎌倉時代から室町時代の井戸・土坑・柱穴・落込、桃山時代の土坑・柱穴、江戸時代の井戸・土坑・掘込を検出した¹¹⁾。1989年の発掘調査(図9-6)では、古墳時代の流路、平安時代前期の整地層・土坑、平安時代末期から鎌倉時代の井戸・土坑・柱穴、桃山時代から江戸時代の井戸・土坑・土取穴・溝・柱穴・石室・木棺墓を検出した¹²⁾。

六町 2002年の立会調査では、古墳時代前期の包含層、鎌倉時代中期の包含層を検出した¹³⁾。

七町 1987年の発掘調査(図9-7)では、弥生時代後期から古墳時代初頭の溝、古墳時代の柱穴、平安時代中期の土坑・柱穴・溝状遺構、平安時代後期から鎌倉時代の土坑、室町時代の井戸・土坑、桃山時代から江戸時代前期の井戸・土坑、江戸時代中期以降の井戸を検出した¹⁴⁾。1996年の立会調査では、弥生時代の遺物を採集している¹⁵⁾。

九町 1989年の立会調査では、江戸時代初期の井戸から茶陶を含む陶磁器が多量に出土した¹⁶⁾。

十二町 2000年の発掘調査(図9-8)では、平安時代中期から後期の湿地・井戸・溝・建物・四条大路北側溝、鎌倉時代から室町時代前期の方形竪穴建物・土坑・柱穴、室町時代中期から桃山時代の井戸・土坑・溝・柱穴を検出した¹⁷⁾。

十三町 1982年の試掘調査では、東京極大路の路面を検出した¹⁸⁾。1995年の試掘調査では、平安時代末から鎌倉時代の土坑・柱穴・東京極大路などを検出した¹⁹⁾。

十四町 1987年の試掘調査では、平安時代の溝、東京極大路西側溝などを検出した²⁰⁾。1995年の立会調査では、平安時代の遺物を採集している²¹⁾。

十六町 1990年の試掘調査では、古墳時代の遺物を包含する流路や東京極大路の路面を検出した²²⁾。

左京四条三坊

九町 1987～1988年の発掘調査(図9-9)では、平安時代中期から後期の遺水・庭園・建物跡・三条大路南側溝、鎌倉時代の井戸・土坑・溝・柱穴、室町時代の土坑・礎石列、桃山時代から江戸時代前期の井戸・土坑・掘込・落込、江戸時代中期以降の井戸・掘込・土坑を検出した²³⁾。1999年の発掘調査(図9-10)では、平安時代後期から末期の遺水・掘立柱建物・井戸・土坑、中世の包含層などを検出した²⁴⁾。

十町 1989～1990年の発掘調査(図9-11)では、平安時代中期から後期の土坑・柱穴・落込・整地層、鎌倉時代から室町時代の井戸・土坑・柱穴・落込・掘込・溝状遺構、桃山時代から江戸時代前期の井戸・土坑・溝・柱穴・掘込、近世の井戸・土坑・柱穴・瓦溜などを検出した²⁵⁾。

十一町 1991年の試掘調査では、古墳時代の包含層を確認した²⁶⁾。1992年の立会調査では、落込から弥生時代中期後半の線刻を施した大型広口壺などが出土した²⁷⁾。

十二町 2006年の発掘調査(図9-12)では、弥生時代の竪穴住居・方形周溝墓・土坑、平安時代の土坑・柱穴、鎌倉時代の井戸・土坑、室町時代の井戸・土坑・石室・埋甕、桃山時代から江戸時代初期の井戸・土坑、江戸時代の井戸・土坑・便所・石室などを検出した²⁸⁾。

十三町 1982年の発掘調査(図9-13)では、弥生時代の溝・住居跡、平安時代から江戸時代

の井戸・土坑・溝などを検出し、石器を含む弥生時代の遺物が多量に出土した²⁹⁾。1989～1990年の発掘調査(図9-14)では、弥生時代の溝・落込、平安時代の井戸・土坑・溝・柱穴、鎌倉時代から室町時代後半の石組井戸・礎石・溝・柱穴・落込、桃山時代以降の井戸・石室・土坑・溝状遺構・石組遺構・便所の埋竈・水琴窟などを検出した³⁰⁾。1990年の試掘調査では、弥生時代・古墳時代の溝、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構を多数検出した³¹⁾。

十四町 1983年の立会調査では、平安時代の流路を確認した³²⁾。

十五町 1977年の発掘調査(図9-15)では、平安時代の井戸・土坑、鎌倉時代の井戸・土坑、室町時代の建物・井戸・土坑などを検出した。1978年には2件の発掘調査(図9-16・17)が実施され、平安時代の井戸・柱穴、中世の土坑・柱穴、近世の井戸・土坑・溝・石室などを検出した。1979年の発掘調査(図9-18)では、平安時代の四条坊門小路北側溝、中世の土坑・溝・柱穴、近世の瓦溜などを検出した³³⁾。

十六町 1977年の京都市高速鉄道烏丸線(地下鉄烏丸線)の発掘調査(図9-19)では、六角小路の路面と北側溝を検出した³⁴⁾。1986年の発掘調査(図9-20)では、平安時代後期の井戸・土坑・柱穴、鎌倉時代の柱穴、室町時代の柱穴列・落込・土坑、江戸時代の井戸・溝・土坑・掘込・落込・柱穴列を検出した³⁵⁾。1992年度の立会調査では、南北方向の室町時代後期の堀と東洞院大路の路面を検出した³⁶⁾。また、六角堂(頂法寺)境内では4次にわたって発掘調査(図9-21)が実施され、縄文時代から弥生時代前期の流路、平安時代後期の柱穴・区画溝などを検出した³⁷⁾。

調査地北側の左京三条四坊四町では、中京郵便局や京都文化博物館などの発掘調査が行われている。縄文時代の土坑・包含層、平安時代の三条大路・高倉小路・土坑・井戸、鎌倉時代から室町時代の東洞院大路・井戸・土坑・柱穴列、江戸時代の溝・土坑・石垣・集石遺構などを検出した³⁸⁾。

このように周辺の調査では縄文時代から近代までの重層する遺構が検出されており、今回の調査でもこれまでの調査成果に関連する遺構の検出が期待された。

註

- 1) 『中右記』同年正月十五日条
- 2) 『中右記』元永元年十一月二十六日・同二年三月二十一日条
- 3) 山田邦和「左京と右京」『平安京提要』角川書店 1994年
- 4) 『京都市内遺跡立会調査概報 平成5年度』京都市文化観光局 1994年
- 5) 『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1997年
- 6) 山本雅和「平安京左京四条四坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 7) 山本雅和・鈴木廣司「平安京左京四条四坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 8) 伊藤 潔『平安京左京四条四坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-28 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年

- 9) 竜子正彦「平安京左京四条四坊 (91HL170)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
- 10) 植山茂編『平安京左京四条四坊』京都文化博物館調査研究報告第9集 京都府京都文化博物館 1993年
- 11) 長戸満男「平安京左京四条四坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 12) 木下保明「平安京左京四条四坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 13) 『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局 2003年
- 14) 小森俊寛・原山充志「平安京左京四条四坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 15) 竜子正彦「平安京左京四条四坊七町 (96HL1)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1997年
- 16) 久世康博「平安京左京四条四坊 (HL104)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
- 17) 吉崎 伸・南 孝雄「平安京左京四条四坊」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 18) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1983年
- 19) 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成7年度』京都市文化市民局 1996年
- 20) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
- 21) 尾藤徳行・吉村正親「平安京左京四条四坊十四町 (95HL275)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成7年度』京都市文化市民局 1996年
- 22) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
- 23) 小森俊寛・上村憲章「平安京左京四条三坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 24) 『平安京左京四条三坊九町 - 第一勸業銀行京都支店改築に伴う調査 -』古代文化調査会 2001年
- 25) 小森俊寛・原山充志「平安京左京四条三坊1」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 26) 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
- 27) 伊藤 潔・川村雅章・竜子正彦「左京四条三坊十一町 (92HL44)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度』京都市文化観光局 1993年
- 28) 平尾政幸『平安京左京四条三坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-26 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 29) 『平安京左京四条三坊十三町 - 長刀鉾町遺跡 -』平安京跡研究調査報告 第11輯 (財)古代学協会 1984年
- 30) 小森俊寛・上村憲章「平安京左京四条三坊2」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 31) 註22に同じ
- 32) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年

- 33) 上村和直「平安京左京四条三坊跡」『平安京跡発掘調査概要 1979年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980年
- 34) 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅲ 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡委員会 1982年
- 35) 小森俊寛・上村憲章「平安京左京四条三坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 36) 尾藤徳行・伊藤 潔「左京四条三坊十六町(92HL268)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度』京都市文化観光局 1993年
- 37) 『平安京六角堂の発掘調査』平安京跡研究調査報告第2輯 (財)古代学協会 1977年
『平安京跡六角堂跡第二次発掘調査概報』(財)古代学協会 1980年
『六角堂3次・4次調査』平安京跡研究調査報告第21輯 (財)古代学協会 2006年
- 38) 寺島孝一・乗安和二三・松井忠春ほか『東洞院大路曇華院跡 中京郵便局新築敷地埋蔵文化財発掘調査報告』平安京跡研究調査報告第3輯 近畿郵政局・平安博物館 1977年
飯島武次・片岡 肇・寺島孝一『平安京高倉宮・曇華院跡の発掘調査』(財)古代学協会 1979年
片岡 肇・南 博史・鋤柄俊夫・田中 聡・岩元雅毅『平安京高倉宮・曇華院跡』平安京跡研究調査報告第8輯 (財)古代学協会 1983年
片岡 肇・植山 茂・山田邦和・森下英治・寺升初代・川内由美子・岡 佳子『平安京高倉宮・曇華院跡第4次調査』平安京跡研究調査報告第18輯 (財)古代学協会 1987年
植山 茂・山田邦和・寺升初代・岡 佳子・南 博史『平安京左京三条四坊四町』京都文化博物館(仮称)調査研究報告第2集 (財)京都文化財団 1988年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図 10・11、図版 25)

調査区内の土層は、遺構の重複と部分的な堆積が多く、同一層が両調査区を通じて堆積することは地山の砂礫層を除いてない。層序は場所によって異なるので、ここでは1区南壁断面図の東・西箇所(図10-南壁1・2)と2区西壁南・北箇所(図11-西壁1・2)の合計4箇所の層序で代表させておく。

1区西部(図10-南壁2)は地表下約1.5mで江戸時代初頭の遺構面となり、これを第1面とした。地表下1.6mにオリーブ褐色砂泥を基盤とする室町時代の遺構面があり、これを第2面とした。地表下約2.0mの地山面で平安時代から鎌倉時代の遺構を検出したことから、これを第3面とした。地山は砂礫層である。また、地山面で縄文土器・弥生土器を包含する1区流路632を検出し、これを第4面の遺構とした。

1区東部(図10-南壁1)は地表下約1.0mまで攪乱を受けていた。攪乱直下におおよそ3層に分かれる厚さ約0.4mの江戸時代の土層があり、この下面を第1面とした。第1面の下層は厚さ約0.3mの江戸時代初頭の土層があり、この下面を第2面とした。第2面では室町時代の遺構検出をめざしたが、基盤層となる土層は部分的にしか分布しない。第2面の土層・遺構を掘り下げ、平安時代から鎌倉時代の遺構を検出し第3面とした。地山は砂礫層である。

2区南部(図11-西壁1)は地表下0.8mまで公園の盛土である。盛土の下におおよそ4層に分かれる厚さ約0.6mの江戸時代の土層があり、この下面を第1面とした。第1面の下層は厚さ約0.2mの江戸時代初頭の土層があり、この下面を第2面とした。室町時代の土層は遺構の切り合いとして現れるだけで、遺構を掘りきった段階で砂礫からなる地山面の第3面となる。ただし、2区中央部では東西方向に黄褐色粘質土などが堆積した幅約8m、深さ約1mの2区流路444を検出したが、埋土は無遺物層であったため、断割調査に留め、2区に第4面は設定しなかった。

2区北部(図11-西壁2)は地表下約0.4mまで公園の盛土である。盛土の下には厚さ約1mの江戸時代の土層がある。この部分は土蔵の基礎が重複し、一部には土間と考えられる固く締まった部分がある。この下面を第1面とした。2区北部には江戸時代初頭の土層はなかったため、第2面の遺構はほぼ同一の面で検出することとなった。第2面の室町時代の土層は、多くが2区流路444に堆積した粘質土を取るための土取穴の埋土である。室町時代の土層は遺構の切り合いとして現れるだけで、遺構を掘りきった段階で砂礫の地山と2区流路444に堆積した粘質土からなる第3面となる。

調査では第1面で江戸時代、第2面で室町時代、第3面で平安時代から鎌倉時代、第4面で飛鳥時代以前の遺構検出をめざしたが、遺構・土層が重複するため各遺構面では、目的とした時期の遺構の他に前後する時期の遺構を検出・掘削することもあった。

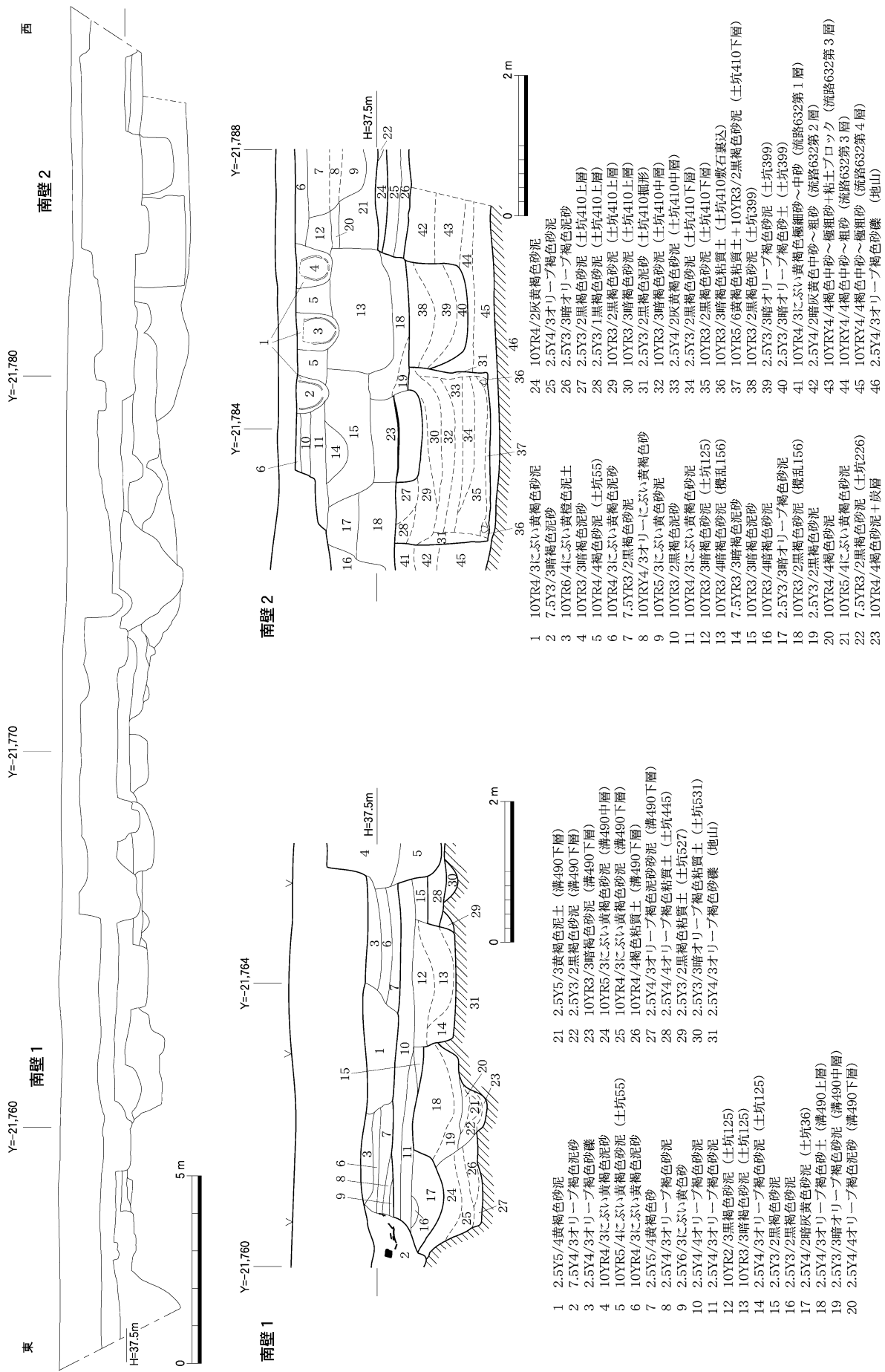
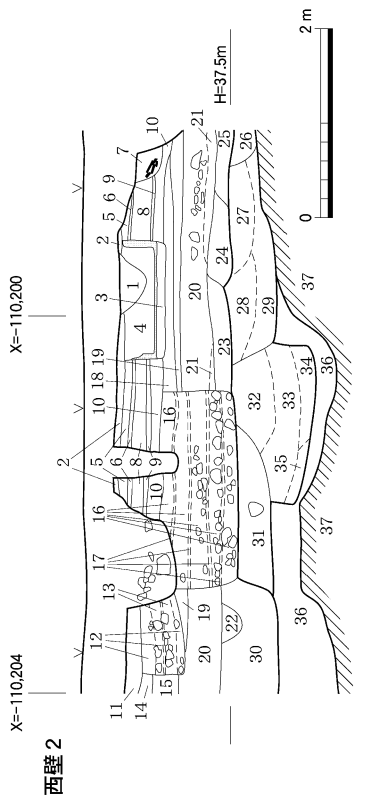
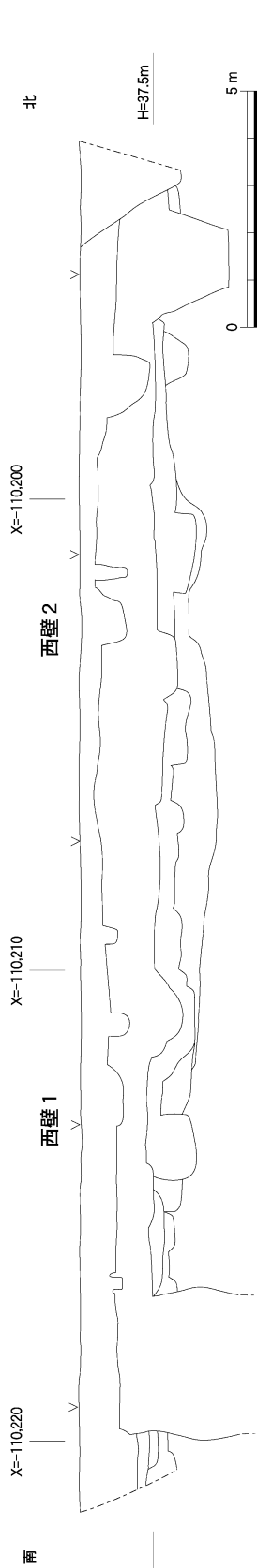
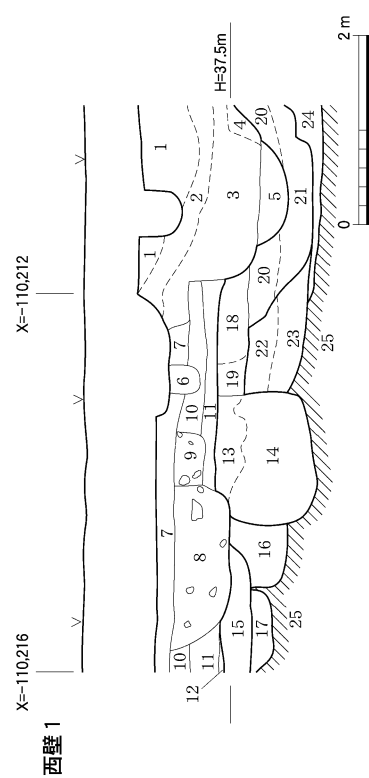


図 10 1区南壁断面図 (1 : 150、1 : 80)



- | | | | |
|----|--------------------------|----|-------------------------|
| 1 | 2.5Y3/3オリーブ褐色砂泥 | 21 | 2.5Y5/4黄褐色砂 |
| 2 | 10YR4/4褐色砂泥 | 22 | 10YR3/3暗褐色砂泥 |
| 3 | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 | 23 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 |
| 4 | 10YR4/4褐色砂泥 | 24 | 10YR4/6褐色砂泥 |
| 5 | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 | 25 | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 |
| 6 | 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥 (土間?) | 26 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (土坑235) |
| 7 | 2.5Y3/3オリーブ褐色砂泥 | 27 | 10YR3/3暗褐色砂泥 (土坑242B) |
| 8 | 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 | 28 | 10YR3/2黒褐色砂泥 (土坑242B) |
| 9 | 2.5Y6/6明黄褐色漆喰 (土間?) | 29 | 2.5Y3/2黒褐色砂泥 (土坑242B) |
| 10 | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 | 30 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (土坑199) |
| 11 | 10YR3/4暗褐色砂泥 | 31 | 2.5Y5/4にぶい黄褐色砂泥 (土坑248) |
| 12 | 2.5Y3/4暗褐色砂泥 (土蔵の基礎) | 32 | 10YR3/4暗褐色砂泥 (土坑242) |
| 13 | 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 (土蔵の基礎) | 33 | 10YR3/2暗褐色砂泥 (土坑242) |
| 14 | 10YR3/2黒褐色砂泥 | 34 | 10YR3/3暗褐色砂泥 (土坑242) |
| 15 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 | 35 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 |
| 16 | 2.5Y5/4黄褐色砂泥 (土蔵の基礎) | 36 | +10YR4/4褐色粘質土 (土坑242) |
| 17 | 10YR3/4暗褐色砂泥 (土蔵の基礎) | 37 | 10YR5/6黄褐色粘質土 (流路444) |
| 18 | 2.5Y5/3黄褐色砂泥 | | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 (地山) |
| 19 | 2.5Y3/2黒褐色砂泥 | | |
| 20 | 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土 | | |



- | | | | |
|----|-----------------------------------|----|--------------------------|
| 1 | 7.5YR3/3暗褐色砂泥 (土坑11) | 16 | 2.5Y3/2黒褐色砂 (土坑369) |
| 2 | 10YR3/4暗褐色砂泥 (土坑11) | 17 | 2.5Y3/1黒褐色砂泥 |
| 3 | 7.5Y4/4褐色砂泥 (土坑11) | 18 | 10YR3/3暗褐色砂泥 (土坑68) |
| 4 | 2.5Y3/1黒褐色砂泥 (土坑11) | 19 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (土坑68) |
| 5 | 10YR4/4褐色砂泥 (土坑11) | 20 | 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 (土坑295) |
| 6 | 7.5YR4/3褐色砂泥 | 21 | 2.5Y3/2黒褐色砂泥 (土坑295) |
| 7 | 7.5YR4/4褐色砂泥 | 22 | 2.5Y3/2黒褐色砂泥 |
| 8 | 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 | 23 | 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 |
| 9 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 | 24 | 10YR5/6黄褐色粘質土 (流路444) |
| 10 | 10YR3/4暗褐色砂泥 | 25 | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 (地山) |
| 11 | 10YR3/2黒褐色砂泥 | | |
| 12 | 10YR3/3暗褐色砂泥 (土間?) | | |
| 13 | 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 + 2.5Y2/1黒色灰 (土坑65) | | |
| 14 | 2.5Y2/1黒色灰 (土坑65) | | |
| 15 | 10YR3/2黒褐色砂泥 (土坑64) | | |

図 11 2区西壁断面図 (1:150、1:80)

(2) 1区第1面 (図12～15、図版1・26・27)

調査区の中央には南北方向の溝160がある。少なくとも江戸時代中期には埋没しているが、江戸時代前期はこの溝により調査区内は東西に区画されていたと考えられる。溝の西側は柱穴や井戸・竈・土坑などが分布し、東洞院通に面した東西方向に奥行をもつ町屋が並ぶと考えられる。東側は大規模な土坑群や柱穴・井戸などが分布する。

調査区南部には井戸掘形南端・柱穴列・土蔵・土坑などが東西方向に並ぶ箇所があり、X=-110,191前後の軸線上に宅地境界が想定できる。また、調査区西端では南北方向に竈を2基検出しており、この竈が各々別の町屋に属する施設であると想定すると、X=-110,185前後の軸線上にも宅地境界が想定できる。したがって、調査区内には町屋空間が3区画あった可能性が指摘できる。町屋空間や宅地境界の詳細については、まとめて考察を述べる。

溝160 (図12、図版26) 調査区中央部で検出した南北方向の溝である。北および南へは調査区外へ延長する。護岸施設などを持たない素掘りの溝である。検出面での規模は、幅約3.0m、深さ約1.8mある。断面形はV字形を呈する。溝底面の標高は約36.0mであり、わずかに南が低い。埋土の堆積状況は、最下層の暗褐色砂質土層には流水の痕跡がある。中位は中央が低く窪み、腐植土混じりの黒褐色砂泥などが堆積する。上層は暗褐色砂泥や黒褐色砂泥などが堆積する。下層から唐津産施釉陶器碗が出土している。

溝160上面では調査区北端付近で石組溝を検出した。検出面での規模は、幅約0.7m、深さ約0.4mあり、江戸時代中期に属する遺物が出土した。さらに、後述する甕据付穴158は溝160埋没後

表1 遺構概要表

時代	遺構		備考
	1区	2区	
飛鳥時代以前	流路632・632B	流路444	
平安時代	井戸583	井戸394・395・397	
鎌倉時代	井戸580、地下室410、土坑390・399・500・624	土取穴413・419・441	
室町時代	溝330・454・490、井戸298・304・430・435・452、甕据付穴562・563・564・567・568・569・572・573・575、土坑380A	溝230・240、井戸364・365・368、集石土坑275、土取穴242・248・290・291・327・341・355	
江戸時代	溝160、井戸67・115・221・222・271、土蔵78、竈218・224、甕据付穴158・177・182、土坑20・31・37・45・71・86・89・94・96・117・144・145・155・175、柱穴26・46・122・123・126・133・138・237・238・239	柵1、井戸4・9・12・13・14・19・30・31・146・160、土蔵70・110、穴蔵1・7、石室168・169・170、集石土坑45・184、土坑46・65・75・77・95・113・123・186	

の上面で検出しており、これらの遺構の重複状況から、溝 160 は江戸時代中期までに埋没したものと考えている。なお、埋土からは多数の動物遺体が出土している。詳細は付章 1 を参照していただきたい。

井戸 115・221・222 調査区中央部から西端にかけて東西方向に並んで検出した江戸時代から近代にかけての井戸群である。いずれも掘形の平面形は円形を呈し、検出面での規模は、径約 2.5 m で、深さは 4 m まで掘り下げたが底面は未検出である。

井戸 115 は井戸側に花崗岩を使用した石組井戸で、上部に漆喰の補修痕がある。また、石組下方ではコンクリート製の井戸側を検出していることから、江戸時代から近代まで掘り下げて改修しながら使われ続けたことがわかる。

井戸 221 は石組井戸である。掘形から出土した遺物から江戸時代初頭と考えている。

井戸 222 は掘形のみで井戸側はない。石組の石材は抜き取られ転用されたのであろう。掘形から出土した遺物から江戸時代中期と考えている。

井戸 67 調査区東部北壁際で検出した井戸である。掘形の北半は調査区外にある。掘形の平面形は楕円形を呈し、検出面での規模は、東西約 2.0 m、南北約 1.2 m ある。北壁際で検出したため底面は未検出である。井戸側はなく、石組の石材は抜き取られたのであろう。出土遺物から江戸時代中期に埋没した井戸である。

土蔵 78 調査区中央南部で検出した土蔵の基礎と考えられる遺構である。基礎は掘込地業を用いた溝を周囲に巡らすもので、溝内の地業は砂と礫を交互に積み重ねている。西側は削平を受け、南側は調査区外へ広がる。検出面での規模は、東西約 4.3 m、南北 2.5 m 以上、地業の溝幅約 0.6 m、深さ約 1.2 m ある。比較的小型の土蔵であろう。出土遺物から江戸時代前期と考えられる。

竈 218・224 (図 13、図版 27) 竈は調査区西端の北端で竈 218 を、中央南寄りでは竈 224 を検出した。いずれも底面や側壁は熱を受け赤く焼け締まる。

竈 218 の南袖部ならびに奥壁は、芯に平瓦と粘土を使用して構築し、さらに灰黄褐色砂泥で固める。竈の北・西部は調査区外へ広がるため不明確であるが、平面形は東西に長い馬蹄形を呈すると考えられる。検出面での規模は、東西約 1.3 m、南北 0.5 m 以上、残存高は 0.8 m ある。断

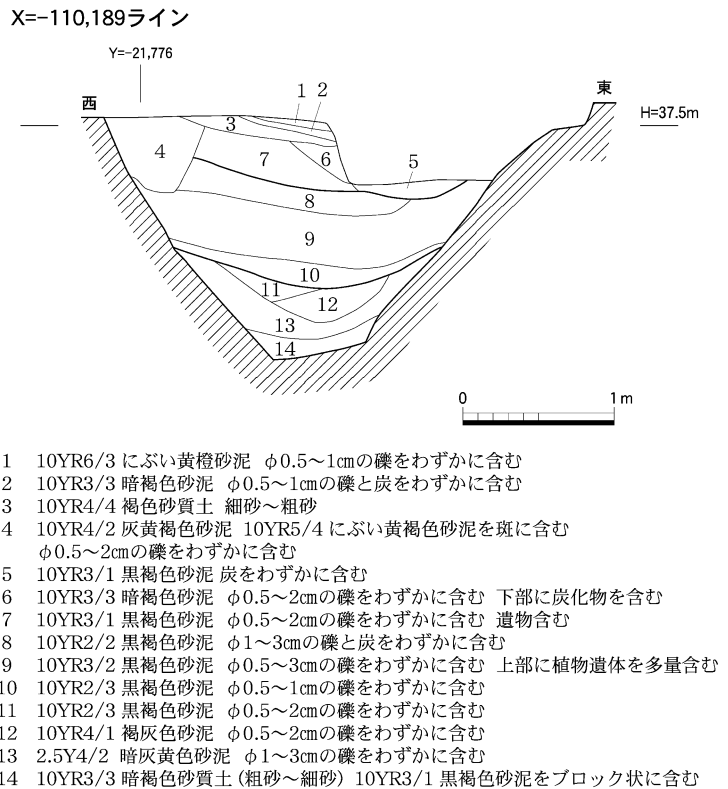


図 12 1区溝 160 断面図 (1:50)

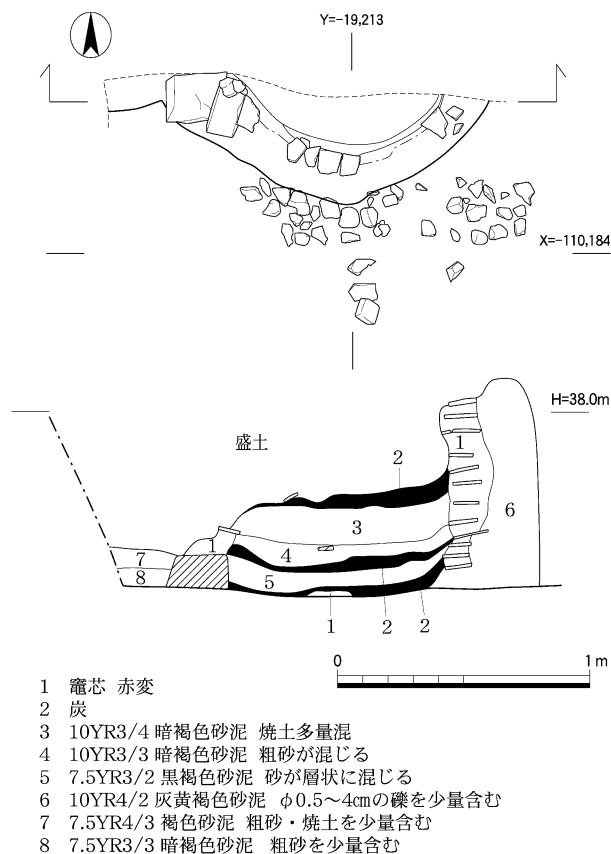


図13 1区竈218実測図(1:30)

m東に甕据付穴158が位置する。いずれも掘形底面からやや浮いた箇所に信楽産施釉陶器甕を正位置で埋めている。掘形の平面形は概して円形を呈し、検出面での規模は、径0.45~0.62m、深さ0.17~0.33mある。甕据付穴182・158の甕内底面から寛永通寶が各々1枚貼り付いた状態で出土した。検出状況からこれらの甕は便所である可能性が高い。甕据付穴177・182の掘形底面の標高は約37.5m、甕据付穴158の掘形底面の標高は約37.6mである。甕据付穴はいずれも出土遺物から江戸時代中期と考えている。

面観察からは、各々の底部を形成する粘土層を挟んで灰層を3層確認しており、補修を重ねて使用したことが窺われる。竈袖西端部に立方体の花崗岩切石が据えられており、焚口の一部であろうと考えている。

竈224は西側は調査区外にあり、東側は井戸222によって削平を受けているため、遺存状況は悪い。検出面での規模は、東西1.5m以上、南北約0.8mある。両竈とも出土遺物から江戸時代初頭から前期にかけての竈であると考えられる。

甕据付穴158・177・182(図14、図版27)調査区西半中央部で検出した東西方向に並ぶ甕据付穴である。甕据付穴158は溝160埋没後の上面で検出した。甕据付穴177と甕据付穴182の間は約1.1m、さらに甕据付穴177から約3.0

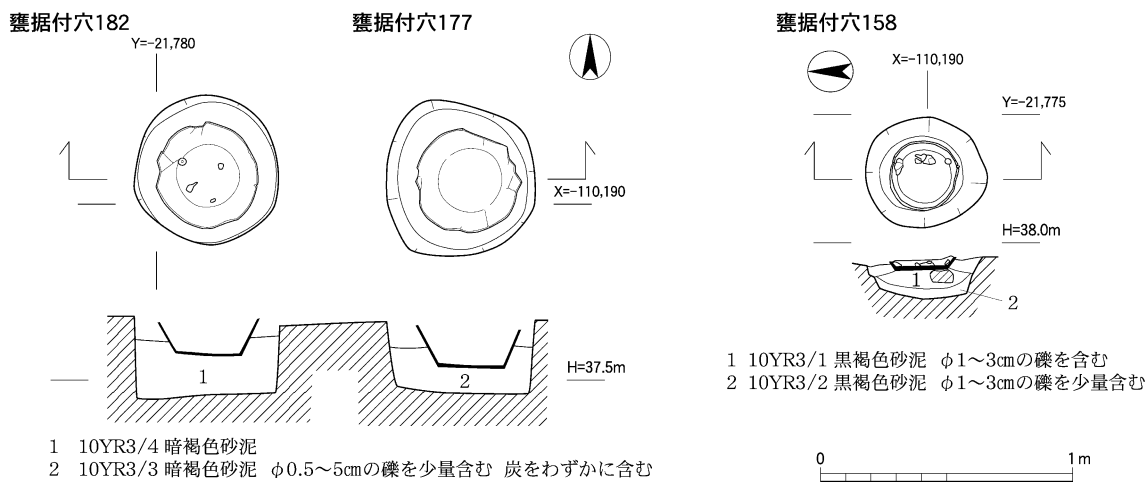


図14 1区甕据付穴158・177・182実測図(1:30)

柱穴群 調査区西半ではほぼ全域にわたり柱穴を検出したが、東半では南部を除きまばらである。建物として復元することはできなかったが、柱筋が通るものについては後述する。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈する。

柱穴 237～239 は調査区西半、井戸 221 と井戸 222 の間で検出した東西方向に柱筋を揃える柱列で、井戸 221・井戸 222 掘形南端から約 0.5 m 北に位置する。検出面での規模は、径 0.4～0.5 m、深さ 0.15～0.32 m である。柱間は約 1.2 m (4 尺) の等間である。江戸時代初頭の遺物が出土した。

柱穴 26・46・122・123・126・133・138 は調査区東半南寄りで検出した東西方向に柱筋を揃える柱列で、検出位置は井戸 115 と土蔵 78 の間、土坑 45 と土坑 37 の間を東西方向に延長する。いずれも底面に根石はない。検出面での規模は、径約 0.5 m、深さ約 0.3 m である。柱間は等間ではないが、敷地境の柵である可能性が高い。各柱穴からは江戸時代初頭から前期の遺物が出土した。

土坑 96・45・71・117 土坑 96 は調査区東端中央部で検出した土坑である。東側は調査区外に広がる。検出面での規模は、東西 2.3 m 以上、南北約 3.6 m、深さは約 1.7 m である。底面の標高は約 36.1 m である。埋土の最下層には鉄滓状遺物が堆積し、上面には炭が堆積していた。出土遺物から江戸時代前期に埋没したと考えられる。

土坑 45・71・117 は調査区東半南寄りで検出した土坑群である。土坑 71 の東肩口は調査区外へ広がる。検出箇所の特徴としては、南肩口が東西にほぼ同一線に位置し、肩口が垂直に近い形状を示すことが挙げられ、敷地境界を意識したためと考えられる。検出面での規模は、土坑 45 が東西約 6.7 m、南北約 1.4 m、深さ約 1.1 m、土坑 117 が東西約 6.7 m、南北約 3.3 m、深さ約 1.0 m である。土坑 71 の検出面での規模は、東西 3.2 m 以上、南北約 2.1 m、深さ 1.0 m である。各土坑の埋土は炭を多く含み、底面には鉄滓状遺物が堆積していた。土坑 45 と土坑 117 は重複状態にあるが、出土遺物からは江戸時代中期の土坑群であり、近接した時期に連続して形成されたと考えられる。

鉄滓状遺物出土土坑 上記土坑以外で鉄滓状遺物が出土した土坑には、東半では土坑 20・86・89・144・145、西半では土坑 175 がある。大型の土坑 20 を除けば、他は比較的小規模な土坑である。これら土坑の分布は調査区のほぼ全域に及ぶことから、土坑群が掘られた時期には調査区内に東西を画する施設はなかった可能性が高い。

土坑 94 調査区南東隅で検出した土坑である。東・南側は調査区外へ広がり、南側は 2 区の土坑 123 に連続すると考えられるため、土坑 123 とまとめて報告する。検出面での規模は、東西 1.5 m 以上、南北 5.7 m 以上、深さ約 1.7 m あり、底面の標高は約 36.4 m である。埋土は黒灰色砂泥である。

土坑 155 (図 15) 調査区中央南側で検出した土坑である。

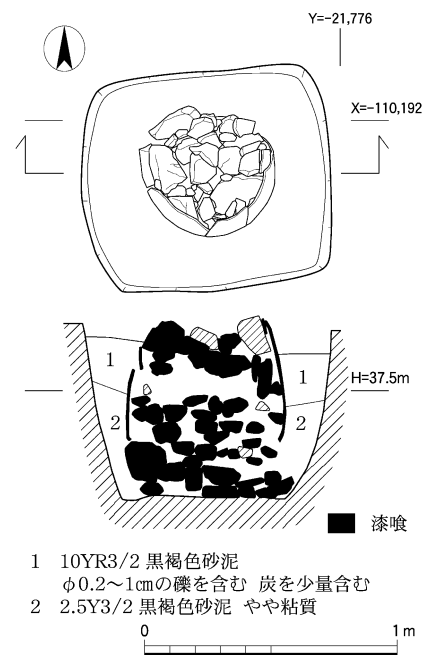


図 15 1 区土坑 155 実測図 (1:30)

平面形は方形を呈し、検出面での規模は、東西約 1.0 m、南北約 0.9 m、深さ約 0.7 m である。底部・口縁部を欠いた甕が倒立した状態で出土した。甕内には漆喰塊が詰まる。底面の標高は約 37.1 m である。江戸時代中期の土坑である。

土坑 37 調査区南東部で検出した東西に長い土坑である。検出面での規模は、東西約 2.9 m、南北約 1.6 m、深さ約 2.0 m である。壁を垂直に掘る方形土坑である。出土遺物から江戸時代中期と考えている。埴塼が出土している。

(3) 1区第2面(図16～21、図版2・28～30)

第2面では調査区中央東寄りで南北方向の2条の溝(溝330・454)を検出した。井戸は調査区西端から東端で検出し、中央部に最も密集する傾向にある。西半で地下室410や土坑390を検出した。その他調査区全域で柱穴などを検出しているが、建物としてはまとまらない。

溝330・454・490 南北方向の溝で、北および南へは調査区外へ延長する。各溝の西肩口検出地点は、東洞院大路東築地心想定線から東へそれぞれ溝330が32.6 m、溝454が30.5 mに位置する。検出面での規模は、溝330・溝454とも長さ10.2 m以上、溝330は幅約2.6 m、深さ約0.7 m、溝454は幅約1.5 m、深さ約0.5 mあり、溝底面は南に向かって緩傾斜を呈し、南端が約0.1 m低い。断面形はU字形を呈する。時期は室町時代後期前半である。

溝490は第3面で検出した遺構であり、1区第3面で図示したが、出土遺物からは第2面で検出すべき遺構であったことからこの項で示す。溝330東肩口から東へ4.5 mの地点で溝490西肩口を検出した。検出面での規模は、幅約2.2 m、深さ約1.0 mあるが、調査区南端では西肩口がやや広がり、幅は約2.8 mとなる。この溝490は、後述する2区溝230ならびに溝240に連続する。

井戸271 調査区東壁際で検出した石組井戸である。東半は調査区外に広がる。掘形の平面形は概して円形を呈し、検出面での規模は、掘形径約2.5 m、深さ約2.0 mあり、底面の標高は約35.3 mである。掘形の中央に円形の石組で井戸側を構築する。石組径は1.0 mある。石組上部は土坑94によって削平を受ける。石材は川原石が主体で花崗岩は少ない。第2面で検出した井戸であるが、出土遺物から江戸時代初頭と考えられる。

井戸298(図16) 調査区中央北寄りで検出した井戸である。掘形の平面形は円形を呈し、検出面での規模は、掘形径約2.0 m、深さ約2.4 mあり、底面の標高は約35.0 mである。掘形壁面の底面から約0.6 m上部に段がある。室町時代後期後半の遺物が出土している。

井戸430(図16、図版29) 調査区北西部で検出した石組井戸である。掘形の平面形は円形を呈し、検出面での規模は、掘形径約1.8 m、深さ約2.0 mあり、底面の標高は約35.3 mである。掘形底面に長さ0.6 m、幅0.1 mの横板を用いた方形の枅を据え、その直上に川原石を用いて円形の井戸側を構築する。石組内径は0.85 mある。鎌倉時代後期から室町時代初頭の井戸である。

井戸304(図16、図版29) 調査区中央東部で検出した石組井戸である。掘形の平面形は円形を呈し、検出面での規模は、掘形径約1.8 m、深さ約2.1 mあり、底面の標高は約35.2 mである。

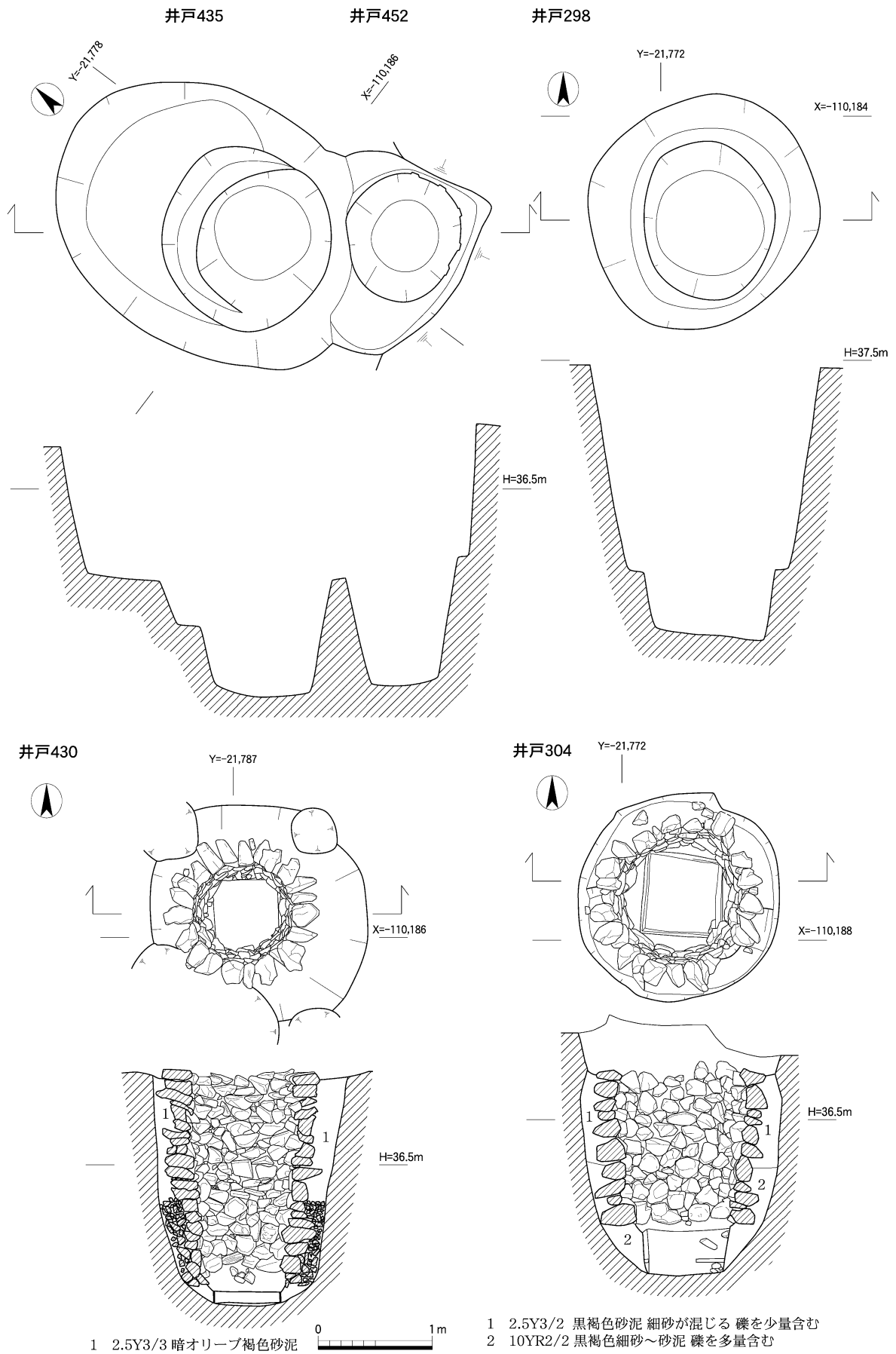


図 16 1区井戸 298・304・430・435・452 実測図 (1:50)

底面に長さ 0.7 m、幅 0.3 mの横板を用いた方形の枅を据え、直上に川原石を用いて円形の井戸側を構築する。石組内径は 1.15 mある。鎌倉時代後期から室町時代初頭にかけての井戸である。

井戸 435・452（図 16、図版 29） 調査区中央西部で検出した井戸である。井戸 435・452 は重複し、井戸 452 が新しい。井戸側の構造は円形縦板組である。掘形の中央部に縦板を円形に立て並べ井戸側とする。縦板組の径は約 1.0 mある。底面には曲物を据える。縦板組の板は腐食が激しく、枚数や幅などは確認できなかった。樹種はコウヤマキである。掘形の平面形は楕円形を

呈し、検出面での規模は、井戸 435 が長径約 2.9 m、深さ約 2.2 mあり、底面の標高は 34.7 mある。井戸 452 は長径約 1.7 m、深さ約 2.3 mあり、底面の標高は 34.78 mある。井戸の時期は出土遺物から井戸 435 は室町時代前半、井戸 452 は室町時代後期前半である。

地下室 410（図 17、図版 30） 調査区南西部で検出した南北に長い土坑である。検出面での規模は、東西 2.5～3.0 m、南北約 5.8 m、深さ約 1.4 mあり、底面はほぼ平坦である。底面の標高は約 35.9 mあり、一例として鎌倉時代の井戸 580 の底面標高約 35.1 mより高いので、壁面や底面からの水の浸入はなかったものと思われる。壁面は底面に対し垂直に近い箇所とやや外側へ角度をもつ箇所がある。東・西・南辺の壁際底面には、長径 10 cm前後の川原石を一部欠落した

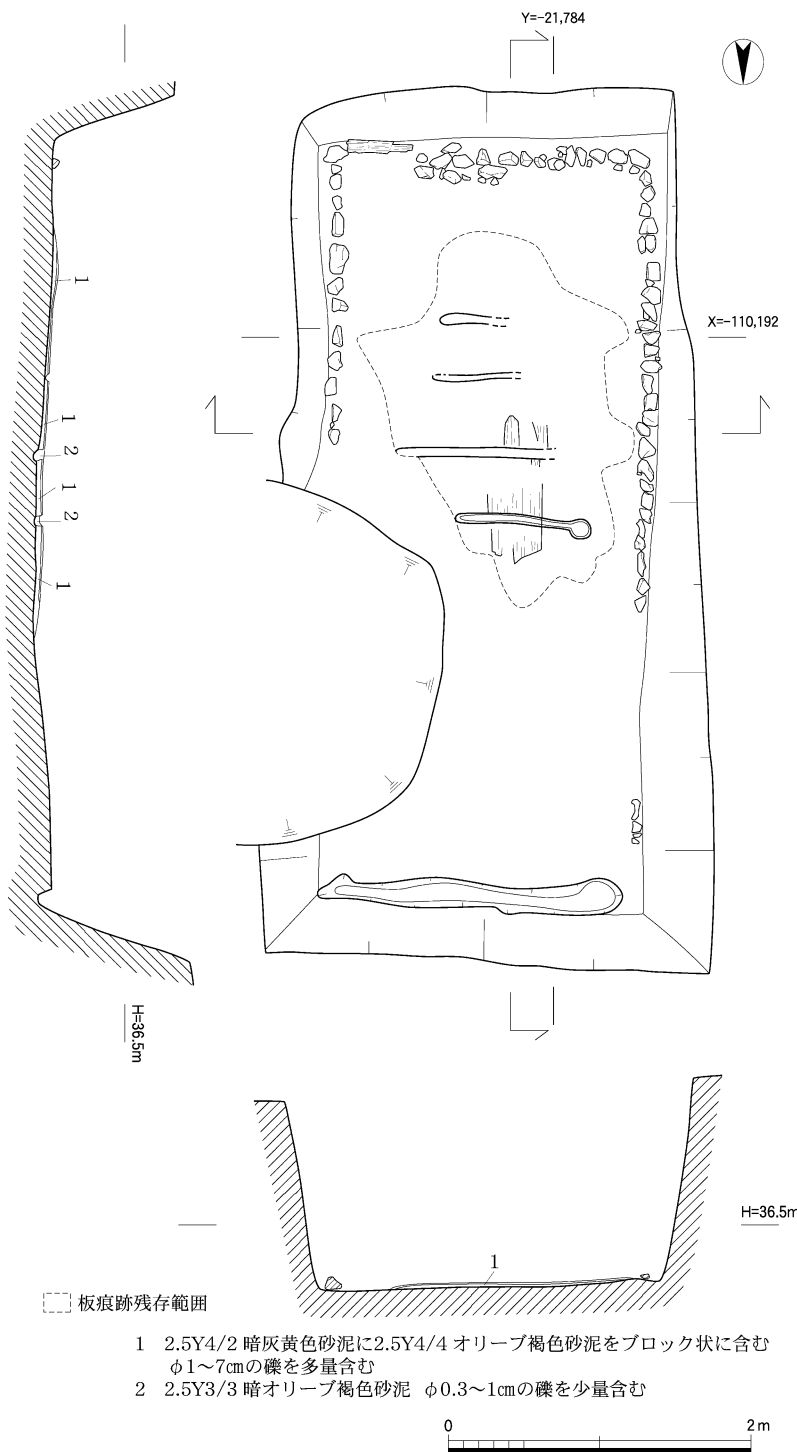


図 17 1区地下室 410 実測図（1：50）

箇所もあるが、各辺に長軸を平行して列状に並べる。北壁際底面には石を抜き取ったと考えられる溝状の痕跡がある。底面南半には東西方向を示す長さ 1.0 m 前後、幅 0.05 m 四方の角材を南北に 0.5 m 間隔で 3 本並べ、その上に幅約 0.2 m の板を南北方向に敷いた痕跡を検出した。板痕跡は東西約 1.8 m、南北約 2.5 m の範囲に及ぶ。底面に根太を据え上面に板を敷いた板張りであると考えられるが、南東隅の石列上に東西方向を示す角材痕跡を検出していることから、壁面の擁壁材が倒れ込んだ可能性もある。地下室である「穴蔵」が想定できる。埋土から土師器・瓦器などが多量に出土した。埋没した時期は鎌倉時代後期である。

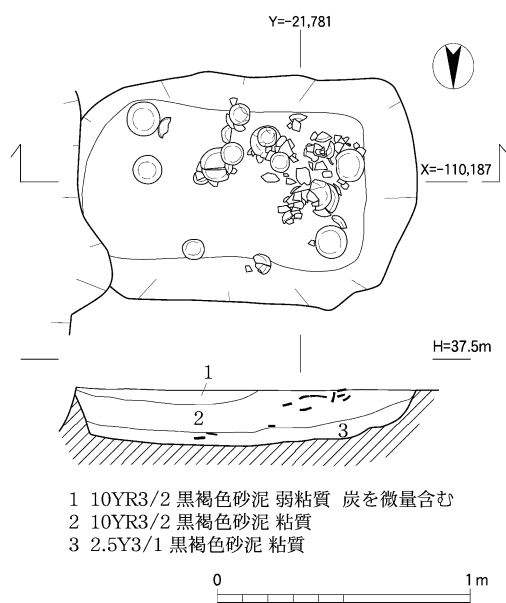


図 18 1区土坑 390 実測図 (1 : 30)

土坑 380 A 調査区西部中央で検出した溝状の土坑である。地下室 410 埋土上に位置し、東側を井戸 221、西側を井戸 222 に攪乱される。検出面での規模は、東西 3.1 m 以上、南北約 1.7 m あり、深さ約 0.9 m ある。埋土中から土師器皿が多量に出土した。出土遺物から室町時代後期後半と考えられる。

土坑 390 (図 18、図版 28) 地下室 410 から北東に約 2 m の地点で検出した土坑である。東肩口は削平を受けるが、平面形は東西に長い楕円形を呈する。検出面での規模は、東西 1.3 m 以上、南北約 0.9 m、深さ約 0.2 m あり。北東部を中心に土師器皿が多量に出土した。出土遺物から鎌倉時代と考えられる。

(4) 1区第3面 (図 19 ~ 21、図版 3・31)

検出した平安時代の遺構について四行八門区画で示すと、平安時代中期の井戸 583 は、東洞院大路東築地心想定線から東に約 14 m の地点、六門・七門界想定線の北側で検出した。鎌倉時代の遺構は、井戸 583 の南側で土坑 399 を、調査区東半中央で井戸 580 を検出した。また、東半中央北側では、室町時代前期の甕蔵であると考えられる規則性をもって配置された甕据付穴を 9 基検出した。

井戸 583 (図 19、図版 31) 調査区西部で検出した井戸である。掘形は東西が削平を受けるが、平面形は円形を呈する。検出面での規模は、掘形径約 2.1 m、深さ約 1.4 m あり、底面の標高は約 35.1 m である。検出面から約 1.0 m 下がった位置で掘形がすばまり径約 1.2 m の窪みとなり、この箇所には曲物を据えた可能性がある。出土遺物から平安時代中期と考えている。

井戸 580 (図 19) 調査区中央部で検出した方形縦板横棧組井戸である。掘形の平面形は隅の丸い方形を呈する。検出面での規模は、東西約 1.9 m、南北約 1.7 m、深さ約 0.75 m あり、底面の標高は約 35.1 m である。掘形の北東寄りに井戸側を据える。井戸側は一辺約 0.8 m、高さ約 0.2

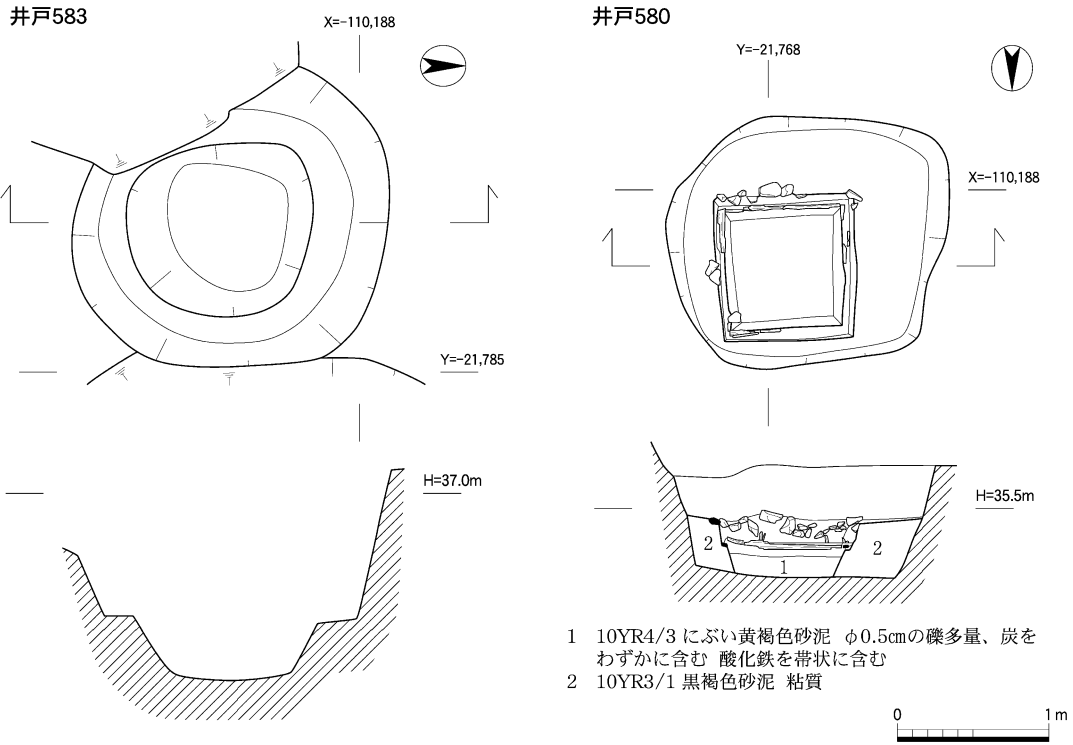


図 19 1区井戸 580・583 実測図 (1:50)

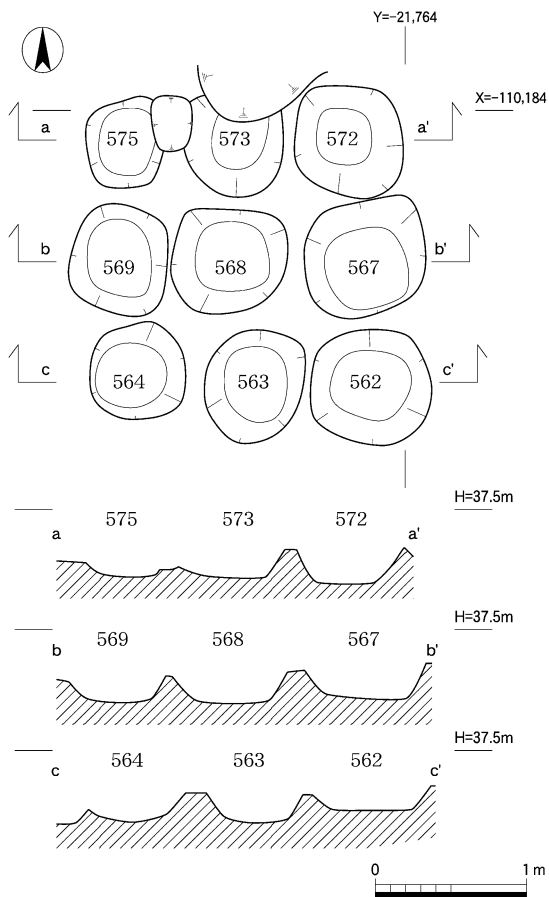


図 20 1区甕据付穴群実測図 (1:50)

mある。井戸側の遺存状態は悪いが、樹種はスギである。鎌倉時代の遺物が出土した。

甕据付穴群 (図 20、図版 31) 調査区東半中央の北側で検出した甕を据え付けたと考えられる土坑群である。土坑が規則性をもって並ぶ遺構であるが、甕本体は未検出である。掘形の検出箇所周囲は削平を受けているが、検出状況から東西方向ならびに北側の調査区外へさらに広がる可能性がある。甕据付穴は南北 3 列、東西 3 列に並び、甕据付穴 562・563・564・567・568・569・572・573・575 の合計 9 基検出した。据付穴の間隔は、据付穴心々間で平均 0.8 m あることから、最大径 0.8 m の大甕を据えることが可能であると考えられる。据付穴の検出面での規模は、径の平均約 0.6 m、深さ約 0.2 m である。据付穴を覆う施設については不明である。油や酒などの液体を貯蔵していた甕を据え付けたものと考えられる。出土遺物から鎌倉時代末から室町時代初頭と考えている。

土坑 500 甕据付穴の南東部、甕据付穴 562 に接して検出した土坑である。掘形の平面形は円形を呈し、検出面での規模は、径約 1.7 m、深さ約 1.0 m あり、底面の標高は約 36.4 m である。底面は平坦である。出土遺物から鎌倉時代前期と考えている。

土坑 624 調査区西半で検出した土坑である。南側は地下室 410 によって削平を受けるが、平面形は方形を呈する。検出面での規模は、東西約 3.0 m、南北 1.7 m 以上、深さ約 1.4 m あり、底面の標高は地下室 410 とほぼ同一である。出土遺物から鎌倉時代前期の遺構と考えられる。

土坑 399 (図 21) 調査区南西部で検出した土坑である。平面形は東西にやや長い方形を呈し、検出面での規模は、長さ約 1.6 m、幅約 1.5 m、深さ約 1.3 m あり、底面の標高は 36.2 m である。底面は平坦である。出土遺物から鎌倉時代と考えられる。

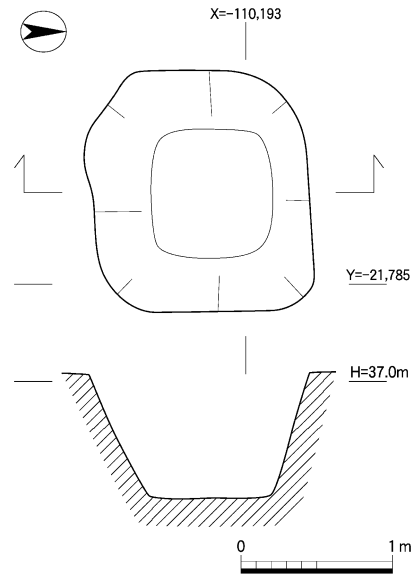


図 21 1区土坑 399 実測図 (1 : 50)

(5) 1区第4面 (図版4・32)

第4面では縄文時代後期から古墳時代にかけての流路 632・632B を検出した。

流路 632 (図版4・32) 流路 632 は調査区中央部から西部にかけて検出した流路である。北北東から南南西を示し、北北東および南南西へは調査区外へさらに延長しており、西肩口は未検出である。流路内東部で高まりを検出したことから、高まり以東は流路 632 B として遺物を取りあげている。流路の検出面での規模は、幅 17.0 m 以上あり、東肩口から約 6.0 m に前述した高まりがある。深さは約 2 m あり、底面の標高は北端が約 35.8 m、南端が 35.7 m あり、南南西方向に流れていたと考えられる。堆積層は褐色砂礫層が主体であり、最下層には暗黄灰色粘土ブロックが混在する砂礫層が堆積する。粘土ブロックが混在する状況は、洪水により上流側の肩口が削り取られた状況を示していると考えられる。最下層である第4層から縄文時代後期・晩期の土器が出土した。共伴して炭化材が出土しているが、樹種同定の結果クリであることが判明した。この炭化材について放射性炭素年代測定を実施したところ、B.C.1291 ~ 1131 年を示すという結果が得られ、縄文時代晩期前半に対応することが判明した。このことから流路 632 は縄文時代晩期以降に堆積が進行したものと考えられる。結果の詳細については、付章2を参照していただきたい。第1層から第3層および流路 632B からは弥生時代中期後半から古墳時代中期の土器が出土しており、当該期まで流路が存続したと考えられる。

なお、調査地北側の調査では、調査区西部で南西に流れる流路を検出しており、流路 632 の延長部と考えられる。北側の調査では縄文時代晩期から飛鳥時代の遺物が出土した。¹⁾

(6) 2区第1面 (図 22 ~ 28、図版 5・33・34)

蛸薬師通に面した南北方向に奥行をもつ町屋が並ぶと考えられる区域である。調査区中央には現行町境（蛸薬師通から約 20 m 北側）があり、北側が御射山町、南側が泉正寺町となる。調査では現行町境直下で江戸時代前期の東西方向の柵 1 を検出しており、現行町境は柵 1 を踏襲したものと

考えられる。この柵 1 以南では江戸時代初頭以降の遺構を集中して検出した。泉正寺町側の町屋の奥行は御射山町側の町屋の奥行に比べ短いこととなる。

柵 1（図 22）調査区中央で検出した東西方向の柱穴列で、東から柱穴 107・190・96・92 および土坑 77 の底面で根石を検出した。4 間分検出しており、根石を据えるものと据えないものがある。柱間は約 2.0 m あり、京間（1.97 m）の間隔をとる。柱穴の平面形は円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径約 0.4 ~ 0.5 m、深さ約 0.2 m あるが、土坑 77 底面で検出した根石は約 0.5 m ある。出土遺物から江戸時代前期と考えている

穴蔵 1（図 23、図版 33・34）調査区南東隅で検出した穴蔵である。検出位置から蛸薬師通に面した町屋敷地内に造られた穴蔵と考えられる。土坑を掘り、周囲に石材を積み上げ擁壁とする。平面形は方形を呈するが、北東部は東にやや張り出し、この箇所に昇降用の階段を取り付ける。石組擁壁に使用される石材は花崗岩が多く、内側に平坦面を向けるが、大きさは様々である。石組内面は全面にわたり火を受けたことにより赤変している。検出面での規模は、掘形東西の長さは階段部分を含めて約 4.1 m、南北約 3.7 m、深さ約 0.6 m ある。石組内法は 2.5 m でほぼ正方形を呈する。階段は石を 3 段積み上げ敷設している。床面はほぼ平坦である。南西隅床面には礎石と考えられる石材が据えてある。床面ならびに石材の構築方法を確認するため床面を断ち割ったところ、深い箇所では床面から約 0.5 m 掘り窪めていることが判明した。掘

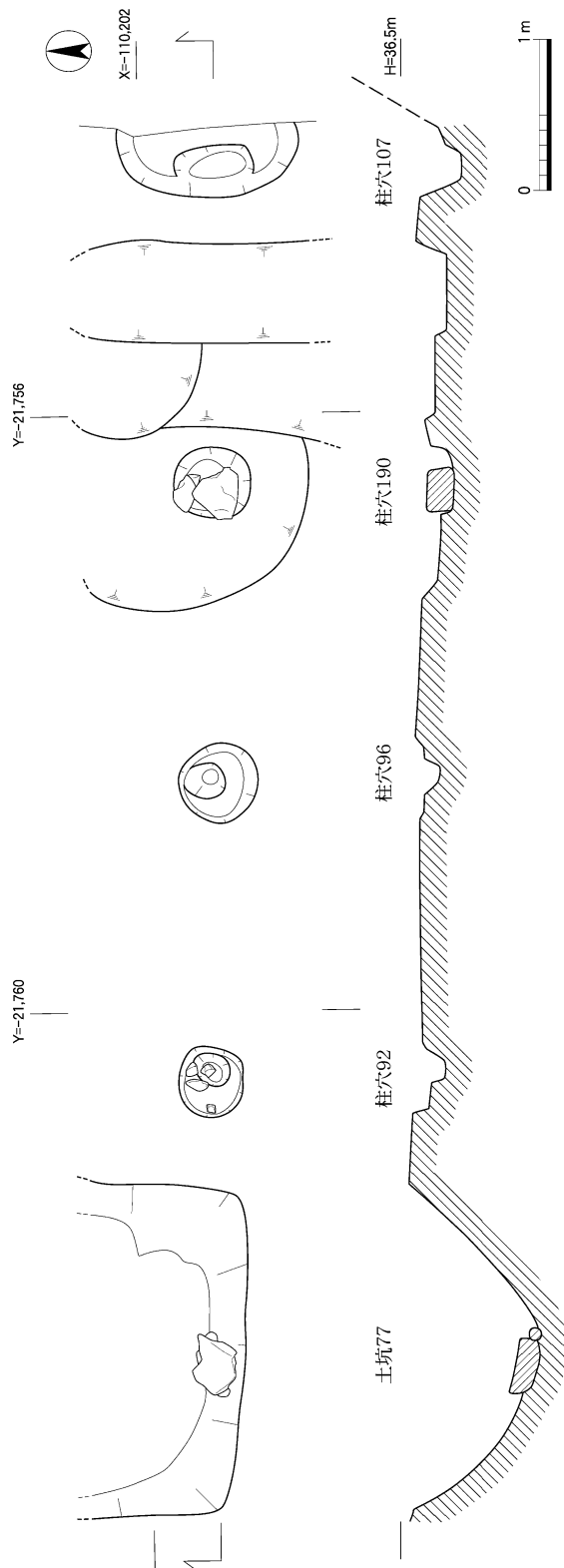
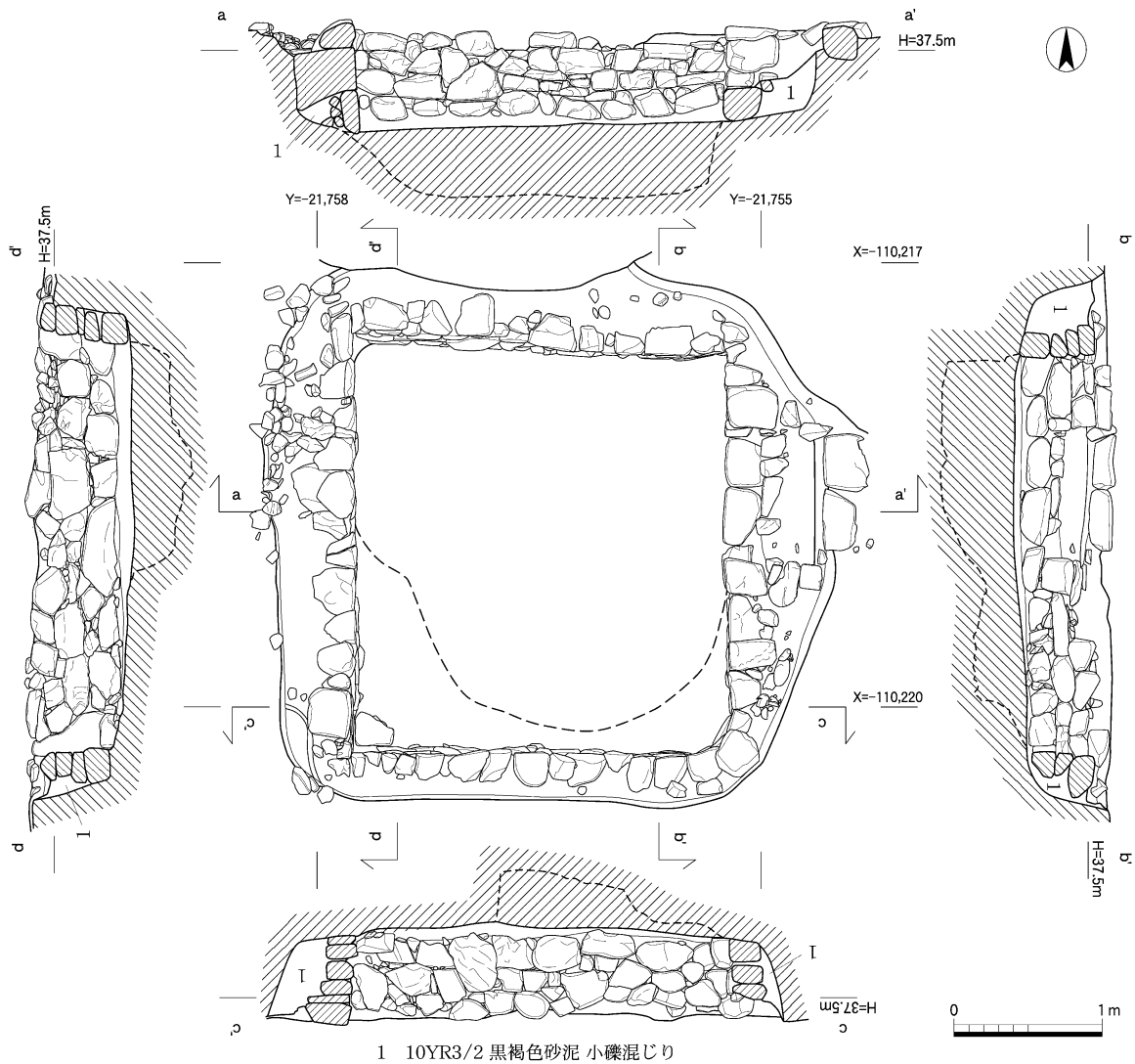


図 22 2区柵 1 実測図 (1 : 50)



1 10YR3/2 黒褐色砂泥 小礫混じり

図 23 2区穴蔵1実測図(1:50)

り窪めた後は焼土を用いて石組底面際まで入れ土・整地し床を造っていたが、西面石組のみは石組下にまで入れ土が及んでいる。この状況から、一つには穴蔵構築段階で焼土の廃棄物整理穴と兼用の土坑を前もって掘り下げた可能性、一つには石組西面の石組が作り直された可能性などが想定できる。この床面入れ土中から蓋をした状態で土師器壺が出土している。何らかの祭祀に伴うものであろう。床面の標高は約 36.9 m である。穴蔵埋土からは焼土や焼けた棧瓦などが多量に出土しており、穴蔵造成後に起こった火災の後片づけがなされたと考えられる。出土遺物からは、江戸時代中期に造られ、江戸時代後期に火災を受け埋め戻されたことが窺われる。

穴蔵 7 (図 24) 調査区南半西寄りで見出した、石組を伴う穴蔵である。平面形はやや歪な南北に長い長方形を呈し、北肩口は削平を受ける。検出位置から蛸薬師通に面した町屋敷地内に造られた穴蔵と考えられる。検出面での規模は、掘形は東西約 2.4 m、南北約 4.0 m、深さ約 0.5 m である。床面は粘土を貼り、平坦面を呈する。底面の標高は約 37.1 m である。床面ならびに石組面には火を受け赤変した箇所がある。掘形の出土遺物から穴蔵 1 より古く江戸時代初頭に遡る可能性が高いが、穴蔵 1 と同じく江戸時代後期の火災後の廃棄物投棄穴として埋め戻されていたことが判明

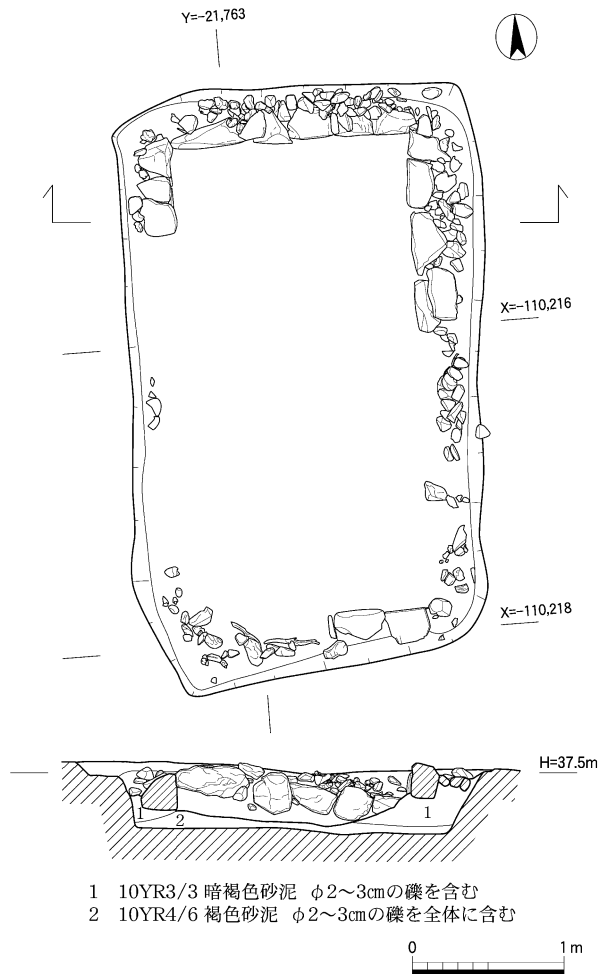


図24 2区穴蔵7実測図(1:50)

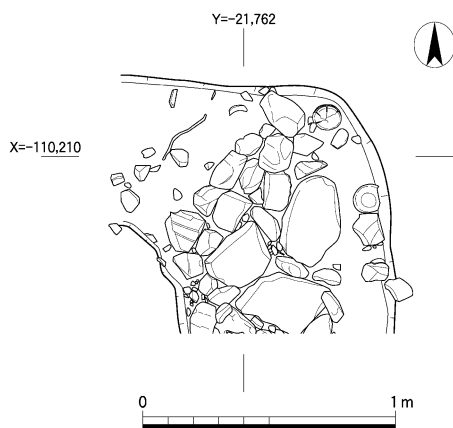


図25 2区土蔵70土器出土状況平面図(1:30)

後述する土坑46によって削平を受ける。検出面での掘形の規模は、一辺約1.5m、深さ約0.9mある。石室の平面形は方形を呈し、石組内法は0.7~0.8mある。埋土から稲藁灰が出土した。

石室169は上部を穴蔵1によって削平を受ける。検出面での掘形の規模は、一辺約1.4m、深さ約0.9mある。石組の平面形は隅の丸い方形を呈し、石組内法は約0.7mある。

石室170も上部を穴蔵1によって削平を受ける。検出面での掘形の規模は、一辺1.0~1.1m、

した。

土蔵70(図25、図版34)調査区南西部で検出した土蔵である。穴蔵7北端から約0.5m北に位置する。平面形は方形を呈し、検出面での規模は、一辺約4.0mある。周囲に地業を敷設するための溝を掘る。溝は断面形がU字形を呈し、深さ約0.6mある。溝内には砂と砂礫を交互に積み重ね地業とする。地業北東隅には長径25~45cm大の石を敷き、伏せた状態で土師器皿が4個体出土した。土蔵の構築に伴う地鎮を示す可能性がある。土師器の年代から江戸時代前期である。

土蔵110 調査区北半東壁際で検出した土蔵である。大半が調査区外へ広がるため全体の規模は不明であるが、地業を敷設するための溝の西側を検出したと考えている。検出面での規模は、南北約10.0mある。溝の断面形はU字形を呈し、溝幅約1.0m、深さ約1.0mある。溝内には砂と砂礫を約0.1m程の厚さで交互に積み重ね、突き固めて地業としている。出土遺物から江戸時代前期と考えられる。

石室168・169・170(図26、図版34)調査区南東部で検出した石室である。石室168は後述する井戸9、集石土坑45と南北方向に並ぶ。また、石室169・石室170も南北方向に並ぶ。掘形の平面形はやや歪な方形を呈し、いずれも長径0.1m前後の川原石を用いて、掘形内に石組を作る。

石室168は南北が後世の遺構に、上部は

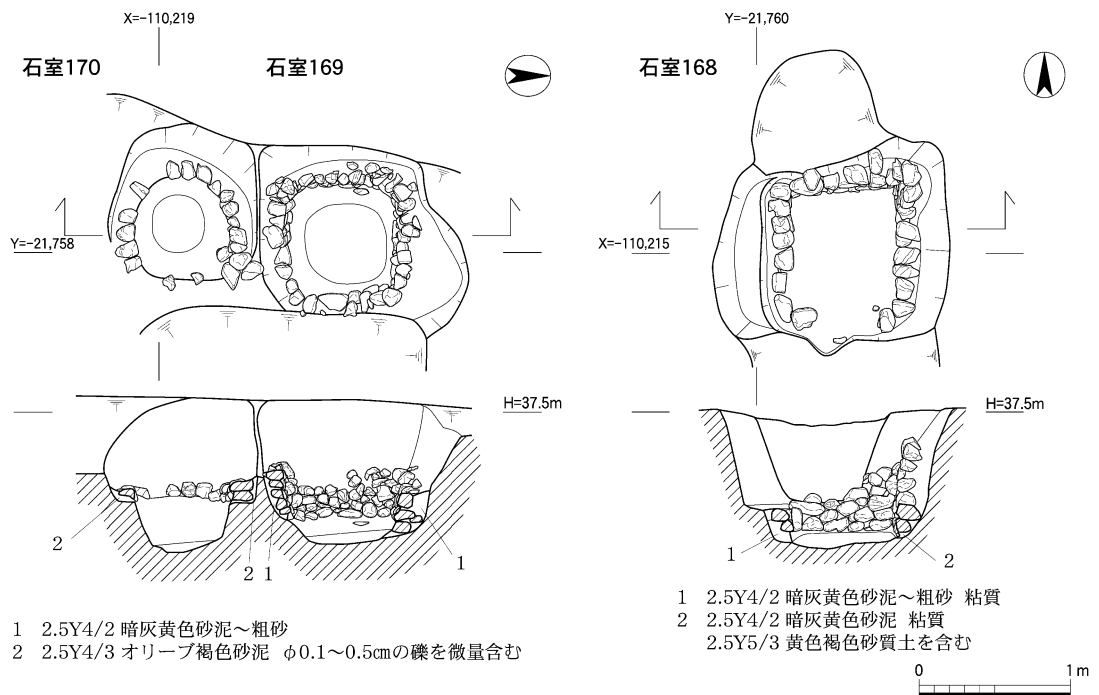


図 26 2区石室 168・169・170 実測図 (1 : 50)

深さ約 1.0 m である。石組の平面形は円形を呈し、石組内法径は約 0.6 m である。底面は石組下面から約 0.3 m 掘り下げられていた。

石室 168・169・170 はいずれも出土遺物から江戸時代前期である可能性が高い。遺構の性格は不明である。

集石土坑 45 (図 27) 調査区南東部、石室 168 の北側に近接して検出した集石土坑である。平面形はやや歪な円形を呈し、検出面での規模は、径約 1.0 m、深さ約 0.4 m である。径 0.1 ~ 0.3 m の礫を土坑内全面に詰め込む。出土遺物から江戸時代前期と考えられる。後述する井戸 9 の南に近接する位置にあるため水回りに関連する遺構の可能性はある。

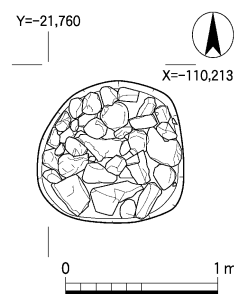


図 27 2区集石土坑 45 平面図 (1 : 50)

集石土坑 184 調査区南東部、石室 170 の南西部に近接して検出した集石土坑である。上部は穴蔵 1 によって削平を受ける。平面形は東西に長い楕円形を呈し、検出面での規模は、東西約 0.8 m、南北約 0.6 m、深さ約 0.2 m あり、底面の標高は約 37.0 m である。出土遺物から江戸時代初頭と考えられる。

井戸 146・160 調査区南端東寄りで検出した井戸である。井戸 146・160 は重複し、井戸 160 が新しい。掘形の平面形は円形と考えられる。検出面での規模は、井戸 160 が径約 1.4 m、井戸 146 は径約 1.1 m である。南壁際で検出したため底面は未検出である。井戸側は井戸 160 が花崗岩切石を用いた石組みである。井戸 146 は井戸側がないことから、井戸 146 の石材が井戸 160 に転用された可能性がある。出土遺物からいずれも江戸時代初頭である。

井戸 9 調査区中央南寄りで検出した円形石組井戸である。掘形の平面形はほぼ円形を呈し、検出面での規模は、掘形径約 1.2 m、深さ約 2.2 m あり、底面の標高は約 35.3 m である。掘形の

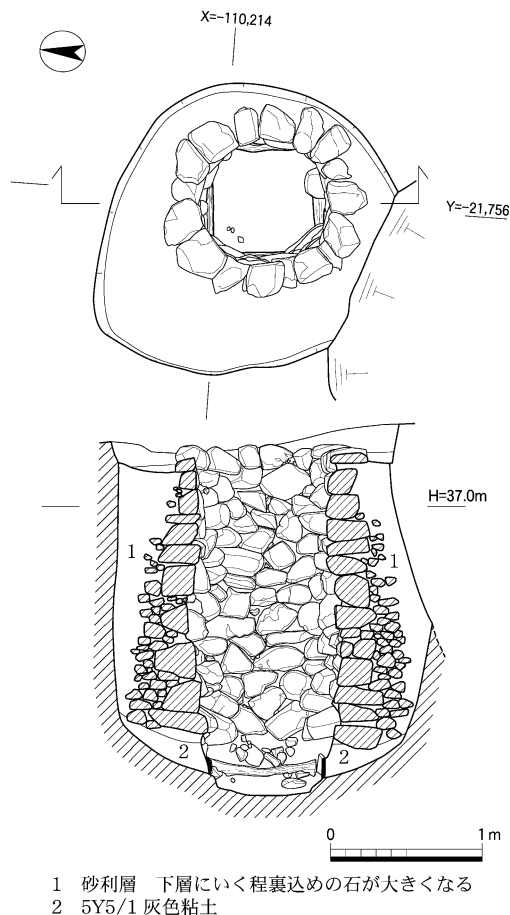


図 28 2区井戸4実測図(1:50)

規模は、径約 2.0 m、深さ約 2.4 mあり、底面の標高は約 35.8 mである。石組井戸側には花崗岩と川原石を用いており、石組内法は 0.85 mある。石組直下に長さ 0.75 m、幅約 0.1 mの横板を方形に組んだ枅を据える。樹種は二葉マツである。出土遺物から江戸時代前期と考えている。

井戸 12・19 調査区北端部で検出した円形瓦埴積井戸で、東西方向にほぼ並ぶ位置にある。井戸心々間は約 5.5 mある。掘形の平面形はやや歪な円形を呈し、検出面での規模は、井戸 12 は径約 1.2 m、深さ約 3.2 mあり、底面の標高は約 34.2 mである。井戸 19 は径約 0.8 m、深さ約 3.2 mあり、底面の標高は約 34.1 mである。井戸 19 は石組井戸を壊して設置されていた。出土遺物から幕末から近代に属すると考えられる。

井戸 13・14 調査区北中央部で検出した井戸である。東西方向にほぼ並ぶ位置にある。井戸心々間は約 2.0 mある。井戸 13 は掘形の平面形は方形を呈し、検出面での規模は一辺約 1.6 m、深さ約 2.2 mあり、底面の標高は約 35.2 mである。井戸側は未検出である。井戸 14 は掘形の平面形は歪な円形を呈し、径約 1.2 m、深さは未確認である。井戸側は未検出である。出土遺物から幕末から近代に属すると考えられる。

土坑 46・95 調査区中央南半で検出した土坑である。平面形は南北に長い長方形を呈し、北肩口は削平を受ける。検出面での規模は、東西 1.0 ~ 1.7 m、南北 2.8 ~ 3.2 m、深さ約 1.0 mある。出土遺物から土坑 46 は江戸時代初頭、土坑 95 は江戸時代中期であると考えられる。

やや東寄りに平面形円形の石組井戸側を設ける。石組の材質は花崗岩で、石組内法は径約 0.6 mあり、石組底面には横板で組んだ方形枅を据えていた。樹種は二葉マツである。掘形から出土した遺物から江戸時代初頭に掘られた可能性が高いが、石組内に埋まった遺物は江戸時代後期である。

井戸 30・31 調査区南西壁際で検出した井戸である。井戸 30・31 は重複し、井戸 30 が新しい。掘形の平面形はほぼ円形を呈し、検出面での規模は、井戸 30 は径約 2.3 m、井戸 31 は径約 1.1 mある。西壁際で検出したため底面は未検出である。井戸 30 には花崗岩を用いた石組井戸側を設けるが、上部の石組は抜き取られていた。井戸 31 は井戸側がないことから、井戸 31 の石材が井戸 30 に転用された可能性がある。出土遺物からいずれも江戸時代前期である。

井戸 4 (図 28) 調査区南半東部で検出した円形石組井戸である。掘形の南および北西隅は削平を受ける。掘形の平面形はほぼ円形を呈し、検出面での

土坑 123 トレンチ北東隅で検出した土坑で 1 区土坑 94 に繋がる。南北 6.0 m 以上、深さ約 1.7 m あり、底面の標高は約 36.4 m である。東西は 1.2 m 分検出したが、東端は調査区外のため不明である。

土坑 113 調査区北半東壁際で検出した土坑である。土蔵 110 の下面で検出した。土坑 123 の南約 1.3 m に位置する。東肩口は調査区外へ広がる。平面形は楕円形を呈し、検出面での規模は、東西 2.1 m 以上、南北約 4.6 m、深さ約 1.8 m あり、底面の標高は約 35.8 m である。埋土は多数の土層が堆積するが 3 層に大別でき、各層には炭層が薄く堆積していることから、一定期間開口したことが想定できる。出土遺物から江戸時代初頭と考えられる。

土坑 75 調査区中央西半で検出した土坑で、土蔵 70 の北西約 2 m に位置する。平面形は南北に長い長方形を呈し、検出面での規模は、東西約 0.5 m、南北約 1.0 m、深さ約 1.0 m あり、底面の標高は約 36.5 m である。埋土から多量の稲藁灰が出土した。出土遺物から江戸時代前期と考えられる。

土坑 77 調査区中央部西半で検出した土坑である。平面形は方形を呈し、検出面での規模は、東西約 2.2 m、南北約 2.7 m、深さ約 1.1 m あり、底面の標高は約 36.3 m である。底部には凹凸がある。埋土には灰・炭・炭化材および陶磁器類を多数包含しており、塵捨土坑ないしは火災処理土坑の可能性がある。分析結果から灰は稲藁やススキ、炭化材はカバノキ属・ブナ属・クヌギ節・クリと同定された。出土遺物から江戸時代前期と考えられる。

土坑 65 調査区南半西壁際で検出した土坑で、西肩口は調査区外に広がる。平面形はほぼ円形を呈する。検出面での規模は、東西約 1.1 m、南北約 1.7 m、深さ約 1.0 m あり、底面の標高は約 36.6 m である。埋土には稲藁灰が詰まる。その他、焼けた魚類の骨破片・炭化米・広葉樹の炭化材などが出土した。出土遺物から江戸時代前期と考えられる。

土坑 186 調査区中央で検出した土坑である。平面形は歪な方形を呈する。検出面での規模は、南北約 2.8 m、東西約 1.7 m、深さ約 0.6 m あり、底面の標高は約 36.8 m である。埋土から多量の稲藁灰が出土した。出土遺物から江戸時代前期と考えられる。

(7) 2 区第 2 面 (図 29 ~ 31、図版 6・35)

調査区中央部には後述する流路 444 があり、流路内に堆積した粘質土の採取を目的とした土取穴が多数分布する。土取穴が埋め立てられた段階で、1 区溝 490 の南延長と考えられる溝 230 および溝 240 が造られた。その他に井戸や土坑などを検出した。

溝 230・240 (図 29、図版 35) 溝 230 は調査区中央で検出した南北方向の溝である。北は 1 区溝 490 に連続し、南は調査区外へ延長する。検出面での規模は、幅 1.8 ~ 2.2 m、深さ約 0.9 m あり。底面の標高は 1 区北端で約 36.3 m、2 区南端で約 36.2 m あり、南側が約 0.1 m 低い。埋土最下層に砂層が堆積しており、流水があったと考えられる。

溝 240 は調査区西半北端で検出した溝で、溝 230 より新しい。溝 490 から南へ延長し、X=-110,197 付近で西折する。検出面での規模は幅約 1.0 m、深さ約 0.5 m あり。出土遺物から溝

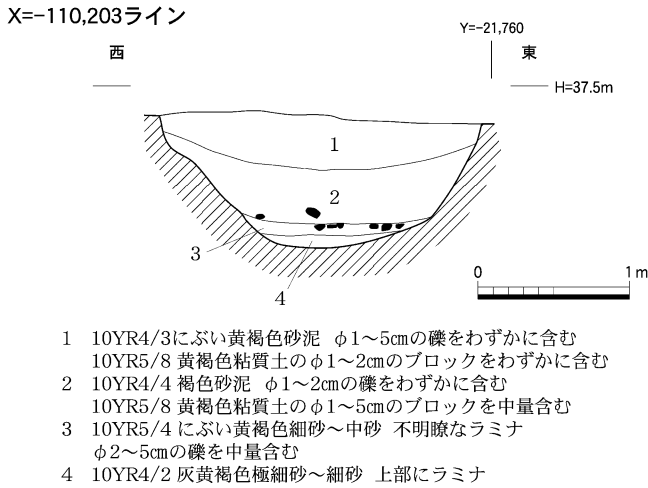


図 29 2区溝 230 断面図 (1:50)

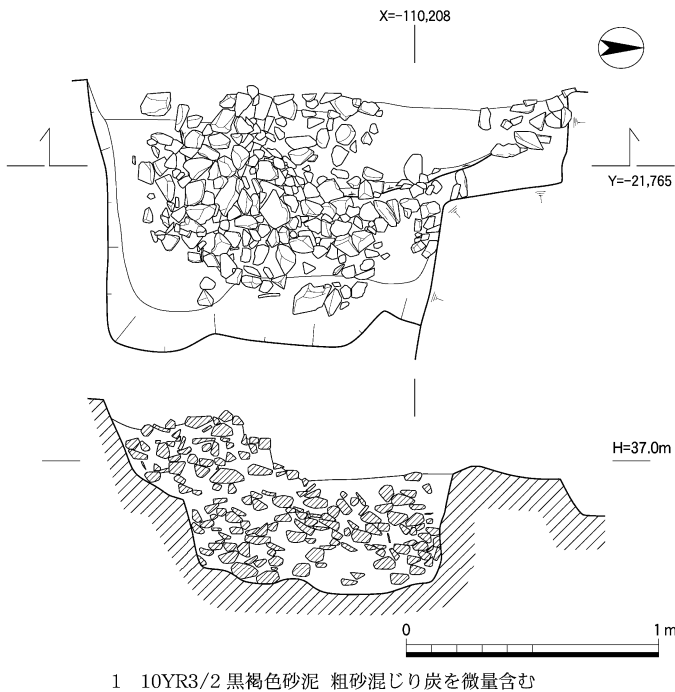


図 30 2区集石土坑 275 実測図 (1:30)

230・240とも室町時代後期後半と考えられる。

集石土坑 275 (図 30、図版 35) 調査区中央西壁際で検出した土坑である。西肩口は調査区外に広がる。北東隅は削平を受ける。平面形は方形を呈すると考えられ、検出面での規模は、東西 1.0 m 以上、南北約 1.7 m、深さ約 0.8 m あり、底面の標高は約 36.5 m である。土坑内には径 2 ~ 10 cm の礫を底面まで密に埋め込む。出土遺物から室町時代後期と考えられる。

井戸 364 (図 31、図版 35) 調査区中央南端で検出した石組井戸で、溝 230 により上部は削平を受ける。掘形の平面形は円形を呈し、検出面での規模は、径約 2.1 m、深さ約 2.3 m あり、底面の標高は約 35.2 m である。底面に 2 段の枡を据え、枡上部に平面形円形の石組を構築する。下段は長さ 0.55 m、幅約 0.2 m の横板を、上段は長さ 0.75 m、幅約 0.2 m の横板を方形に組み上げる。横板は樹種はヒノキである。石組は上端内法径約 1.1 m、下端内法径約 0.8 m あり、下に向かってややすぼまる。出土遺物から室町時代前半で

ある。

井戸 368 (図 31、図版 35) 井戸 368 は調査区北部東側で検出した石組井戸である。西肩口は溝 230 によって削平を受ける。掘形の平面形はやや歪な円形を呈し、検出面での規模は、径約 1.6 m、深さ約 2.1 m あり、底面の標高は約 35.4 m である。底面に長さ 0.65 m、幅 0.22 m の横板を使用し方形枡を据え、その上部に川原石を用いた内法径 0.85 m の石組を構築する。出土遺物から室町時代前半に造られ、室町時代後期後半に埋没した可能性が高い。

井戸 365 (図 31) 調査区北部西側で検出した石組井戸で、東に近接する井戸 368 と東西方向に並ぶ位置にある。井戸 368 とはほぼ同規模・同構造の井戸である。掘形の平面形は円形を呈し、検出面での規模は、径約 1.7 m、深さ約 2.2 m あり、底面の標高は約 35.2 m である。底面に長さ

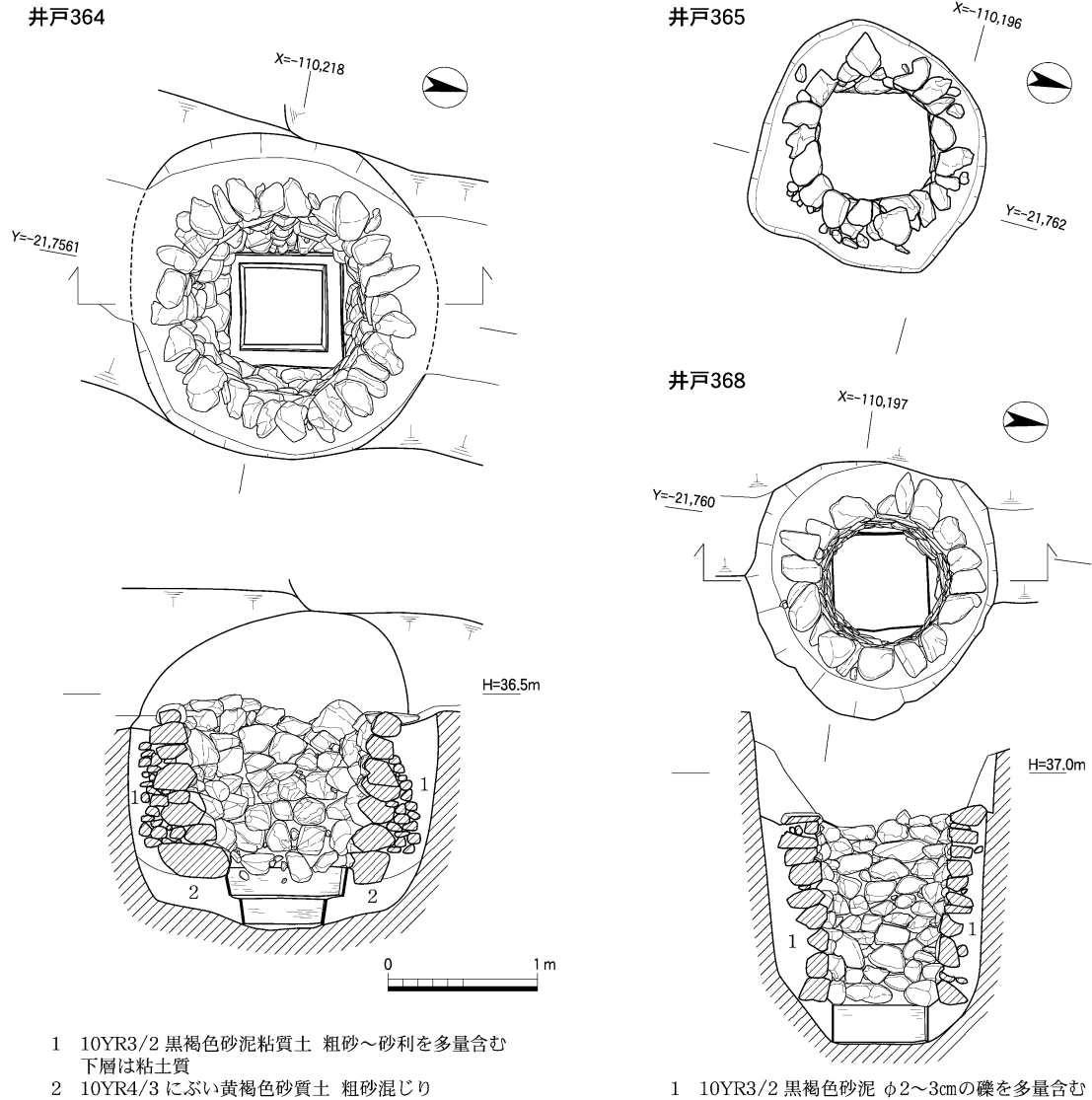


図31 2区井戸 364・365・368 実測図 (1:50)

0.63 m、幅 0.26 m の横板を使用し方形枡を据え、その上部に川原石を用いた内法径 0.87 m の石組を構築する。出土遺物から室町時代後期前半である。

土取穴群 (土取穴 242・248・290・291・327・341・355 など) 流路 444 内に堆積した黄褐色粘質土層を採取するために掘り込んだ土取穴と考えられる。平面形は不定形で相互に重複しており、土取りの規則性は看取できない。深さは約 1.0 m ある。土取穴群はいずれもブロック状の粘土塊などによって埋め戻されていた。出土遺物から土取りの時期は室町時代と考えられる。

(8) 2区第3面 (図32・33、図版7・36)

第3面では、平安時代の井戸、鎌倉時代の土坑などを検出した。平安時代の3基の井戸は四条坊門小路北築地心想定線から北に3～6mの間で検出している。また、土取穴は第2面と同様、後述する流路444の上面で検出している。

井戸394 (図32、図版36) 調査区南端東寄りで検出した井戸である。掘形の平面形はやや歪

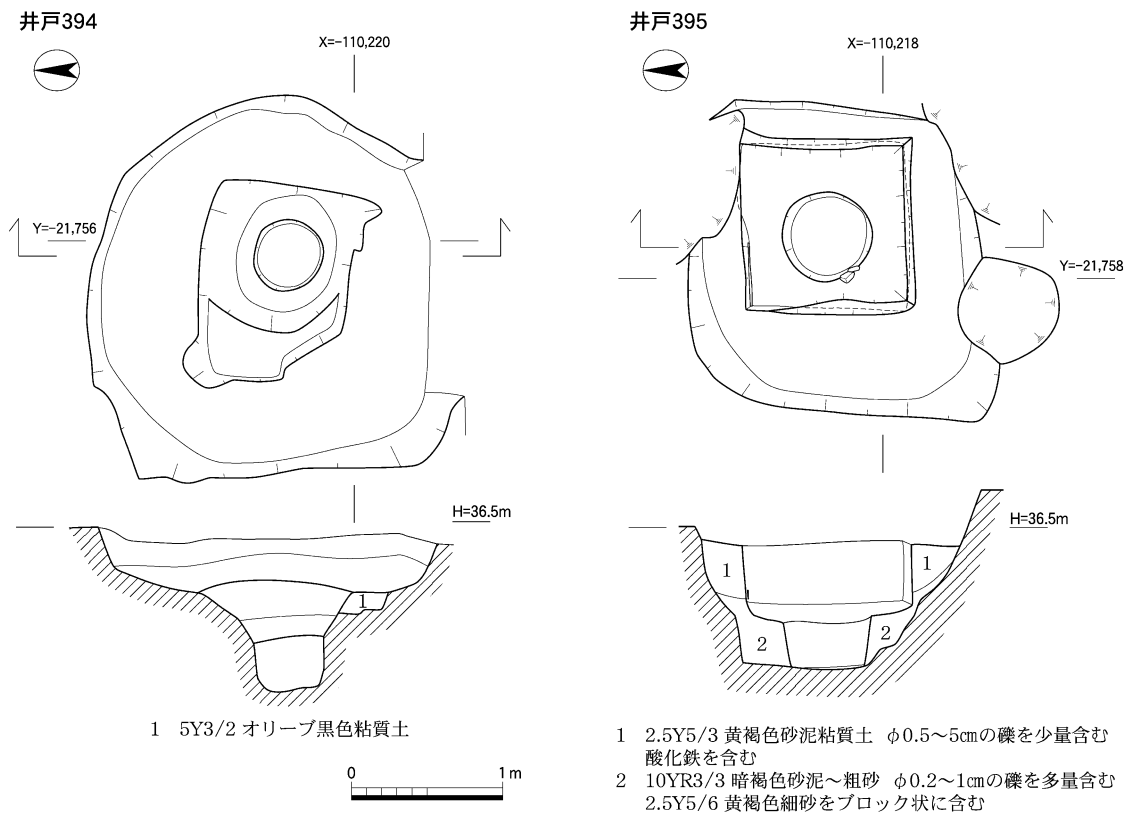


図 32 2区井戸 394・395 実測図 (1:50)

な方形を呈し、検出面での規模は、一辺約 2.5 m、深さ約 1.1 mあり、底面の標高は約 35.4 mである。井戸側は遺存していないが、埋土の状況から方形縦板組の井戸であったと考えられ、木柵は一辺約 1.0 mの方形に想定できる。底面には円形曲物を据えたと考えられる木質部が遺存しており、曲物痕跡は径約 0.6 m、高さ約 0.3 mある。樹種はスギである。木柵底面から延喜通寶・

軋元大寶が各 1 枚、曲物底面から軋元大寶が 1 枚出土した。出土遺物から平安時代中期と考えられる。

井戸 395 (図 32、図版 36) 調査区南部西寄りで検出した井戸で、井戸 394 の北西隅と接する。掘形の平面形は方形を呈し、井戸 934 よりもやや小振りである。検出面での規模は、一辺約 2.1 m、深さ約 1.2 mあり、底面の標高は約 35.6 mである。掘形内やや東寄りに方形縦板組の木柵痕跡が遺存していた。木柵は一辺 1.1 mの方形に復元できる。底面には円形曲物を据えた痕跡が遺存していた。曲物は径 0.55 m、高さ 0.3 mに復元できる。木柵底面から軋元大寶が 2 枚出土した。出土遺物から平安時代中期である。

井戸 397 (図 33) 調査区南半東寄りで検出した井戸である。井戸心々間で井戸 394 から北に約 3.5 mに位

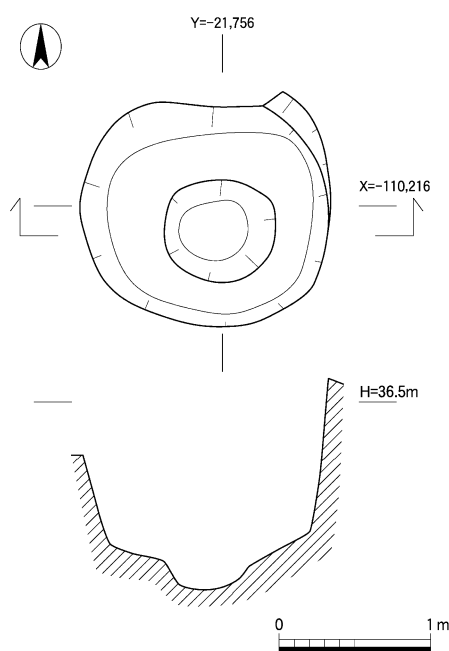


図 33 2区井戸 397 実測図 (1:50)

置する。掘形の平面形はやや歪な円形を呈し、径約 1.7 m、深さ約 1.4 mあり、底面の標高は約 35.3 mである。井戸側は未検出である。底面中央が円形に一段窪む状況から、円形曲物を据えた痕跡と考えられる。出土遺物から平安時代中期である。

土取穴群（土取穴 413・419・441 など） 土取穴 413・419・441 は、流路 444 中央部分の第 2 面で検出した土取穴によって削平を受けた土取穴である。これらの土取穴も第 2 面で検出した土取穴と同様、流路 444 内に堆積した黄褐色粘質土層を採取するために掘り込んだ土取穴と考えられる。平面形は不定形で相互に重複しており、土取りの規則性は看取できない。出土遺物から鎌倉時代を下限とするが、室町時代のものが含まれている可能性がある。

流路 444（図 11、図版 7） 調査区中央部で検出した北西から南東方向の自然流路と考えられる遺構である。南東へは調査区外へさらに延長するが、北西方向にあたる 1 区では未検出である。検出面での規模は、幅約 10.5 m、深さ約 1.0 mある。底面は南東側が低い。遺物は検出していない。埋土の違いなどから 1 区流路 632 とは別の流路と考えられる。

註

- 1) 山本雅和「平安京左京四条四坊」『平成 2 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994 年

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

調査では1区・2区併せて整理用コンテナに419箱の遺物が出土した。出土遺物には土器類・瓦類・土製品・石製品・金属製品・骨角製品・木製品・動植物遺体などの種類がある。出土遺物の大部分は土器類が占め、次いで瓦類が多く、その他の種類の遺物は比較的少ない。

調査ではそれぞれの遺構面で遺物を採集したが、遺構相互の重複が著しかったため、新しい時代の遺構埋土・包含層に、より古い時代の遺物が混入することが多くみられた。時代別の出土量では、縄文時代から古墳時代・平安時代が少量、鎌倉時代から室町時代が約4割、桃山時代から江戸時代が約6割である。

以下では、種類ごとに出土遺物の概要を報告する。なお、出土遺物の時期の判定は、平安京・京都I期～期の編年案を準用する¹⁾。

(2) 土器類

土器類には土師器・白色土器・黒色土器・瓦器・須恵器・焼締陶器・灰釉陶器・灰釉系陶器・緑釉陶器・施釉陶器・磁器・輸入陶磁器などがある。土器類は出土遺物の大部分を占め、時代ごとの変化が著しい。ここでは縄文時代から古墳時代、平安時代、鎌倉時代から室町時代、桃山時代から江戸時代に大別して、各時代を代表する遺構から出土した土器類を紹介する。

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
縄文時代 ～古墳時代	縄文土器、弥生土器、土師器		縄文土器11点、弥生土器21点、土師器5点	3箱	
平安時代	土師器・白色土器・黒色土器・瓦器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器、瓦類、金属製品		土師器24点、白色土器3点、黒色土器2点、須恵器3点、灰釉陶器6点、緑釉陶器2点、輸入陶磁器2点、瓦類25点、金属製品6点	8箱	5箱
鎌倉時代 ～室町時代	土師器・白色土器・瓦器・須恵器・焼締陶器・灰釉系陶器・施釉陶器・輸入陶磁器、瓦類、土製品、石製品、金属製品、木製品		土師器193点、白色土器3点、瓦器13点、須恵器5点、焼締陶器2点、施釉陶器3点、輸入陶磁器22点、瓦類2点、土製品10点、石製品10点、金属製品2点	65箱	97箱
桃山時代 ～江戸時代	土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器・磁器、瓦類、土製品、石製品、金属製品、骨角製品、木製品		土師器69点、瓦器4点、焼締陶器8点、施釉陶器37点、磁器17点、輸入陶磁器3点、瓦類4点、土製品36点、石製品5点、金属製品18点、骨角製品3点、動物骨一式、貝殻一式	98箱	138箱
合 計		454箱	579点 (40箱)	174箱	240箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物をランク分けしたため、出土時より35箱多くなっている。

1) 縄文時代から古墳時代

縄文時代から古墳時代の土器には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器がある。多くが1区流路632および1区流路632Bより出土した。1区流路632は縄文時代後期から古墳時代前期、1区流路632Bは弥生時代後期から古墳時代中期の土器を中心とする。その他にも少量であるが、より新しい時代の遺構埋土・包含層に混入して出土した土器がある。

縄文土器（図34、図版37 1～11）すべて1区流路632第4層から出土した。

1～8は縄文時代後期後葉の凹線文土器

で、宮滝式土器の範疇に入る。1～4は口縁がラッパ状に開く深鉢の口縁部、5～7は深鉢胴部片、8は鉢または浅鉢の胴部片である。色調は外面が淡橙色から灰白色、内面が灰白色または黒色を呈するもの（1～3・7）と、内外面が黒褐色系を呈するもの（4～6・8）とにわかれる。何れの凹線内にも、巻貝条痕と断定できる痕跡は確認できなかった。1は外面に2本の凹線を引き、これらの線上に巻貝の扇状圧痕を施す。圧痕の時に粘土がはみ出したとみられる盛り上がりがあり、外面の器面に認められる。しかし、巻貝を転がしたものであるのか、押圧であるのかは定かではない。全面にナデ調整を施す。2・3は口縁部外面に浅くて太い凹線を2本以上施文する。内外面はナデ調整で、口縁端部がわずかに肥厚している。4は外面に3本の凹線を引く。1～3に比べて凹線が深く、口縁端部までせり上がっており、凹線間が狭くなっている。口縁端部は丁寧に面取りし、内外面にナデ調整を施す。特に内面は強いナデを施したとみられ、段状になっている部分がある。5・6は外面に2～3本の凹線を施す。凹線の断面を見たとき、一番窪んだ部分が中心より下方に位置する。いわゆる緩「レ」字凹線²⁾とみられる。7は浅くて太い凹線を3本以上引いた上に、扇形の文様を2箇所²⁾に施す。扇形文様は棒状の工具で逆位の二等辺三角形を描いたもので、巻貝による扇状圧痕に似せたものとみられる。内外面にナデ調整を施す。内面には粘土紐痕が認められる。8は内外面の磨滅が著しいため調整は不明であるが、外面に浅い凹線が2本施文されているのを確認した。10は凹線文土器の小型深鉢底部とみられる。丸くナデ調整が行われているが、一部平坦面をもつ。内面には角のある工具痕跡が認められた。色調は内外面共に橙色を呈する。

9は外面に3本の平行沈線を施す。内外面および沈線内を丁寧に磨き、口縁端部を面取りする。色調は黒色を呈する。11は口径30.6cmで、色調は灰白色を呈する。口縁端部外面と体部はケズリ、内面はナデ、頸部外面は強いナデを施す。口縁端部の大きな外反は、この頸部のナデによるとみられる。9は滋賀里Ⅱ～Ⅲa式土器の平口縁浅鉢、11は滋賀里Ⅲa式土器深鉢と考えられる。

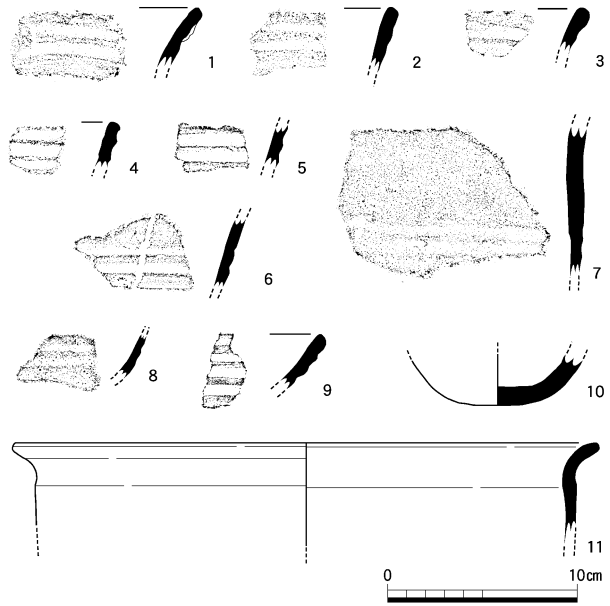


図34 縄文土器実測図（1：4）

弥生土器（図版8・37 12～32）壺（12～17）・蓋（18）・甕（19～24）・高杯（25～29）・脚部（30～32）などがある。16のみ2区の室町時代の遺物包含層より出土したが、その他は1区流路632および1区流路632 Bより出土したものである。小破片が多いが、21・27は1区流路632 B上層部分でほぼ完形のまま横転した状態で埋没していた。

12・13は口縁部がほぼ直立し、端部は丸くおさめる。調整は12は内外面ともヨコナデ、13は外面は縦方向のミガキ、内面はヨコナデである。14は口縁部が外上方に開き、端部は丸くおさめる。器壁は厚い。調整は内外面ともヨコナデである。15は底部から体部が外上方に、16・17は体部が大きく開く。調整は底部内外面はナデ、体部外面は縦方向のミガキ、内面は縦方向のナデである。

18は天井部中央がやや盛り上がる扁平な円盤形で、1箇所に穿孔がのこる。調整は天井部は内外面ともナデ、口縁部は内外面ともヨコナデである。

19は口縁部が強く外反して開く。調整は内外面ともヨコナデである。20は口縁部が外上方に開き、端部をつまみ上げて小さな面を作る。調整は内外面ともヨコナデで、端部に刺突文を施す。21は平底で体部が倒卵形、口縁部が受口状口縁で端部に内傾する面を作る。調整は底部外面はナデ、体部外面はハケ、内面は下部がハケ・中央部から上部はナデ、口縁部は内外面ともヨコナデである。口縁部外面に刺突文、体部外面に刺突文・直線文・波状文を施す。体部外面には煤が付着する。22は口縁部が受口状口縁で、端部はやや内傾する。小型である。調整は体部外面はハケ、内面はナデ、口縁部は内外面ともヨコナデである。23は底部から体部が外上方に開く。調整は表面の損傷のため詳細不明である。22は底部から体部が内弯気味に開く。調整は体部外面は粗いハケ、内面は板状工具によるナデである。

25は口縁端部が小さく立ち上がり狭い面を作る。調整は口縁端部は内外面ともヨコナデで、その他は表面の損傷のため詳細不明である。26は杯部は内弯して開き、口縁端部はほぼ直立する。調整は杯部外面はハケののちナデ、内面は横方向のミガキである。外面には屈曲する沈線にて何らかの図像を描く。27は脚部は外反して開き、端部に面を作る。柱状部・裾部の交互3方に透孔を穿孔する。杯部は半球形で端部は丸くおさめる。杯部と脚部は円盤充填により接合する。調整は脚部外面は縦方向・放射状のミガキ、端部は内外面ともヨコナデで、内面にはシボリ痕がのこる。杯部は内外面とも放射状のミガキである。28・29は柱状部の破片で、調整は詳細不明である。

30～32はいずれも裾部は外反して開き、端部に面を作る。30は3方に透孔を穿孔する。調整は外面は放射状のミガキ、内面はヨコナデで、端部は内外面ともヨコナデである。

15・18～20・25は弥生時代中期後半、12～14・16・17・21～24・26～32は弥生時代後期前葉から中葉に属する。

土師器（図版8 33～37）壺・甕・高杯（37）・小型丸底壺（33・34）・小型鉢（35）・小型器台（36）などがある。1区流路632第1層・第2層、1区流路632 Bより出土した。いずれも小破片である。

33は口縁部が外上方に開く。調整は内外面とも丁寧なヨコナデである。34はやや扁平な球形

である。調整は内外面ともナデである。35は口縁部が2段に外反する。器壁は厚い。調整は内外面ともヨコナデである。36は柱状部の3方に透孔を穿孔すると推定できる。調整は外面はミガキ、内面はナデである。37は円筒状の柱状部から裾部が屈曲して開く。杯部との接合技法は不明である。調整は柱状部外面は縦方向のミガキ、内面はヨコナデで、シボリ痕がのこる。

33・35～37は古墳時代前期、34は古墳時代中期に属する。

2) 平安時代

2区井戸394(図版9・38 38～47) 土師器皿(38～42)・杯・椀・高杯・甕、白色土器椀、黒色土器椀・甕、須恵器杯蓋・杯身・鉢・壺(43)・甕、灰釉陶器皿(44)・椀(45・46)・壺・甕、緑釉陶器椀、中国製白磁椀(47)などが出土した。土師器皿には小型皿(38～41)・大型皿(42)がある。口縁部が強く屈曲し、器壁は薄い。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。43は小型の壺で、調整は内外面とも回転ナデである。44～46は回転ナデで調整したのち、内外面に薄く灰釉を施釉する。47はケズリで整形したのち、内外面に厚く施釉する。井戸枠内・掘形それぞれから遺物が出土したが、時期差は看取できない。Ⅲ期新段階に属する。

2区井戸395(図版9・38 48～55) 土師器皿(48～50)・高杯・甕、白色土器盤(51)、黒色土器椀・甕、須恵器杯蓋・杯身・鉢・壺・甕、灰釉陶器椀(52)・壺、緑釉陶器椀(53・54)・壺、中国製白磁椀(55)などが出土した。土師器皿には小型皿(48)・大型皿(49・50)がある。大型皿には口縁部が外反するもの(50)がある。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。51は小型の盤で、調整は内外面とも回転ナデである。53・54はいずれも小破片で、内外面に薄く緑釉を施釉する。55は口縁端部が玉縁状になる。井戸枠内・掘形それぞれから遺物が出土したが、時期差は看取できない。Ⅲ期新段階からⅣ古段階に属する。

1区井戸583(図版9 56～68) 土師器皿(56～62)・高杯・鉢(63)、白色土器椀(64)・高杯、黒色土器椀・鉢(65)、須恵器杯身・鉢・壺(66)・甕(67)、灰釉陶器椀(68)・壺、緑釉陶器椀、中国製白磁椀などが出土した。土師器皿には小型皿(56～60)・大型皿(61・62)がある。小型皿は口縁部が強く屈曲するもの(58～60)が多いが、平底で口縁部が外上方に開くもの(56)や口縁部が外反するもの(57)もある。大型皿は口縁部が外反する。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデであるが、56のみ底部外面もナデである。63はやや大型の鉢で、口縁端部は肥厚して丸くおさめる。調整は内外面とも回転ナデである。64は削り出し高台で、調整は内外面とも回転ナデである。65は類例が少ない器形で小型の鉢と考えるが、別の器形の可能性がある。体部は内弯気味に開き、口縁端部は大きく肥厚し、内傾する面を作る。調整は内外面ともヨコナデののち、粗いミガキを施す。66は肩が張る体部で、調整は内外面とも回転ナデである。67は口縁部が外反して開く。調整は体部外面は平行タタキ、口縁部内外面は回転ナデである。Ⅳ期古段階から中段階に属する。

1区土坑399(図版9・38 69～79) 土師器皿(69～75)・高杯・甕(76)、白色土器皿・

椀 (77) ・高杯、黒色土器椀 (78) ・甕、須恵器杯身・鉢・壺・甕、灰釉陶器椀 (79) ・壺、緑釉陶器椀、中国製白磁椀などが出土した。土師器皿には受皿形の小型皿 (72) ・小型皿 (69～71) ・大型皿 (73～75) がある。受皿形の小型皿は口縁端部を短く内側に折り曲げる。小型皿は器壁がやや厚くなるもの (70・71) がある。大型皿は浅いもの (73) ・深いもの (74・75) がある。76 は口縁部が短く外反し、端部に面を作る。調整は体部外面は板状工具によるナデ、内面はナデ、口縁部は内外面ともヨコナデである。77 は底部は糸切りで、調整は内外面とも回転ナデである。78 は口縁部外面は粗いミガキ、内面は密なミガキを施す。79 は底部は糸切りで、貼り付け高台である。調整は内外面とも回転ナデである。施釉はきわめて薄い。IV期中段階に属する。

3) 鎌倉時代から室町時代

1区土坑 500 (図版 9 80～94) 土師器皿 (80～93)、瓦器椀・鍋釜類、須恵器鉢 (94) ・甕、灰釉系陶器椀・壺、中国製白磁皿、青磁椀などが出土した。土師器皿には赤色系土師器と白色系土師器がある。赤色系土師器には小型皿 (80～89) ・大型皿 (90～92) がある。小型皿は口縁部が内弯気味に開く。大型皿は口縁部が直線的に開くもの (90・91) と内弯気味に開くもの (92) がある。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。白色系土師器皿 (93) はごく少量が出土したのみである。調整は赤色系土師器皿と同様であるが、全体的に丁寧である。94 は体部が外上方に開き、口縁端部はつまみ上げて小さな面を作る。調整は内外面とも回転ナデである。東播産である。VI期中段階から新段階に属する。

1区土坑 390 (図版 10・38 95～118) 土師器皿 (95～115)、白色土器盤・椀 (116)、瓦器椀・鍋釜類 (117) ・火鉢、須恵器鉢・甕、焼締陶器甕、灰釉系陶器椀・輪花椀、中国製白磁椀・鉢、青磁椀 (118) ・鉢、褐釉陶器盤などが出土した。赤色系土師器には小型皿 (95～102) ・大型皿 (103～110) がある。小型皿は口縁部が浅く開くもの (97・98) と内弯気味に開くもの (99・100) がある。大型皿は口縁部が直線的に開くものが多い。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。白色系土師器は赤色系土師器に比べ出土量は少ない。受皿形の小型皿 (111) ・小型皿 (112) ・大型皿 (113～115) がある。受皿形の小型皿は口縁端部を内側に折り曲げる。大型皿は浅いもの (113・114) と深いもの (115) がある。調整は基本的に赤色系土師器皿と同様であるが、大型皿は底部外面はオサエののちナデである。116 は底部は糸切りののち貼り付け高台で、調整は内外面とも回転ナデである。瓦器鍋釜類には口縁部が受口状になるもの (117) と口縁部外面に突帯がめぐるものがある。117 の調整は体部外面はオサエののちナデ、内面はハケ、口縁部は内外面ともヨコナデである。118 は外面に蓮弁を描く。VI期中段階から新段階に属する。

1区井戸 304 (図版 10・40 119～151) 土師器皿 (119～143)、瓦器椀 (144) ・鍋釜類 (145・146) ・火鉢・甕、須恵器椀 (147) ・鉢 (148) ・甕 (149)、焼締陶器甕、灰釉系陶器椀・鉢、施釉陶器椀、中国製白磁椀・鉢、青磁椀 (150・151) などが出土した。赤色系土師器と白色系土師器はほぼ同量である。赤色系土師器皿には受皿形の小型皿・小型皿 (119～123) ・大型皿

(124～127)がある。小型皿は口縁部が浅く開くものがほとんどで、口径は小さくなる。大型皿は口縁部が直線的に浅く開く。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。白色系土師器皿には受皿形の小型皿(128・129)・小型皿(130～139)・大型皿(140～143)がある。受皿形の小型皿は小さく、口縁端部がほぼ直立する。小型皿は口縁部が内弯気味に開く深いものも多く、底部中央を押し上げるもの(130～133)がある。大型皿は深いものが多い。調整は小型皿は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。大型皿は底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。144は小型で、低い高台を貼り付ける。調整は外面はオサエ、内面・口縁部内外面はヨコナデで、内面に粗い暗文を施す。鍋釜類には口縁部が受口状になるもの(145)と口縁部外面に突帯がめぐるもの(146)がある。調整は体部外面はオサエ、内面はハケ・ナデ、口縁部内外面はヨコナデである。147は底部は糸切りで、調整は内外面とも回転ナデである。148は体部が外上方に開き、端部は丸みをもっておさめる。調整は内外面とも回転ナデである。東播産である。149は口縁部が強く外反して開き、端部は面を作る。調整は体部外面は平行タタキ、内面・口縁部内外面は回転ナデである。東播産である。焼締陶器甕は常滑産が多い。施釉陶器椀は鉄釉を施す破片1点のみが出土した。瀬戸産である。150は外面に蓮弁、151は底部内面に花文を描く。Ⅶ期中段階に属する。

1 区地下室 410 (図版 11・12・39 152～259) 土師器皿(152～228)・椀(229～231)、白色土器盤(232・233)・椀・高杯、瓦器皿(234)・椀(235～238)・鍋釜類(239・240)・火鉢(241)・甕、須恵器鉢(242)・甕、焼締陶器播鉢(243)・甕、灰釉系陶器椀・鉢、施釉陶器皿・おろし皿・椀、中国製白磁皿(254)・椀(255・256)・鉢・壺、青磁皿(252・253)・椀(244～251)・鉢・盤・壺、青白磁椀・合子、褐釉陶器盤・壺(257)、緑釉陶器盤(258・259)などが出土した。

赤色系土師器皿には小型皿(152～181)・大型皿(182～201)がある。小型皿は口縁部が浅く開くものが多い。大型皿は口縁部が直線的に浅く開くものが多い。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。白色系土師器は赤色系土師器に比べ出土量は少ない。受皿形の小型皿(202～207)・小型皿(208～213)・大型皿(214～228)がある。受皿形の小型皿は小さく、口縁端部がほぼ直立する。小型皿は口縁部が内弯気味に開く深いもの(208・209)と口縁部が浅く開くもの(210～213)がある。大型皿は口径に大小があり、口縁部が内弯気味に開く。調整は小型皿は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。大型皿は底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。椀は貼り付け高台で、口縁端部は面を作る。調整は内外面ともヨコナデである。他地域産の搬入品である。白色土器は小破片のみである。232・233が底部は糸切りで、調整は内外面とも回転ナデである。

234は口縁部が浅く外上方に開く。調整は底部外面はオサエ、内面・口縁部内外面はヨコナデで、内面に粗い暗文を施す。瓦器椀には低い高台を貼り付けるもの(236～238)と付かないもの(235)がある。235は平底の底部から口縁部が屈曲して内弯気味に開く。調整は内外面ともナデ・ヨコナデで、内面に暗文を施す。236～238は扁平な半球形で、調整は外面はオサエ、内面・

口縁部内外面はヨコナデで、内面に暗文を施す。鍋釜類には口縁部が受口状になるものと口縁部外面に突帯がめぐるもの(239・240)がある。調整は体部外面はオサエ・ナデ、内面はハケ・ナデ、口縁部内外面はヨコナデである。241は欠損しているが、平底で低い脚が付く形態と推定できる。体部は底部から屈曲して外上方に開き、口縁部は分厚くなり端部に広い面を作る。調整は体部外面はオサエ、内面・口縁部内外面はヨコナデである。242は体部が外上方に開き、端部は丸みをもっておさめる。調整は内外面とも回転ナデである。東播産である。243は体部が内弯気味に開き、端部は内傾する面を作る。調整は内外面とも回転ナデののち内面に3条1組の播目を施す。信楽産である。焼締陶器の甕は常滑産が多くを占め、備前産が少量ある。施釉陶器はいずれも灰釉を施す。瀬戸産である。

中国製磁器は青磁の割合が多い。252・253は口縁部が外反して開く。青磁碗はいずれも口縁部が内弯気味に開き、244～246は外面に蓮弁、248は外面に櫛描き、247・251は内面に花文を描く。白磁には文様はないが、256は輪花を作る。257は口縁部が短く直立する。258・259は直接接合しないが、同型式の破片である。大型で、口縁部は内弯して立ち上がり、端部は肥厚して玉縁状になる。底部内面には同心円状に沈線を施す。

出土遺物は上層・中層・下層に分けて採集したが、顕著な時期差は看取できない。各層出土の土師器皿を提示すると、上層は152・153・182・183・214・215・224、中層は154～169・184～193・202～204・208～211・216・219～221・225～227、下層は170～181・194～201・205～207・212・213・217・218・222・223・228である。Ⅶ期古段階に属する。

1区井戸452(図版13・40 260～270)土師器皿(260～269)、瓦器鍋釜類・火鉢・甕、須恵器鉢、焼締陶器甕、施釉陶器碗・おろし皿(270)、中国製白磁碗などが出土した。赤色系土師器は白色系土師器に比べ出土量は少ない。小型皿・大型皿がある。白色系土師器皿には小型皿(260～262)・大型皿(263～269)がある。小型皿は口縁部が内弯気味に開く深いもの(262)と底部中央を強く押し上げるもの(260・261)がある。大型皿は口径に大小があり、口縁部が外反気味に開くもの(266～269)が多い。調整は小型皿は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。大型皿は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。施釉陶器碗は鉄釉を施す破片1点のみが出土した。瀬戸産である。270は平底で、口縁部は外上方に開く。底部は糸切りで、調整は内外面とも回転ナデののち、底部内面に粗いおろし目を加工する。口縁部内外面に灰釉を施す。Ⅸ期古段階に属する。

1区土坑380A(図版13・40 271～302)土師器皿(271～301)、瓦器鍋釜類・火鉢、須恵器鉢・甕、焼締陶器播鉢・甕、施釉陶器碗(302)・鉢、中国製白磁碗・壺、青磁碗・盤・壺、褐釉陶器壺、緑釉陶器盤などが出土した。赤色系土師器は白色系土師器に比べ出土量は少ない。小型皿(271～274)・大型皿(275～280)がある。小型皿は極めて浅くなる。大型皿は口径が小さくなり、口縁部は屈曲して外反気味に開く。いずれも歪みが大きい。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ・口縁部内外面はヨコナデであるが、全体的に粗雑である。白色系土師器皿には受皿形の小型皿・小型皿・中型皿(281～289)・大型皿(290～301)がある。中型皿・大

型皿はそれぞれ口径に大小があり、明確な区別は難しい。口縁部が浅く外反気味に開く。調整は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。焼締陶器播鉢は信楽産、甕は備前産が目立つ。302は内外面に黒色の鉄釉を施す。瀬戸産である。施釉陶器鉢は片口が付く鉢で、内外面に灰釉を施す。瀬戸産である。X期古段階から中段階に属する。

2区溝 230(図版 13 303～320) 土師器皿(303～314)・小型釜、瓦器鍋釜類(315)・火鉢・甕、須恵器甕、焼締陶器鉢(316)・播鉢・壺・甕、施釉陶器椀・皿・おろし皿(317)・鉢・おろし鉢・壺、中国製白磁椀・壺、青磁椀(318・319)・壺・香炉(320)、褐釉陶器壺などが出土した。赤色系土師器は白色系土師器に比べ出土量は少ない。小型皿(303・304)・大型皿(305・306)がある。小型皿は極めて浅くなる。大型皿は口径が小さくなり、口縁部は屈曲して外反気味に開く。いずれも歪みが大きい。白色系土師器皿には小型皿(307・308)・中型皿(309・310)・大型皿(311～314)がある。小型皿は口径が小さくなる。底部中央を強く押し上げるもの(307・308)がある。中型皿・大型皿はそれぞれ口径に大小があり、明確な区別は難しい。口縁部が浅く外反気味に開く。315は口縁端部が受口状になる。調整は体部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。316は体部が直線的に開き、口縁端部は外上方につまみ出す。調整は内外面とも回転ナデである。信楽産である。播鉢は備前産・信楽産がある。壺は量が少ない。備前産である。甕は常滑産が多くを占め、他に備前産・信楽産がある。施釉陶器はすべて瀬戸産で、椀・壺に鉄釉を施すものがあるが、大部分は灰釉である。317は底部内面に粗いおろし目を加工する。中国製陶磁器は青磁の割合が多い。318・319は外面に蓮弁、319は内面に花文を描く。320は香炉と推定するが他の器形の可能性もある。口縁部は小さく外反し、体部には大きな透孔がある。施釉は斑点状に暗褐色の鉄釉を散らし、青磁の発色も好い優品である。IX期新段階からX期古段階に属する。

4) 桃山時代から江戸時代

1区溝 160(図版 14・15・40 321～394) 土師器皿(321～359)・小型鉢(363)・鉢(364)・焙烙(360～362)・鍋・灯火具(365)、瓦器火鉢・灯火具、焼締陶器鉢・播鉢(367～369)・盤・壺(366)・甕、施釉陶器椀(370～380)・皿(382～391)・鉢(381)・壺・茶入れ、中国製白磁皿(392)、青花椀(394)・皿(393)などが出土した。

土師器皿は赤色系土師器皿の係累の小型皿(321～332)、白色系土師器皿の係累の中型皿(333～345)・大型皿(346～358)・特大皿(359)がある。小型皿は口径が極端に小さくなり、歪みが大きい。調整はオサエとナデである。中型皿は丸底のものが多い。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。大型皿は平底で底部内面に明瞭な圏線がめぐる。ただし、358は圏線がない類例の少ないものである。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。359は直径30cmを超える極めて大型のもので、器壁も厚い。内面口縁部寄りに圏線がめぐる。調整は底部外面はハケののち丁寧なナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。363はいわゆる「ツボツボ」である。小型で口縁部は内傾する。調整は

ナデ・ヨコナデである。364は口縁部が強く内弯して内傾する。調整は内外面ともヨコナデである。焙烙は口縁部が立ち上がるもの(360)と屈曲するもの(361・362)がある。360は口縁部が内弯気味に立ち上がり、端部は肥厚する。調整は底部内外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。361・362は扁平な半球形の体部から口縁部が屈曲して開き、端部は上方につまみ上げる。調整は底部・体部外面はナデ、内面はハケ・ナデで、口縁部内外面はヨコナデである。いずれも底部外面に煤が付着するものが多い。365は中実の柱状部から裾部・受皿部がそれぞれ直線的に開く。受皿部中央には穿孔がある。調整はナデで、裾部・受皿部とも端部はヨコナデである。

焼締陶器播鉢は信楽産(367・368)が多く、他に丹波産(369)・備前産がある。大型のものが多い。367・368は体部が直線的に開き、口縁端部は外上方につまみ出す。調整は内外面とも回転ナデで、内面に7条1組・6条1組の播目を施す。369は体部が直線的に開き、口縁端部を丸くおさめる。調整は内外面とも回転ナデで、内面に1条ずつの播目を施す。366は小型の壺で、調整は底部外面はナデ、体部内外面は回転ナデである。366を含め、壺はほとんどが備前産である。甕は常滑産・備前産がある。

施釉陶器碗には瀬戸美濃産(370～377)と唐津産(378～380)があり、瀬戸美濃産が多くを占める。瀬戸美濃産は鉄釉を施すもの(371～377)が大部分で、他に灰釉を施すもの(370)・長石釉を施すものがある。唐津産はいずれも灰釉を施す。皿も瀬戸美濃産(383～391)が多くを占め、唐津産(382)は少ない。瀬戸美濃産は灰釉を施すもの(384～390)が大部分で、他に鉄釉を施すもの(383)・いわゆる織部様式のもの(391)がある。重ね焼き痕をのこすものが多い。鉢は少なく、瀬戸美濃産にはいわゆる黄瀬戸様式のもの、唐津産には鉄釉で文様を描き灰釉を施すもの(381)がある。壺・茶入れも少なく、いずれも鉄釉を施す瀬戸美濃産である。中国製陶磁器は青花が増加する。景德鎮窯系のもの(394)と博州窯系のもの(393)がある。392は内面に刻花で文様を描く。

出土遺物は上層・中層・下層に分けて採集したが、顕著な時期差は看取できない。中層・下層出土の土師器皿を提示すると、中層は321～326・333～345・358、下層は327～332・346～357である。なお、上層は出土量が少なく細片が多いため図示していない。XI期古段階に属する。

1区土坑45(図版16～18 395～453)土師器皿(395～408)・小型鉢・鉢(409)・焙烙(411・412)・鍋(410)・灯火具・壺(413)、瓦器火鉢・灯火具(429・430)・火入れ(431・432)、焼締陶器播鉢(434・435)・壺(436)・甕、施釉陶器碗(414～423)・皿(424・425)・鉢(426～428)・播鉢(433)・火入れ・壺・甕、磁器染付碗(437～446)・皿(447～449)・鉢(450)・仏飯器(451)・合子・壺(452)、青磁碗・皿・鉢・香炉(453)、磁器色絵碗・壺などが出土した。

土師器皿には小型皿(395～397)・中型皿(398～400)・大型皿(401～408)がある。全体的に口径が小さくなり、浅くなる。409は半球形で口縁端部は内傾する。調整は底部・体部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。焙烙は口縁部が立ち上がるもの(412)と屈曲するもの(411)がある。410は体部外面に突帯がめぐる。調整は体部内面はハケ、体部外面・口縁部内外面はヨコナデである。413は蓋が付く壺である。平底で肩が張り、

口縁端部は短く直立する。調整は底部外面はナデ、体部外面は丁寧なナデ、内面はオサエののちヨコナデで、肩部に波状文を施す。

429・430 は上半部を欠損するが、底部内面中央に受皿部を作る。431・432 は脚が付く円柱形で、431 は半円形の切り込みがある。焼締陶器播鉢は信楽産（434・435）が大部分を占める。口縁端部は拡張して外面に突帯がめぐり、内面の播目は密で、底部にまで及ぶ。433 は内外面に薄く鉄釉を施す。436 を含め、壺はほとんどが備前産である。また、甕も備前産が多い。

施釉陶器は釉薬・施文が多様となる。全体的に器壁の薄いものが増加する。磁器は中国産がなくなり、肥前産がほとんどを占めるようになる。器形は多様で、様々な文様・図像を描く。期に属する。

その他の出土土器（図版 17 454～458）上記の以外の遺構から出土した土器の一部を掲載する。454 は土師器大型皿で、焼成後、底部中央に1箇所穿孔する。2区土坑 187 から出土した。XI期に属する。455 は土師器皿で、調整は底部外面はケズリ、内面・口縁部内外面は回転ナデである。2区土坑 66 から出土した。XI期に属する。456 は大型の鉢である。1区土坑 125 から出土した。期に属する。

457・458 は蓋が付く壺である。457 は平坦な天井部から口縁部が垂下する。調整は天井部外面はナデ、内面・口縁部内外面は回転ナデである。458 は体部が内弯し、口縁端部は短く立ち上がる。調整は底部外面はナデ、内面・口縁部内外面は回転ナデである。2区穴蔵 1 の床面に据え付けられた状態で出土した。時期の確定は難しいが、XII期に属すると推定する。

（3）瓦類

瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・棧瓦・雁振瓦・その他の道具瓦・漳がある。平安時代中期から後期、江戸時代の瓦が多く、鎌倉時代から室町時代の瓦はわずかである。平安時代から室町時代の瓦は新しい時代の遺構埋土・包含層に混入して出土することも多かったため、ここでは平安時代中期・平安時代後期・鎌倉時代・江戸時代に大別して、それぞれの時代の軒丸瓦・軒平瓦をまとめたのち、その他の瓦類を報告する。

蓮華文軒丸瓦（図版 19・41 瓦 1～瓦 5）瓦 1 は単弁八弁蓮華文で、中房に 1 + 4 の蓮子、外区に珠文を配する。凸面は縦方向のケズリで、瓦当裏面は布目がのこる。瓦 2 は単弁二四弁蓮華文に復元でき、外区に珠文を配する。瓦当裏面・外周はナデで調整する。瓦 3 は単弁八弁の蓮華文であるが、小破片のため詳細不明である。瓦 4・瓦 5 は同範である。文様が不鮮明であるが、単弁八弁蓮華文で、中房に 1 + 4 の蓮子、外区に小粒の珠文を密に配する。瓦当裏面・外周はナデで調整する。瓦 1～瓦 3 は平安時代中期、瓦 4・瓦 5 は平安時代後期に属する。

唐草文軒平瓦（図版 19・41 瓦 6～瓦 14）瓦 6～瓦 8 は同範である。細かい複線で唐草を表現する。周囲には圏線がめぐり、外区に珠文を配する。瓦当上面は横方向のナデ、裏面は凸面から連続する縦方向のケズリある。瓦 9 は唐草が緩やかに反転する。瓦当裏面は凸面から連続する縦方向のケズリである。瓦 10・瓦 11 は同範である。唐草は太く断片的である。周囲には圏線が

めぐり、外区に大粒の珠文を配する。瓦当裏面は凸面から連続する縦方向のケズリである。瓦 12 は巻き込みの強い唐草文である。周囲には圏線がめぐり、瓦当裏面はナデである。瓦 13・瓦 14 は細い線で唐草を表現する。周囲には圏線がめぐり、外区に小粒の珠文を配する。平安時代中期に属する。

巴文軒丸瓦（図版 20・42 瓦 16・瓦 17）瓦 16 は左巻きの三巴文である。瓦当面には範の木目が明瞭に付く。瓦当部分は貼り付けで、裏面・外周はナデで調整する。瓦 17 は右巻きの三巴文で、外区には珠文を配する。平安時代後期に属する。

唐草文軒平瓦（図版 20・42 瓦 18～瓦 24）瓦 18～瓦 20 は同範である。唐草は左右非対称で、中央に大きな範傷がある。文様は瓦 19・瓦 20 より瓦 18 の方が鮮明である。瓦当上端は面取り状のヘラケズリ、裏面は凸面から連続する縦方向のケズリである。瓦 21・瓦 22 は瓦 18～瓦 20 と同文である。瓦当上端は面取り状のヘラケズリ、裏面は凸面から連続する縦方向のケズリである。瓦 23 は唐草が鋭く茨状になる。瓦当裏面・外周ともナデで調整する。瓦 24 は巻き込みが強い唐草文である。瓦当上端は面取り状のヘラケズリ、裏面は凸面から連続する縦方向のケズリである。平安時代後期に属する。

剣頭文軒平瓦（図版 20・42 瓦 25）剣頭を横に並べる。先端は鋭い。瓦当面に布目が付く。折り曲げ成形技法である。瓦当裏面・外周はナデで調整する。平安時代後期に属する。

連珠文軒平瓦（図版 20・42 瓦 26）大粒の珠文を並べ、周囲には圏線がめぐり、端の珠文の横に「×」状の傷もしくは記号がある。瓦当上端は面取り状のヘラケズリ、裏面・外周はナデで調整する。鎌倉時代に属する。

巴文軒丸瓦（図版 20 瓦 27）右巻きの三巴文で周囲には大粒の珠文を配する。瓦当裏面・外周はナデで調整する。室町時代以降に属する。

唐草文軒平瓦（図版 20 瓦 28・瓦 29）簡略化した唐草文で、瓦 29 は中心に三つ葉を飾る。瓦当裏面は横方向のナデ、凹面は縦方向のナデで調整する。室町時代以降に属する。

棧瓦 期以降の遺構から出土した。赤く変色したものが一つの土坑から大量に出土することも多く、火災の後片づけの痕跡と推定できる。

雁振瓦（図版 19・20・41・42 瓦 15・瓦 30）瓦 15 は長側辺が尖り気味に垂下し面を作る。凸面はナデで、凹面は粗い布目がのこる。平安時代後期に属する。瓦 30 は長側辺に不明瞭な面をもち、短側辺の一方には玉縁を作る。凸面は縦方向のケズリののちナデで、凹面は細かい布目がのこる。

埴（図版 21 瓦 31）出土量は少ない。瓦 31 は破片であるが、ほぼ正方形に復元することが可能である。敷埴と考える。1区土坑 420 から出土した。IX期からX期に属する。

（4）土製品

土製品には硯・土錘・焼塩壺・おはじき・円盤形土製品・土人形・小型容器・土鈴・水滴・コンロ・鋳型・鞆羽口・取瓶・坩堝などがある。その他に窯道具の可能性のある破片がある。

硯（図版 21 土 1・土 2）いずれも須恵質の陶硯の破片である。凸面には平行タタキ・凹面には同心円タタキがのこる。土 1 は 1 区井戸 580 から出土した。Ⅵ期に属する。土 2 は 1 区地下室 410 から出土した。Ⅶ期以前に属する。

土錘（図版 21 土 3～土 5）いずれも両端がすぼまる円筒形で、芯材に粘土を巻き付けてナデで成形する。土 3 は 2 区包含層、土 4 は 2 区井戸 364、土 5 は 2 区土坑 40 から出土した。時期を確定できるのは土 4 のみでⅨ期からⅩ期に属する。

おはじき（図版 21 土 6～土 10）土 6 は施釉陶器碗片、土 7～土 9 は土師器皿片、土 10 は瓦器片を円盤形に加工する。成形は粗い。Ⅸ期からⅩ期の遺構から出土した。

円盤形土製品（図版 21 土 11～土 14）土 11 は側面に 1 箇所穴をあける。2 区土坑 139 から出土した。Ⅹ期に属する。土 12 は平坦面中央に 1 箇所穴をあける。2 区土坑 89 から出土した。Ⅺ期に属する。土 13・土 14 は土師器皿片の中央に穿孔する。土 13 は 2 区土坑 59、土 14 は 1 区包含層から出土した。時期の確定はできない。

不明瓦製品（図版 21 土 15）二等辺三角形形状に研いで成形した用途不明の瓦片である。1 区土坑 45 から出土した。Ⅹ期に属する。

コンロ（図版 21 土 16）破片であるが、円盤に複数の穿孔をする。大型のコンロの中敷き底と考える。2 区土坑 131 から出土した。Ⅷ期からⅨ期に属する。

鋳型（図版 21 土 17～土 19）小破片のため全容は不明である。鋳型の粗土部分と考える。一方の平坦面に籠目状に刻みを入れる。いずれも 2 区土坑 54 から出土した。Ⅺ期に属する。

韃羽口（図版 21 土 20・土 21）先端がすぼまる円柱形で、被熱により赤く変色する。土 20 は先端が欠損、土 21 は金属滓が付着する。土 21 は 2 区土坑 116 から出土した。Ⅺ期に属する。土 20 の時期の確定はできない。

取瓶（図版 21 土 22～土 29）土師器小型皿に近似する形態である。被熱により灰色に変色して焼け締まり、内面には金属滓が付着する。土師器小型皿とは器壁の厚さなどに違いがあるので転用したものではない。Ⅷ期以降の遺構から散発的に出土し、1 区溝 160 からまとまって出土した。土 28・土 29 は 1 区土坑 465 から出土した。Ⅷ期からⅨ期に属する。土 22～土 27 は 1 区溝 160 から出土した。Ⅺ期古段階に属する。

埴塼（図版 21 土 30～土 32）円筒形で器壁が分厚い。土 32 は底部中央に穿孔がある。内面には金属滓が付着し、外面は被熱により溶融する。土 30 は 1 区土坑 125、土 31 は 2 区土坑 19、土 32 は 1 区土坑 37 から出土した。いずれもⅩ期に属する。

土人形（図版 22 土 33～土 42）いずれもⅪ期以降の遺構から出土した。細い部分・くびれた部分で破損したものが多い。土 33 は高熱を受けて火ぶくれしているが、布袋立像である。中実で古い特徴をもつ。1 区溝 160 から出土した。Ⅺ期古段階に属する。土 34～土 42 は型合わせ成形の仏像（土 34）・神像（土 35～土 37）・動物（土 39～土 42）などである。薄く施釉するもの（土 37）がある。土 34～土 42 は 1 区土坑 45 から出土した。Ⅹ期に属する。

小型容器（図版 22 土 43・土 44）いずれもⅪ期以降の遺構から出土した。軟質の焼成で薄く

施釉するものが多い。土 43 は皿に載せた鯛を型で成形する。土 44 は底部は糸切りで、その他は回転ナデで調整する。1 区土坑 45 から出土した。期に属する。

水滴（図版 22 土 45・土 46）土 45 は磁器染付でアワビを造形する。1 区土坑 117 から出土した。Ⅻ期から 期に属する。土 46 は破片であるが、磁器色絵で鳩を造形する。1 区土坑 45 から出土した。期に属する。

（5）石製品

石製品には碁石・石鍋・容器・温石・硯・砥石・石臼・石塔・加工痕がある軽石などがある。また、加工痕はないが、少量の凝灰岩片・黒曜石片・雲母片が出土した。他にガラス玉が出土しており、ここで報告する。

ガラス玉（図版 23 石 1）直径約 3 mm・厚さ約 1 mm の小粒である。明るい青色を呈する。中央に直径約 1 mm の孔がある。2 区包含層から出土した。時期の確定はできない。

碁石（図版 23 石 2）扁平な円盤形である。石材は暗灰色の頁岩である。2 区土坑 77 から出土した。Ⅻ期に属する。石 2 は黒石だが、別の遺構からは白石も出土した。

円盤形石製品（図版 23・43 石 3・石 4）石 3 は扁平な半球形の円盤の中央に穿孔する。石材は滑石である。1 区包含層から出土した。時期の確定はできない。石 4 は薄い円盤形に成形し、片面に「大」字を線刻する。石材は灰色の粘板岩である。おはじきの可能性がある。2 区土坑 104 から出土した。Ⅺ期に属する。

石鍋（図版 23 石 5）口縁部外面に突帯がめぐる。内外面には部分的に加工痕がのこる。石材は滑石である。1 区地下室 410 から出土した。Ⅶ期古段階に属する。この他にも石鍋はⅦ期からⅨ期の遺構を中心に出土した。すべて破片で全容が判明するものはない。

容器 凝灰岩を削り抜いて加工した容器が数点出土した。小破片のため図示していない。石材はいわゆる笏谷石である。Ⅺ期からⅫ期に属する。

温石（図版 23・43 石 6～石 8）石 6 は石鍋の体部を再加工して、一方に細長い台形の突起を作る。石材は滑石である。2 区穴蔵 1 掘形から出土した。Ⅻ期以前に属する。石 7・石 8 は大小の違いがあるが、長方形の板状で、一方の短辺中央付近に穿孔する。石材はともに滑石である。石 7 は 2 区土坑 415 から出土した。Ⅶ期からⅨ期に属する。石 8 は 1 区地下室 410 から出土した。Ⅶ期古段階に属する。

硯（図版 23・43 石 9～石 12）石 9 の平面形は海部側の幅がわずかに狭くなる隅丸台形である。裏面にはわずかに加工痕がのこる。石材は暗灰色の粘板岩である。1 区井戸 271 から出土した。Ⅷ期に属する。石 10 の平面形は四隅を欠き込む花卉状である。石材は黒色の頁岩である。1 区地下室 410 から出土した。Ⅶ期古段階に属する。石 11・石 12 の平面形は長方形で、石 11 はさらに四隅を面取りする。また、石 11 の裏面には「天下一」などの線刻がある。石材は石 11・石 12 とも灰色の粘板岩である。石 11 は 1 区地下室 410 上層から出土した。Ⅶ期以降に属する。石 12 は 2 区土坑 163 から出土した。Ⅺ期に属する。

不明石製品（図版 23・43 石 13）石 13 は硯に似た形状であるが、用途不明である。石材は黒色の頁岩である。2区溝 230 から出土した。IX期新段階からX期古段階に属する。

砥石 各時代の遺構から出土したが、小破片に破損しているものが多く、図示していない。特にXI期以降増加する。石材はほとんどが粘板岩で、わずかに砂岩がある。

石臼（図版 23・43 石 14）中央に穿孔し、周囲に受部がめぐる。上面は8分割して播目を加工する。石材は斑糲岩の可能性はある。2区井戸 365 から出土した。IX期に属する。

石塔（図版 23 石 15）五輪塔の天輪・風輪もしくは石灯籠の擬宝珠である。石材は花崗岩である。2区土坑 62 から出土した。XI期以前に属する。

（6）金属製品

金属製品には銅製品と鉄製品がある。また、鉄滓・銅滓が少量出土した。

銅製品には銅銭・鋳・鏝・人物立像・鈴・金具・針金・把手・水滴・火掻き・柄・毛抜き・煙管・小柄・軋・切羽・鉤・火箸・匙・鍋・容器・銅板のほか用途不明の板状銅製品・棒状銅製品・筒状銅製品などがある。

銅銭（図版 24・44 金 1～金 5）金 1 は延喜通寶・金 2～金 4 は鑑元大寶である。いずれも明灰色を呈する。肉厚で外縁・内郭・銭銘とも明瞭であるが、裏面は型ズレするもの（金 1～金 3）がある。金 1～金 3 は2区井戸 394、金 4・金 5 は2区井戸 395 から出土した。いずれもⅢ期新段階からⅣ期古段階に属する。その他に銅銭は鎌倉時代から江戸時代前期の遺構からは渡来銭、江戸時代中期以降の遺構からは主として寛永通寶が散発的に出土した。渡来銭の多くは径が小さく、薄い形状から模鑄銭と推定できる。判読できた銭銘には政和通寶・元豊通寶・皇宋通寶がある。

鋳（図版 24・44 金 6～金 9）形態は多様である。金 6・金 8 は先端部はやや尖り、金 8 は頭部が扁平な球形になる。金 7 は先端部が中空で、頭部は二つ巴を3つ組み合わせたような文様がある。金具の可能性はある。金 9 は短い先端部に笠形の頭部を接合する。金 6 は1区土坑 399 から出土した。Ⅳ期中段階に属する。金 7 は1区土坑 567 から出土した。Ⅶ期に属する。金 8 は1区土坑 320 から出土した。Ⅶ期からⅧ期に属する。金 9 は2区包含層から出土した。XI期以前に属する。

人物立像（図版 24・44 金 10）小型・中実の立像である。頭部に宝冠、体に長衣を身につけるようである。2区土坑 150 から出土した。XI期に属する。

香炉（図版 24・44 金 11）脚部の破片である。肉厚で内側に削りをもち、端部は強く外反する。2区土坑 116 から出土した。XI期に属する。

鈴（図版 24・44 金 12）鈴の上半部と考える。頂部に穿孔し、細い銅板を折り曲げて小さな環を作る。2区土坑 39 から出土した。XI期新段階に属する。

金具（図版 24 金 13～金 15）金具の形態は多様である。金 13・金 14 は丸い環を作る。金 15 は細長い板状のものを折り曲げて、端部に穿孔する。金 13・金 14 は2区土坑 39 から出土した。XI期新段階に属する。金 15 は1区溝 160 から出土した。XI期古段階に属する。

また、針金は巻き付けたり、振ったりした形状のものがある。

水滴（図版 24・44 金 16）中空で菊の意匠を立体的に造形する。花芯に穿孔し、端部に注口を加工する。2区壁面から出土した。XI期以降に属する。

火搔き（図版 24・44 金 17）破片のため全容は不明であるが、スコップ状の火搔きと考える。5箇所基部と体部を鋳止めする。体部は平たく広がる。基部は銅板を丸く曲げて中空とし、ここに木質の柄を差し込んだと推定できる。1区土坑 129 から出土した。期以降に属する。

毛抜き（図版 24・44 金 18・金 19）基部をU字形に折り曲げ、先端部は幅広となり、内側に屈曲する。金 18 は 2区土坑 71 から出土した。XI期からXII期に属する。金 19 は 2区井戸 4 から出土した。XII期に属する。

煙管（図版 24・44 金 20・金 21）同一個体の雁首・吸口である。銅板を円筒形に加工して、成形する。1区包含層から出土した。XI期以降に属する。煙管はXI期以降の他の遺構からも出土した。

鉤（図版 24 金 22）J字形に折り曲げ、基部に環を作る。先端部は鋭い。2区井戸 4 から出土した。XII期に属する。

火箸（図版 24 金 23）折れ曲がるが、火箸である。全体に細身で、先端部は尖り、頭部はくびれを作る。2区土坑 94 から出土した。XI期に属する。

鍋（図版 24・44 金 24）小型の鍋である。平底の底部から体部がほぼ直立し、口縁部は屈曲して内弯気味に開く。成形技法は不明である。内面にはウリ科の種子が付着する。1区土坑 45 から出土した。期に属する。

鉄製品には鉄釘・楔・包丁・刀子・鉤・火箸・鉄釜・五徳のほか用途不明の板状鉄製品・棒状鉄製品などがある。錆による損傷が著しく、原形が分かるものは少ない。XI期以降の鉄釘が出土量の大部分を占める。

鉤（図版 24 金 25）U字形に折り曲げ、基部に面を作る。先端部は尖る。2区攪乱から出土したが、XII期に属する可能性がある。

釜（図版 24 金 26）口縁部の破片である。肩が張り、口縁部は小さく直立する。肩部に環が付く。成形技法は鋳造と考えられる。1区土坑 20 から出土した。期に属する。

（7）骨角製品

骨角製品はきわめて少ない。

櫛払（図版 24 骨 1・骨 2）骨製である。欠損部分が多く、全容は不明であるが、扁平な体部の先端に2列に穿孔して刷毛とする。骨 1 は 2区土坑 20 から出土した。XII期から 期に属する。骨 2 は 2区井戸 4 から出土したXII期に属する。

ピン状骨製品（図版 24 骨 3）骨製である。先端部はやや尖り、頭部は小さな5弁を加工する。2区土坑 20 から出土した。XII期から 期に属する。

(8) 木製品

井戸杵・柱根などがあるが、いずれも腐朽が著しい。井戸杵は1区井戸452・1区井戸580で縦板・横棧の一部を採集したが、加工痕などの詳細は不明である。その他に漆器片があるが、木質部は完全に腐朽しており、漆膜を採集したのみである。

(9) その他の出土遺物

動物遺体（図版45）獣骨・鳥骨・魚骨・貝殻がある。詳細は付章1を参照していただきたい。

植物遺体 少量の種子を採集した。一部不明のものがある他はすべてモモである。

焼土塊・焼土 各時代の遺構から出土した。明橙色を中心とする色調を呈する。大部分は1cm以下の細粒であるが、大きなものは直径10cm以上あり、スサとして用いられた植物体の痕跡があるものがある。壁土・屋根の葺土であったと推定できる。

炭片 各時代の遺構から出土した。大部分は1cm以下の細片であるが、少量ながら原形をのこすものがある。一部については樹種の同定を行っている。付章2を参照していただきたい。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 2) 岡田憲一「西日本縄文後期後葉土器編年序論—向出遺跡出土土器の研究—」『向出遺跡 一般国道

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080~90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580~90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV
古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中
新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新

26号（第2阪和国道）の建設に伴う発掘調査報告書（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第55集』（財）大阪府文化財調査研究センター 2000年

- 3) 従来の土師器の系譜につながる橙褐色の胎土の土師器を「赤色系土師器」、VI期以降に増加する白色の精良な胎土の土師器を「白色系土師器」とする。

5. まとめ

調査成果に基づき、調査値の歴史の変遷を概観する。

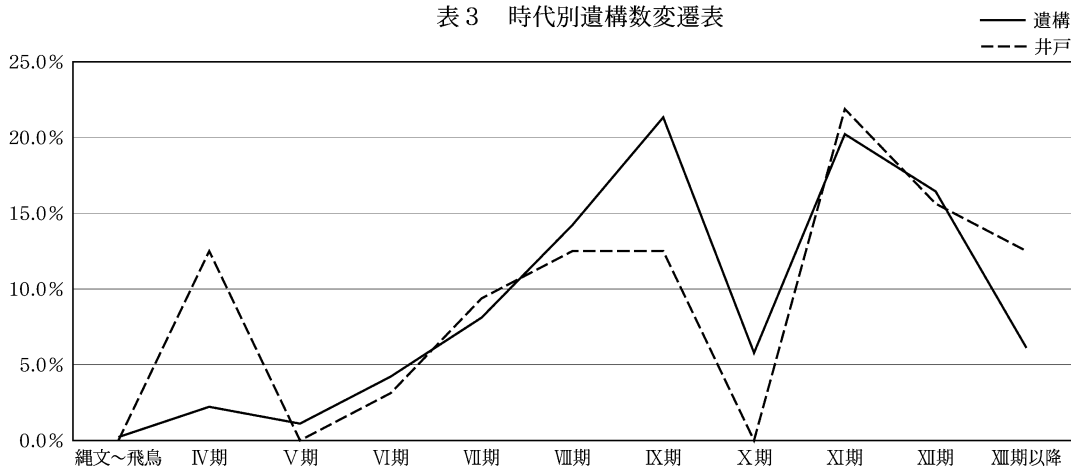
調査で検出した遺構のうち、時代を判別することができた約 900 基を時代別遺構変遷図（図 35～45）および時代別遺構数変遷表（表 3）にまとめた。ただし、古い時代の遺構ほど新しい時代の遺構により削平される傾向があるので、古い遺構ほど実際よりは数が少なくなることを念頭に置かれない。また、表 3 には検出した 32 基の井戸の割合も加えた。土地利用の変遷を探る上で有効と考えたからである。

今回の調査で採集した最も古い遺物は、1 区流路 632 から出土した縄文時代後期から晩期の土器である。共伴した炭化材の年代測定の成果とも整合することから、流路上流に集落が存在したことが推定でき、当時の人々が北白川などの丘陵地から京都盆地の低地部へ進出していたことを示している。『京都市遺跡地図台帳』では調査地北に位置する烏丸御池遺跡に縄文時代が含まれていないが、今回の発見によって遺跡の上限が縄文時代後期まで遡る可能性が高くなった。

1 区流路 632・流路 632B からは、弥生時代中期後半から後期中葉の完形に近い状態のものを含む土器がまとまって出土した。調査地南側の調査で弥生時代後期前半の竪穴住居を検出しており関係が注目できる¹⁾。また、今回の成果により烏丸御池遺跡と調査地南に位置する烏丸綾小路遺跡が一つに繋がり、弥生時代から古墳時代にかけての集落の範囲に再検討が必要となってきた（図 35）。

今回検出した平安京造営以降の性格が明らかでない遺構は、平安時代中期の井戸が最も古い。東洞院大路から東に約 14 m の位置で 1 区井戸 583 を検出し、四条坊門小路沿いで 2 区井戸 394・

表 3 時代別遺構数変遷表



	縄文～飛鳥	Ⅰ～Ⅳ期	Ⅴ期	Ⅵ期	Ⅶ期	Ⅷ期	Ⅷ期	Ⅸ期	Ⅹ期	Ⅺ期	Ⅻ期	Ⅻ期以降	合計
遺構数	2	20	10	38	73	128	192	52	182	148	55	900	
井戸数	0	4	0	1	3	4	4	0	7	5	4	32	

Ⅰ～Ⅳ期	8 世紀後半～11 世紀後半（奈良時代後半～平安時代中期）	Ⅸ期	15 世紀中頃～末（室町時代後期前半）
Ⅴ期	11 世紀末～12 世紀後半（平安時代後期～末期）	Ⅹ期	16 世紀前半～後半（室町時代後期後半～桃山時代）
Ⅵ期	12 世紀末～13 世紀中頃（鎌倉時代前期前半～前期後半）	Ⅺ期	16 世紀末～17 世紀中頃（桃山時代～江戸時代初頭）
Ⅶ期	13 世紀後半～14 世紀中頃（鎌倉時代後期～室町時代初頭）	Ⅻ期	17 世紀後半～18 世紀（江戸時代前期）
Ⅷ期	14 世紀後半～15 世紀前半（室町時代前期前半～前期後半）	Ⅻ期以降	18 世紀以降（江戸時代中期以降）

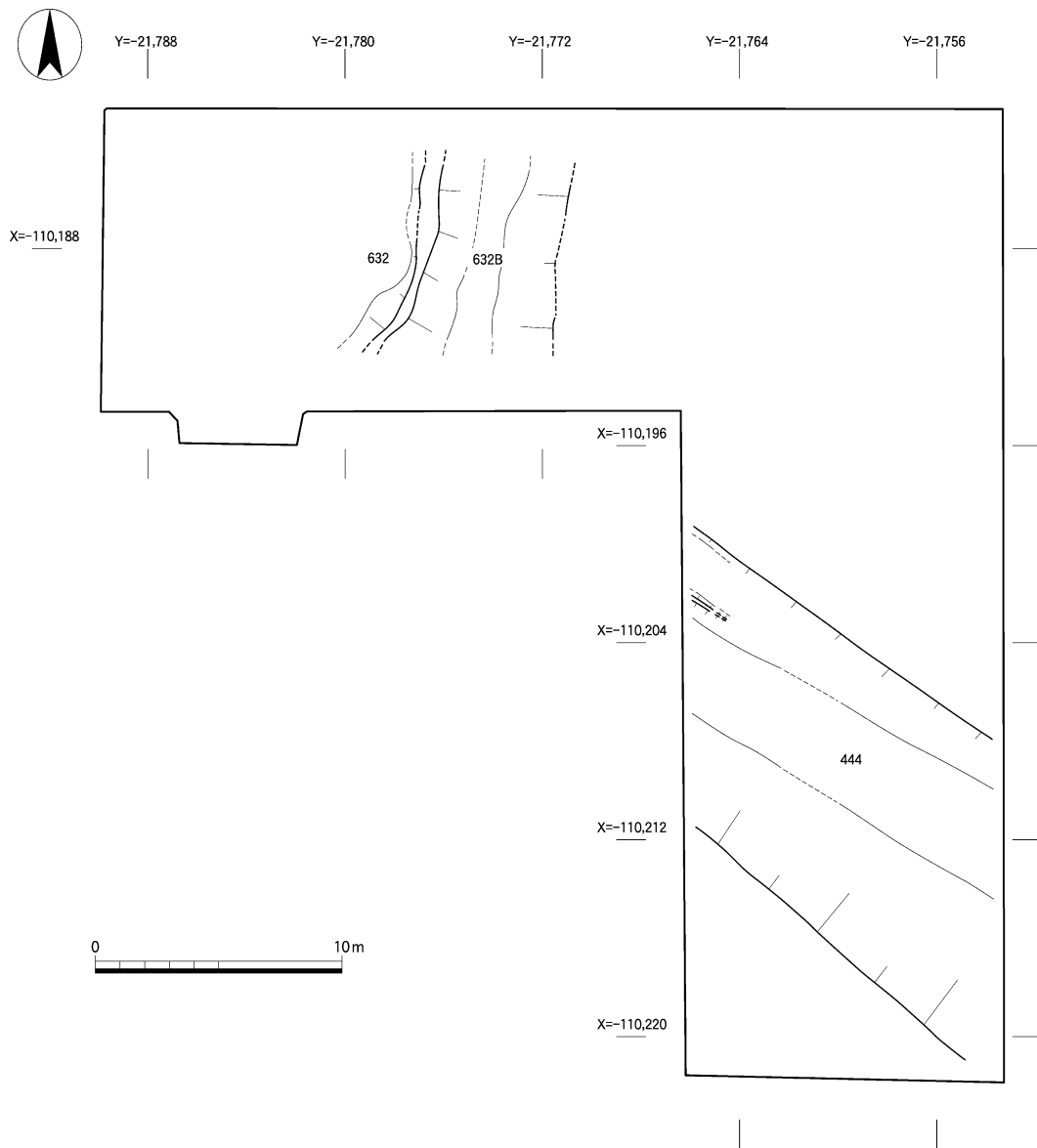
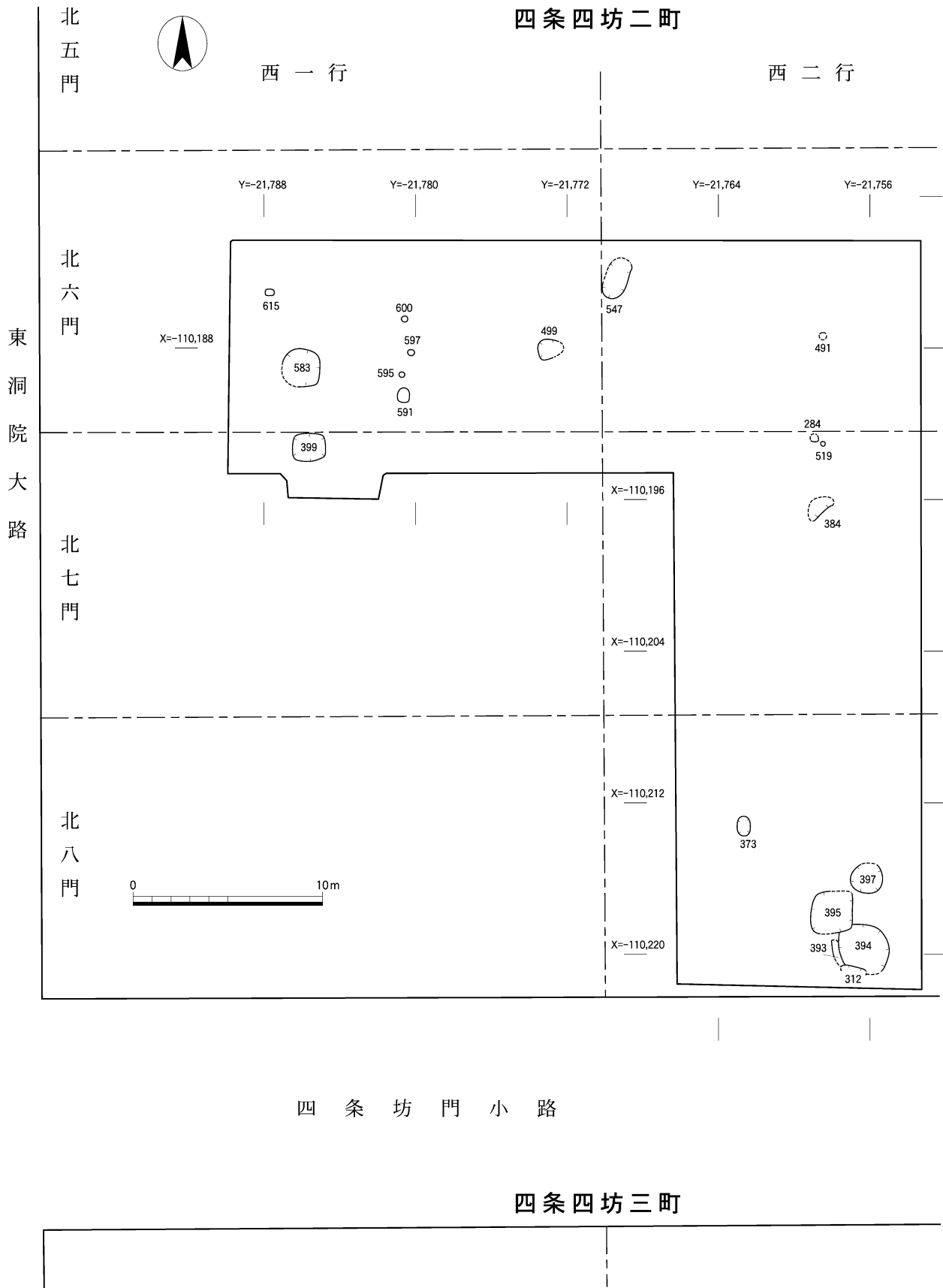


図 35 遺構変遷図 1 縄文時代から飛鳥時代 (1 : 300)



四条坊門小路

四条四坊三町

図 36 遺構変遷図 2 I~IV期 (1:300)

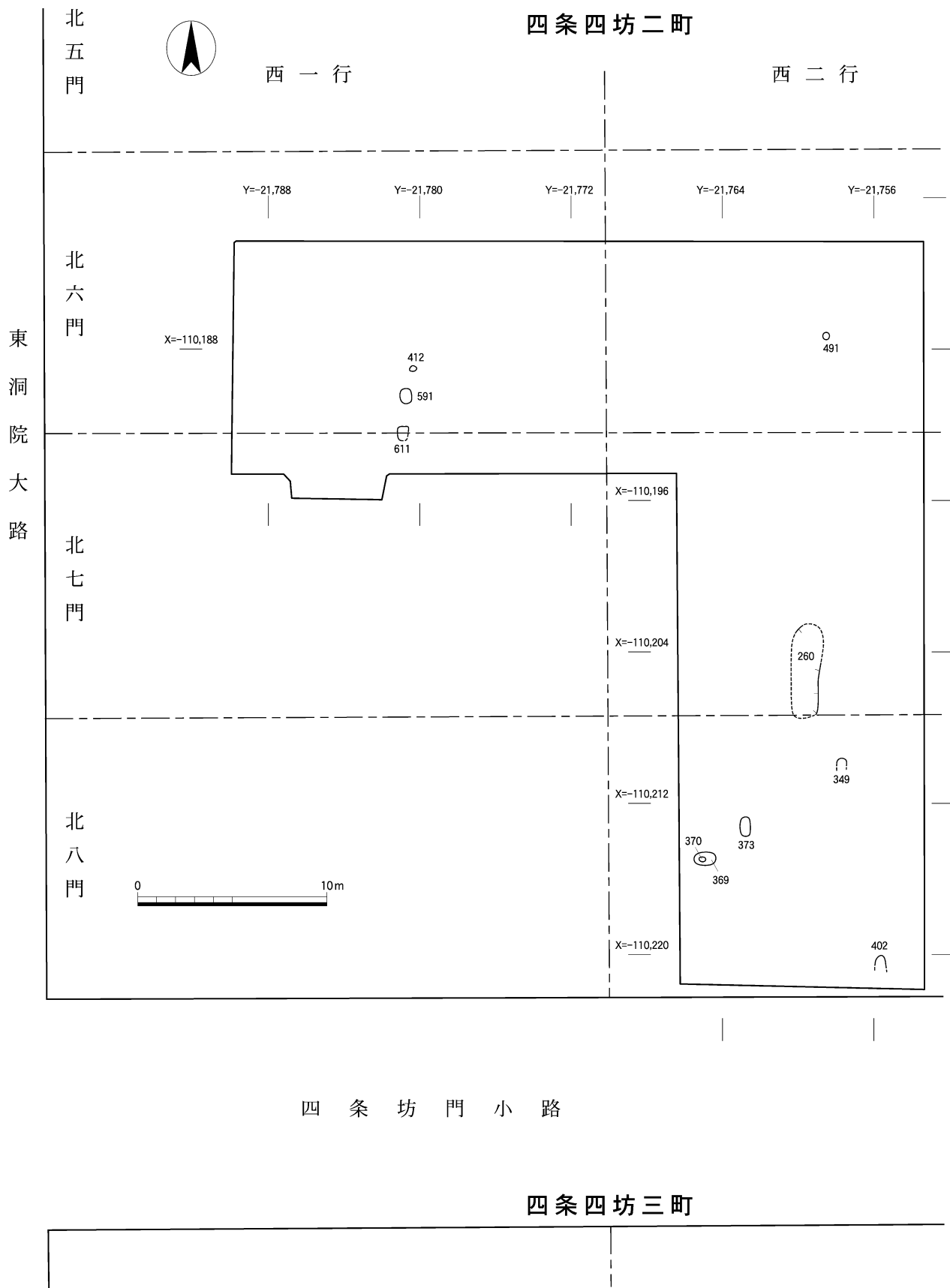


図 37 遺構変遷図 3 V期 (1 : 300)

395 を検出した。しかし、『中右記』に記載がある 12 世紀前半の藤原宗通や 12 世紀後半の藤原重通の邸宅であったとされている時期の遺構数は、平安時代中期に比べると半減し井戸も検出していない。平安時代後期から末期にかけて遺構が半減する原因については不明であるが、比較的大きな邸宅に変化したことによって、単位面積あたりの遺構密度が減少した可能性がある（図 36・37）。

ところが、鎌倉時代に入って遺構は一挙に増大の傾向を見せ、遺構数のピークをなす室町時代後期前半まで年代を追うごとにほぼ同一の率で増大する。応仁・文明の乱以前の京都の市街地は平安京の左京域に相当する範囲のほぼ全域に広がっていたことが、土倉・酒屋・油屋の分布で判明している（図 6）。1 区地下室 410・裏据付穴群を検出したことは、何らかの商工業に関わっていた人が住んでいた可能性が高い。また、鎌倉時代から室町時代の井戸を 12 基検出したことは、該当地が町屋として利用されていたことを示しており、街区内に造られた 3 条の南北溝（1 区溝 330・454・490）は、町屋の成立と廃水処理を念頭に置いた区画溝の機能を果たしていた可能性がある。

従来の研究では調査地周辺は、下京町組東側と下京惣構西側の間の空閑地帯、もしくは不明な地帯とされている。また、下京惣構が高倉通と東洞院通の間にあると想定されているが、正確な位置は不明なままである（図 7）。したがって、調査地が室町時代後期に下京惣構内の空閑地であったのか、町屋が惣構際まで広がっていたかは発掘調査で検証されるべき問題として残されていた（図 38～41）。

今回の調査では京都が荒廃したとされた応仁の乱に対応する室町時代後期前半の遺構数がピークをなすのに対し、室町時代後期後半の遺構が少ないことは注意を要する。この現象は応仁の乱の頃の下京はむしろ活況を示しており、その後に遺構が減少するのは下京が焼き討ちされた天文法華の乱（1536 年）の影響であると考えられる。今回検出した室町時代後期後半の遺構は性格も不明で、特に井戸を 1 基も検出していないことが特徴的である。調査地周辺は比較的空閑地であったことが推定できる（図 42）。

江戸時代初頭には遺構数が室町時代後期前半の状況に復活し、むしろ井戸の数はより多くなっていることがわかる。なお、江戸時代前期が江戸時代初頭より少ないのは近世初頭の第 1 面まで重機掘削したためで、実際の遺構数は同程度になるものと思われる（図 43）。

東洞院通東端より東約 27 m で検出した 1 区溝 160 は、街区の西からほぼ 4 分の 1 の位置に南北に掘られており、掘削期が桃山時代まで遡るとすれば、天正地割に関連する遺構である可能性もあった。北側の調査でもこの溝の北延長を検出している²⁾。

現在の東洞院通から高倉通までの距離は 130 m であるが、京間での間数を添えて描かれた『寛永後万治前洛中絵図』（以下『洛中絵図』とする）にこの街区の東西幅を「六拾六間」（1.97 m × 66 = 130.02 m）との記載があり、江戸時代初頭から現在まで変化がないものと考えられるので、東洞院通東端を測点の基準にすることが可能である。現在の高倉小学校の敷地部分は『洛中絵図』に「織田辰之助」の屋敷が描かれており、記載によれば屋敷の東西幅の合計が 38 間半（75.845 m）

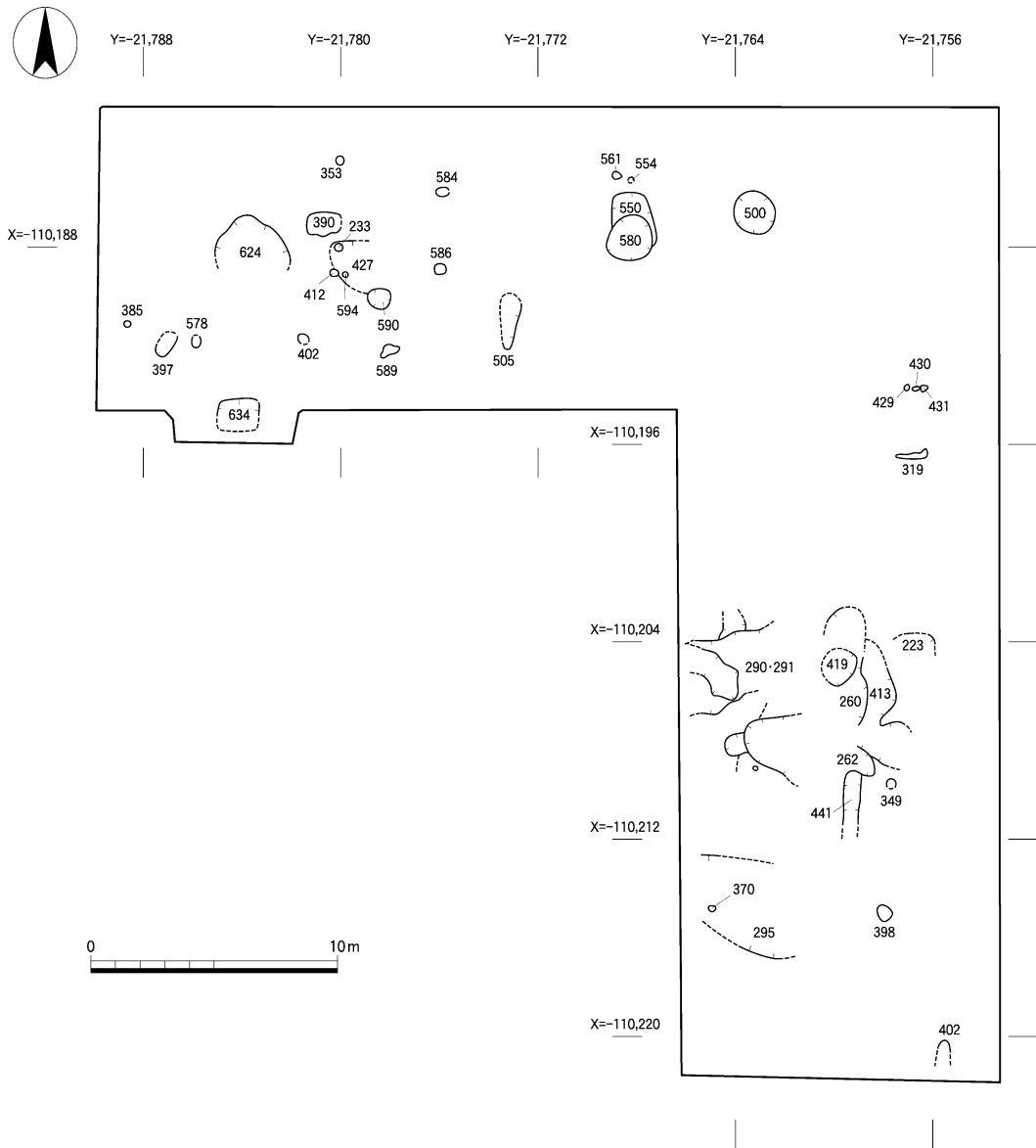


図 38 遺構変遷図 4 VI期 (1 : 300)

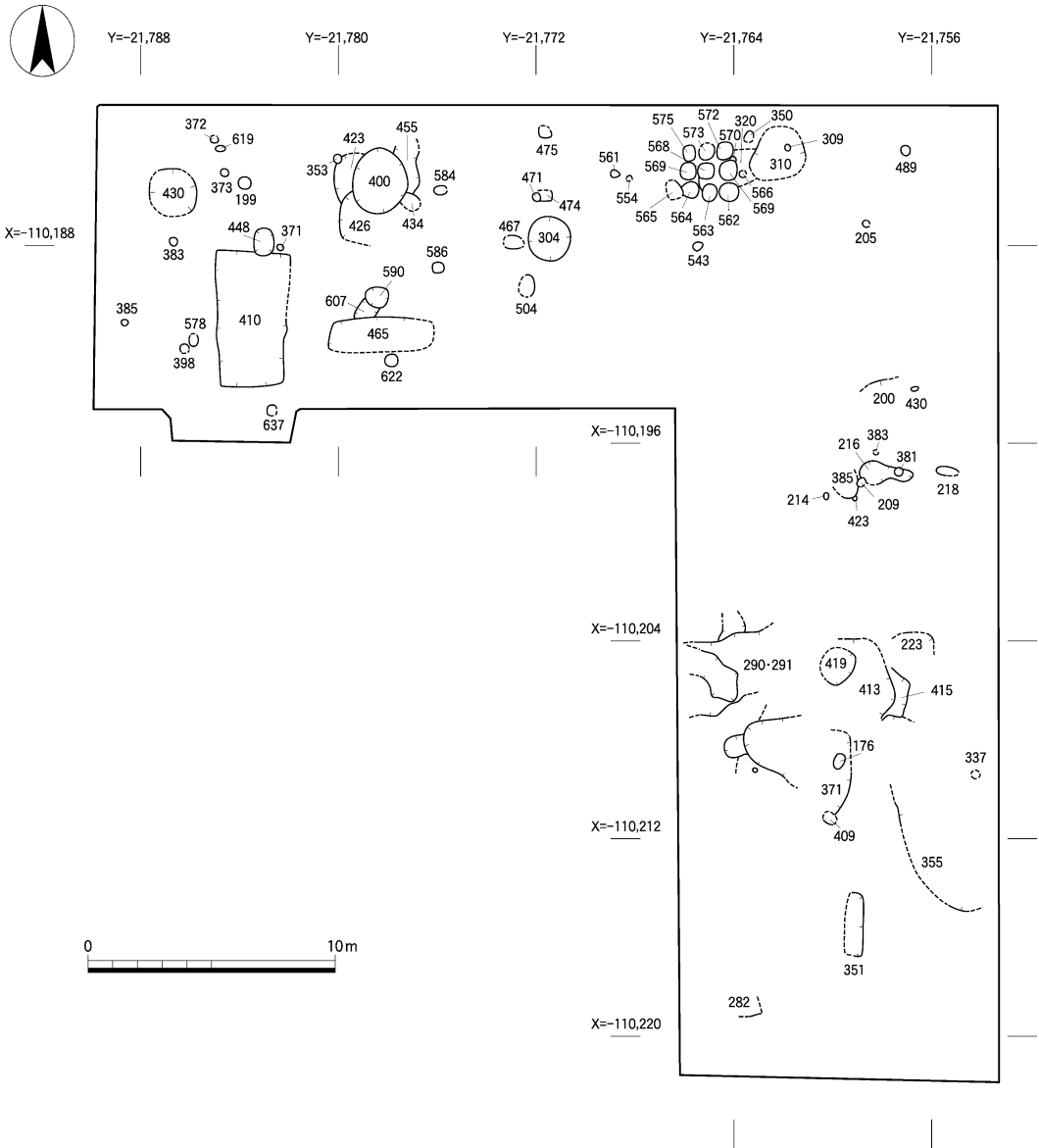


図 39 遺構変遷図 5 VII期 (1 : 300)

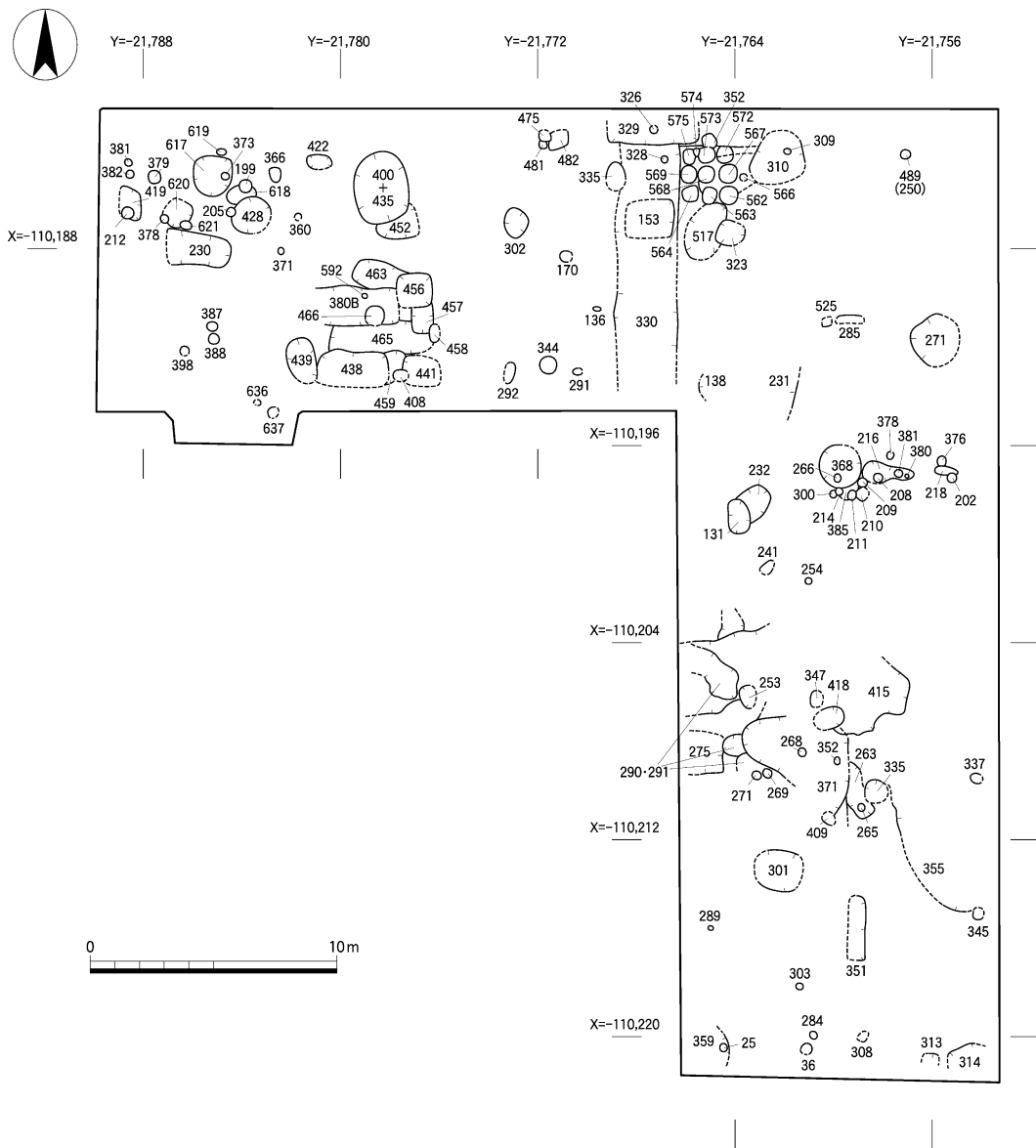


図 40 遺構変遷図 6 Ⅷ期 (1 : 300)

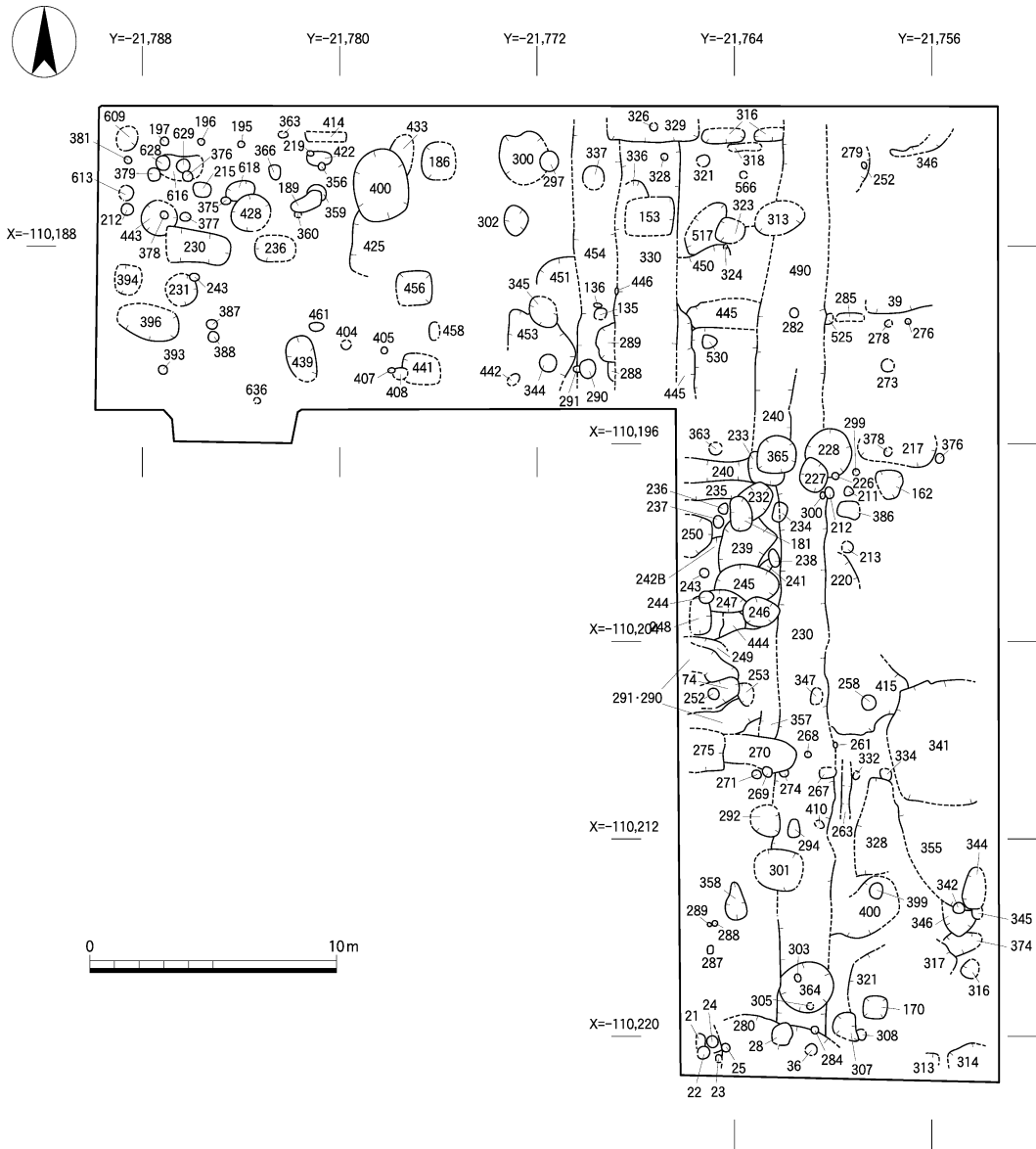


図 41 遺構変遷図 7 Ⅰ期 (1 : 300)

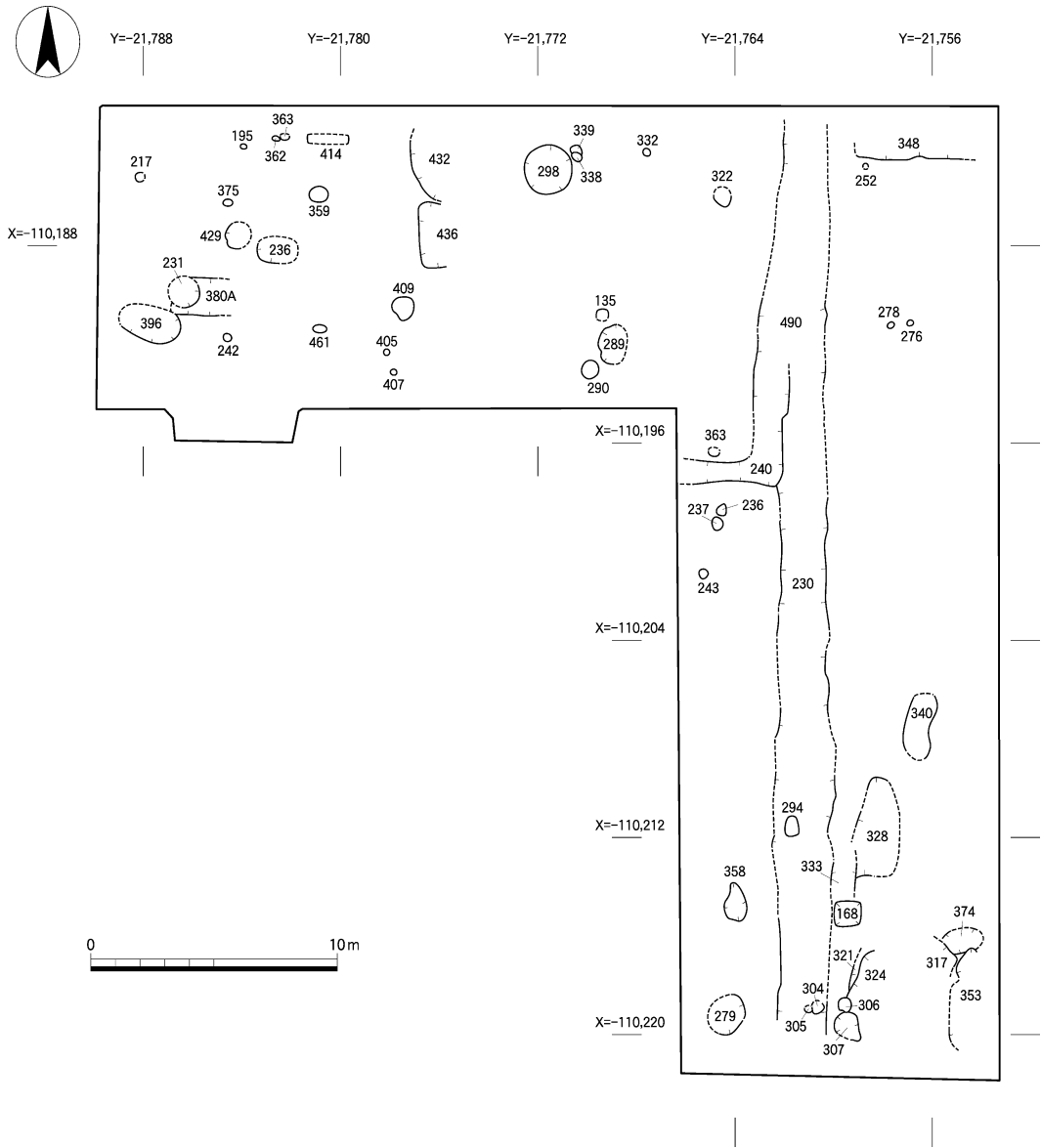


図 42 遺構変遷図 8 X期 (1 : 300)

となる。東西幅「六拾六間」から屋敷東西幅 38 間半を引くと京間 27 間半 (54.175 m) となり、さらにそれを半裁した地点に 1 区溝 160 が該当する。現在の東洞院通から東に 27 m 地点に位置し、東洞院通東側に面した町屋の奥行を規定していた区画溝であり、京間 14 間 (1.97 m × 14 = 27.58 m) もしくは田舎間の 15 間 (1.82 m × 15 = 27.3 m) に一致する。1 区溝 160 の掘削時期は、埋土下層から 17 世紀初頭の唐津産施釉陶器碗などが出土したことから、16 世紀末から「すわの町」の記載が初めて登場する『洛中洛外地図屏風』が描かれた寛永元年 (1624) 頃までである可能性が高い。

1 区溝 160 西側の町屋跡は、調査区西部南半に位置する東西の同一ライン上に、1 区井戸 222・221、1 区竈 224、1 区糞据付穴 158・177・182 などが並んでおり、敷地の南端であると考えられる。この建物の間口は同一線上に並ぶ 1 区井戸 222・221 の掘形南端から北側の敷地に含まれると考えられる 1 区竈 218 南端までの距離が約 7 m であり、京間 3 間半 (= 6.895 m) の間口に復元できる。したがって、この中央部の町屋の北側にも 1 区竈 218 を含む町屋、南側にも町屋が建ち並んでいた可能性が高い。また、これらの町屋は敷地南側に東西方向のトオリニワを設けていた可能性が高い。

1 区溝 160 東側でも 1 区井戸 115 が、1 区井戸 222・221 と同一ライン上に存在し、南側には 1 区土蔵 78 がある。1 区井戸 115 と 1 区土蔵 78 との間には 1 区柱穴 26・46・126・133 などが東西一列に並んでおり、1 区井戸 115 南端と 1 区土蔵 78 北端の間が敷地境であると考えられることができる。江戸時代の井戸 115 は石組井戸で、コンクリートや漆喰などによる補修や水位深化による掘り下げなどを経て近代まで利用され続けていたものと考えられる。このことから中央南の敷地境は近代まで変更されなかった可能性が高い。1 区土坑 45・117・71 などはこの敷地境北側に沿っている。

御射山町側の敷地最奥に江戸時代初頭から前期にかけての大きな 3 基の土坑 (1 区土坑 96、2 区土坑 123・116) があり、これらの間隔から江戸時代初頭から前期には間口 3 間半で町屋の敷地が割り付けられた可能性がある。泉正寺町側奥にこれらの土坑がないことについては、敷地面積が狭く空地がほとんどなかったためと考える。泉正寺町と御射山町の境界は、2 区柵 1 によって蛸薬師通から 10 間 (20 m) 地点に確定されるまで、2 区柵 1 から北に 1.35 m 地点と南に 1.5 m 地点の約 3 m 幅で 2 度移動がある。

2 区柵 1 以南の泉正寺町側では、調査区中央部の南北方向に並ぶ石列や 2 区井戸 146・9、2 区集石土坑 45 の西端および東側の 2 区土蔵 70 東端によって東西の敷地が区画されている。東側の敷地からは井戸の他に、蛸薬師通に近い位置に石組の 2 区穴蔵 1、2 区石室 169・170・168 がある。西の敷地からも石組の 2 区穴蔵 7、2 区土蔵 70、2 区井戸 30・31、土坑などを検出している。西側敷地の 2 区土蔵 70 は蛸薬師通に近く、しかも規模が小さいことが特徴である。また、調査区南の西壁際に重複する 2 区井戸 30・31 を検出しており、これらの井戸掘形西端を西側敷地の境界に想定すると、1 区で検出した間口と同じ 3 間半となる。泉正寺町側からは竈を検出していないことから、竈は調査区外の南側に設置されていた可能性が高い。井戸の並びなどから西

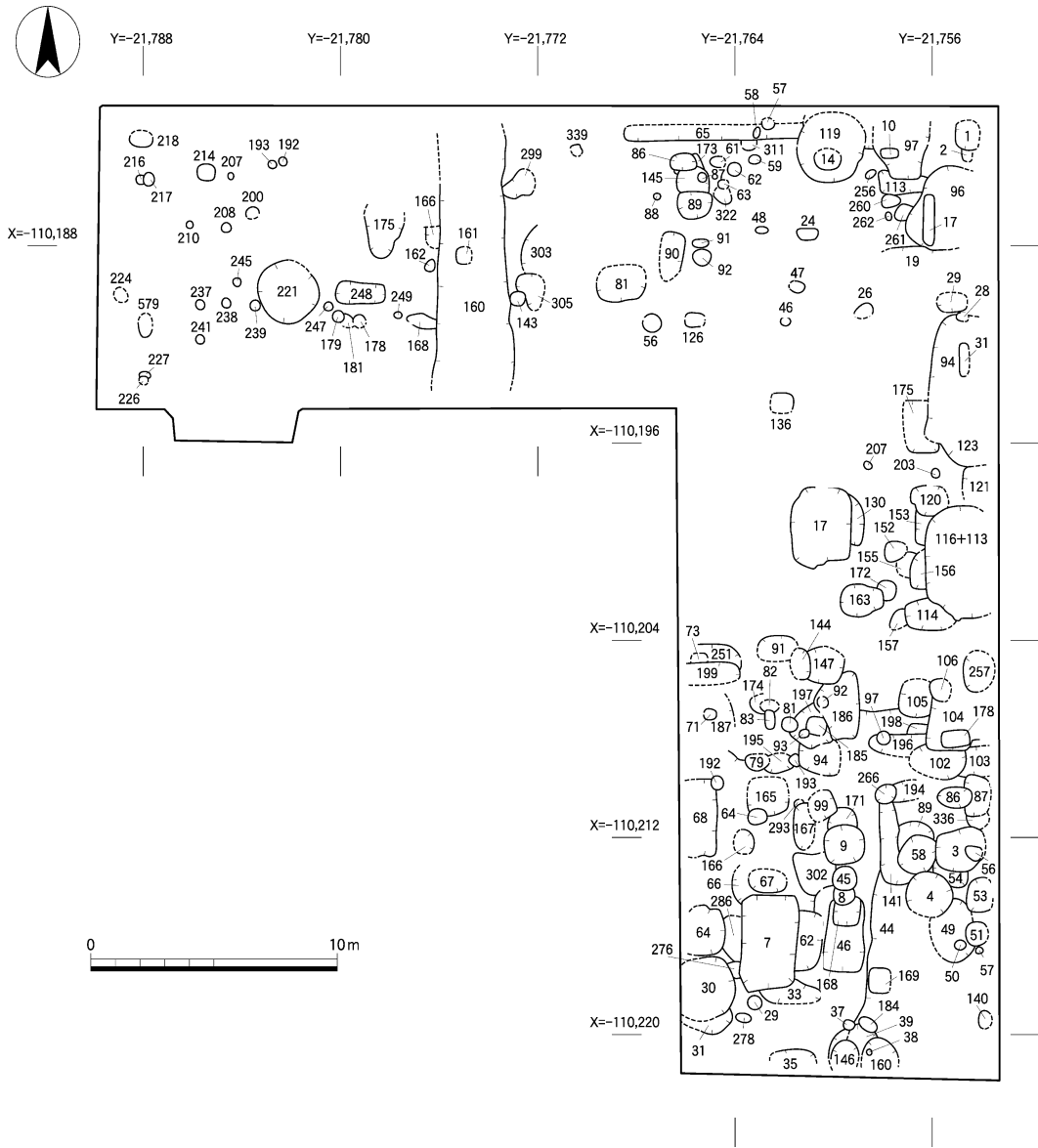


図 43 遺構変遷図 9 XI期 (1 : 300)



Y=-21,788

Y=-21,780

Y=-21,772

Y=-21,764

Y=-21,756

X=-110,188

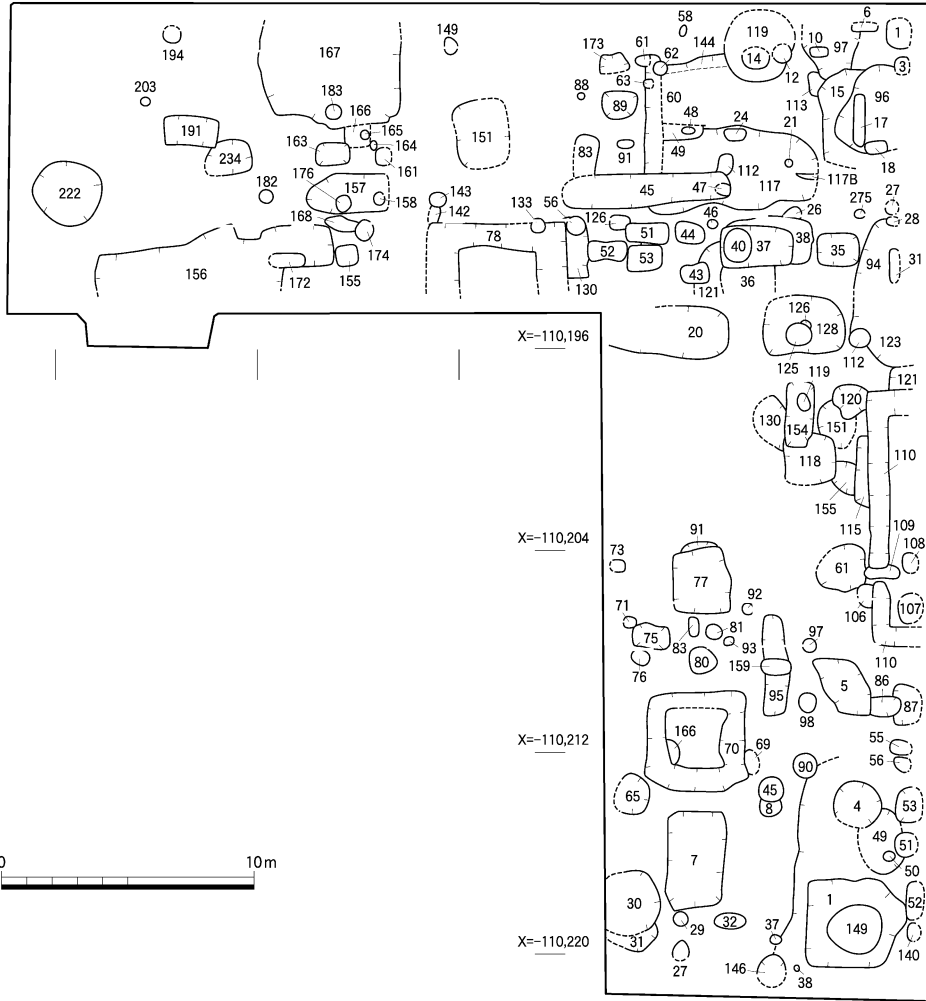


図 44 遺構変遷図 10 XII期 (1 : 300)

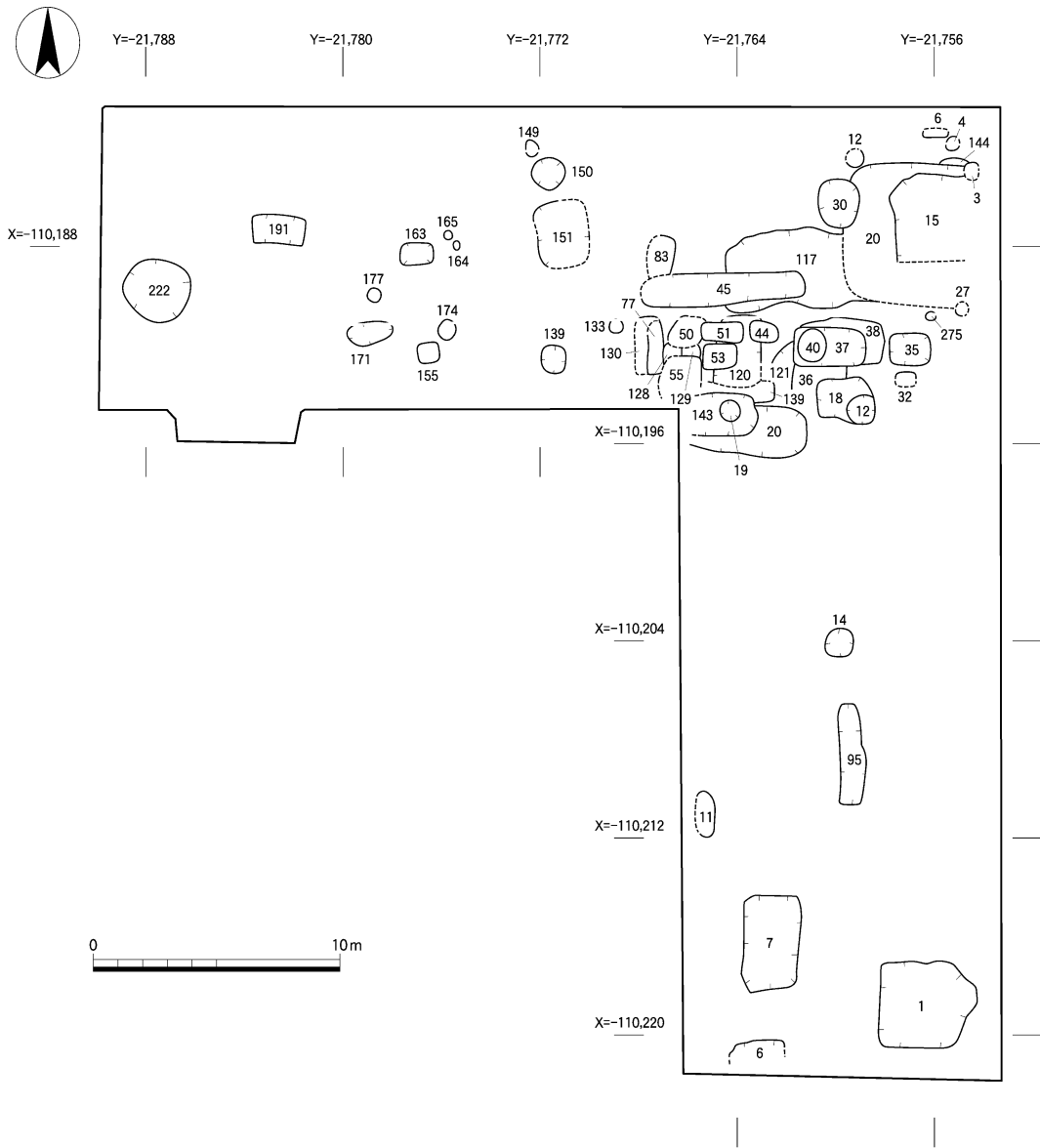


図 45 遺構変遷図 11 期 (1 : 300)

側にトオリニワを設けていた可能性が高い。なお、東側の敷地境は3間半地点が調査区東壁を越えるので不明である。ただし、東側敷地内に2区井戸4があるので地目の変化があった可能性がある。

2区柵1以北の御射山町側は、2区北半東壁付近で南北幅5間（約10m）の2区土蔵110を2区柵1を跨いで検出した。この土蔵北端から北に3間半の地点が1区で検出した南側敷地の北境となる。間口5間の東西に長い御射山町に属する町屋最奥に設けられた土蔵である可能性が高い。土蔵消滅後に4尺（約1.2m）ほど町境が北に移動したものと思われる（図43～45）。

京都風物案内書で名高い江戸時代中期の『京羽二重』・『京羽二重織留』によれば両側町であるため位置は特定できないが、御射山町・泉正寺町には、俳諧師・銀座役人・能楽師などの様々な職種他に、飛脚屋・諸国買物問屋・諸国絹問屋・大阪呉服屋・両替屋・紅花仲買問屋などが書き上げられており、近世の物流経済を支えた店が存在したとされている。検出した土蔵との関連が注目できる。また、2基の穴蔵を検出した泉正寺町側に限っていえば、穴蔵は間口が狭く奥行が短い敷地の有効利用の結果であったとも考えられよう。土蔵・穴蔵の建築には費用がかかること、また、茶陶などを含む遺物が多く出土したことから、京中でも裕福な町人層が住んでいたことが考えられる。

さらに、商業だけでなく1区敷地奥の土坑45・117・71からは多量の炭と海綿状鉄滓が多量に出土した。この堆積物は鉄分が酸化し黄褐色を呈し、多孔性で軽く粘土の他にスサが混入している。鉄滓であることが化学分析によって判明しているわけではないが、何らかの鉄分を含んだ産業廃棄物である可能性が高い。南側の敷地からは埴塼なども出土していることから、江戸時代前期には何らかの生産に携わっていた町屋の可能性もある。人々の食生活の一端は、動物遺存体の検討により明らかにすることができた。

註

- 1) 伊藤 潔『平安京左京四條四坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-28（財）京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 2) 山本雅和「平安京左京四條四坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年

付章 1 動物遺存体について

丸山真史 (京都大学大学院人間・環境学研究科)

(1) 概要

動物遺存体は、13世紀から19世紀の遺構、あるいは遺物包含層から出土しており、破片数にして230点を数え、そのうち種類と部位を同定したものは178点にのぼる。それらの内訳は貝類が115点と卓越し、ついで魚類29点、哺乳類20点、鳥類14点が続く(表4、図46)。

当調査地は、東洞院通に面する町屋の一画にあたり、東隣は武家屋敷地である。動物遺存体が出土している遺構は、主に町屋の裏手にあたる、武家屋敷との中間に位置する溝・土坑・井戸・穴蔵・土蔵・柱穴である。

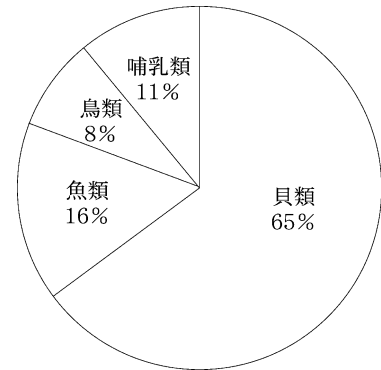


図46 動物遺存体の組成 (N=178)

表4 種名表

軟体動物門 Mollusca	タラ目 Gadiformes
腹足綱 Gastropoda	タラ科 Gadidae
古腹足目 Vetigastropoda	タラ科の一種 Gadidae, gen. et sp. indet.
ミミガイ科 Hiliotidae	カサゴ目 Scorpaeniformes
ミミガイ科の一種 Haliotidae gen. et sp. indet.	コチ科 Platycephalidae
サザエ科 Turbnidae	コチ科の一種 Platycephalidae, gen. et sp. indet.
サザエ <i>Turbo cornutus</i>	スズキ目 Percidae
新腹足目 Neogastropoda	アジ科 Carangiae
アッキガイ科 Muricidae	ブリ属の一種 <i>Seriola</i> sp.
アカニシ <i>Rapana venosa</i>	シイラ科 Coryphaenidae
エゾバイ科 Buccinidae	シイラ <i>Coyphaena hippurus</i>
バイ <i>Balyonia japonica</i>	タイ科 Sparidae
テングニシ科 Melongenidae	マダイ <i>Pagrus major</i>
オニニシ <i>Hemifusus colosseus</i>	タイ科 Sparidae gen. et sp. indet.
斧足綱 Bivalvia	鳥綱 Aves
フネガイ目 Arcoida	コウノトリ目 Ciconiformes
フネガイ科 Arcidae	サギ科 Ardeidae
アカガイ <i>Scapharca broughtonii</i>	サギ科の一種 Ardeidae gen. et sp. indet.
フネガイ科の一種 Arcidae gen. et sp. indet.	カモ目 Anseriformes
カキ目 Ostreoidae	カモ科 Anatidae
イタボガキ科 Ostreidae	ハクチョウ属の一種 <i>Cygnus</i> sp.
イタボガキ科の一種 Ostreidae gen. et sp. indet.	カモ科の一種 Anatidae gen. et sp. indet.
マルスダレガイ目 Veneroida	ツル目 Gruiformes
シジミ科 Corbiculidae	ツル科 Gruidae
シジミ科の一種 Corbiculidae gen. et sp. indet.	タンチョウ属の一種 <i>Grus</i> sp.
マルスダレガイ科 Veneridae	
ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>	哺乳綱 Mammalia
	奇蹄目 Perissodactyla
脊椎動物門 Vertebrata	ウマ科 Equidae
硬骨魚綱 Osteichthyes	ウマ <i>Equus caballus</i>
ウナギ目 Anguilliformes	偶蹄目 Artiodactyla
ハモ科 Muraenesocidae	ウシ科 Bovidae
ハモ属の一種 <i>Muraenesox</i> sp.	ウシ <i>Bos taurus</i>
コイ目 Cyprinida	イノシシ科 Suidae
コイ科 Cyprinidae	イノシシ <i>Sus scrofa</i>
コイ <i>Cyprinus carpio</i>	シカ科 Cervidae
	ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>

(2) 種類別の出土状況



図 47 タンチョウ属の指



図 48 イルカ類の肩甲骨

貝類では、ハマグリ（左 19 右 20 不明 2）41 点、シジミ類（左 16 右 14 不明 9）39 点、アカニシ 17 点、アワビ類 8 点、サザエ 4 点、フネガイ科（不明 2）2 点、アカガイ（不明）・オオニシ？・バイ・イタボガキ科（不明）1 点ずつ、計 115 点が出土している。ハマグリの大きさは殻高 40 mm から 50 mm に集中し、シジミ類の大きさは殻高 20 mm 内外に集中する。1 区溝 160 のアカニシは、殻長 100 mm 以上と推定される比較的大きな個体ばかりで、それらのうち 2 点は殻体部が穿孔されている（図版 45- 3）。フネガイ科には、アカガイ・サルボウガイ・サトウガイ・ハイガイなどが含まれ、破損しているため種を特定できないが、アカガイの可能性が高い。

魚類では、マダイ 13 点、タイ科 6 点、コチ科 3 点、シイラ・タラ科 2 点ずつ、ハモ属・コイ・ブリ属 1 点ずつ、計 29 点が出土している。マダイはいずれも体長 30 cm 以上で、大きな個体は 60 cm 以上と推定される。2 区土坑 35 と 2 区土坑 118 のマダイの前頭骨は、正中線に沿って左右二つに切断されている。タイ科にはマダイ以外に、クロダイ・キダイ・チダイなどが含まれるが、本資料では種類を特定することができない。2 区土坑 58 のタイ科の主鰓蓋骨（左）は、関節下部で体軸と水平方向に切断されている。コチ科は、いずれも体長 40 cm 以上と推定される大型の個体ばかりである。シイラは、1 点が体長 60 ～ 80 cm 程度、もう 1 点が 100 cm 以上と推定される大型の個体である。タラ科は、いずれも体長 60 cm 以上の個体と推定される。ハモ属は、体長 100 cm 以上と推定される大型の個体であり、前頭骨の右側が正中方向に切断されている。コイは体長 50 cm 程度、ブリ属は体長 80 cm 以上と推定される個体である。

鳥類では、カモ科 12 点、タンチョウ属・サギ科 1 点ずつ、計 14 点が出土している。2 区土坑 128 のカモ科の大きさは、手根中手骨（左）がオナガガモ程度であり、頭蓋骨・肩甲骨（右）・尺骨（左）がマガモよりやや小さく、上腕骨（左 1 右 1）と橈骨（左 1 右 1）がヒドリガモより



図 49 1 区溝 160 ニホンジカ骨出土状況

やや大きい（図版 45- 2）。2 区土坑 35 のカモ科は、マガンとマガモの中間程度の大きさである。2 区土坑 137 のタンチョウ属の指骨は、最大長 24.2 mm を測り、マナヅル・ナベヅルよりも大きい（図 47）。近位端と遠位端には切断された痕跡が、遠位部には削られた痕跡が見られる。

哺乳類では、ニホンジカ 9 点、イノシシ 4 点、ウマ 3 点、イルカ科 2 点、ウシ・クマネズミ属 1 点ずつ、計 20 点が出土している。1 区溝

160 下層のニホンジカの肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、中手骨は、解剖学的な位置を保った交連状態で出土している（図 49）。2 区土坑 39 のイルカ類の肩甲骨は遠位部で切断されており、遠位端付近に深く鋭い傷が見られる（図 48）。ウマはいずれも臼歯が上顎骨から遊離した状態で出土しており、2 区土坑 141 の第 3 前臼歯が 12 歳から 13 歳、2 区井戸 364 の第 3 後臼歯が 3 歳から 5 歳と推定される。2 区土坑 58 のウシの角芯は、先端よりやや下部に 2 条の太く浅い溝が刻まれている（図版 45- 1）。

（3）平安京左京四条四坊二町跡にみる中・近世の動物利用

a) 海産資源の利用について

内陸部に位置する京都において、近世では多様な海産物が消費されていたことが、発掘調査によって明らかになりつつある。最近では平安京左京三条四坊十町跡¹⁾、平安京左京五条三坊九町跡²⁾において、14 世紀から 15 世紀に比定される遺構から海水魚が出土しており、中世における海産資源の利用も注目される。当遺跡でも中・近世の海産物が出土しており、特に近世では種類、量ともに豊富である。

16 世紀までは種類を特定できなかった腹足綱（巻貝）が少数出土しているのに対して、17 世紀より後では海産魚貝類が増加し、貝類ではアカニシ、魚類ではマダイの出土が目立つ。アカニシは身を取り出す際に殻体を打ち割っている（図版 45- 3）。アワビ類・サザエ・バイ・ハマグリ・アカガイ・カキ類は、従来の京都の発掘調査でも一般的に出土する貝種であるが、2 区土坑 163（17 世紀前葉～中葉）のオニニシ？は、京都では他に出土例がない。2 区土坑 35（17 世紀中葉）と 2 区土坑 118（17 世紀後葉～19 世紀前葉）のマダイの前頭骨が切断されており、出汁や料理として頭部を使用するため「兜割」されている。また、1 区土坑 30（18 世紀中葉～19 世紀前葉）から、京都の夏の風物詩であるハモ属の切断された前頭骨が出土している。マダイの頭部は潮煮などの料理にも使用するが、ハモの頭部は出汁をとるために切断したのであろう。一方、冬を代表するタラ科も 2 区土坑 39（17 世紀中葉）から出土しており、若狭や越前などの日本海側からの流通品と考えられる。

これらの魚貝類に加えて、イルカ類が出土していることが特筆される。15 世紀中頃に成立した『尺素往来』には、美物として「海鹿(いるか)」がとりあげられている³⁾。イルカ類は 1 区土坑 291（14 世紀後葉～15 世紀後葉）から肩甲骨が、2 区土坑 39（17 世紀中葉）から椎骨が出土しており、実際に中・近世の京都にイルカ類が持ち込まれていたことをものがたる。1 区土坑 291 の肩甲骨には、関節部付近に切傷や切断痕が見られることから、イルカ類が解体され、食用になったことを指摘できる。京都において前肢（胸鰭）の付け根である肩甲骨が出土したことは、イルカ類の流通形態を考える上で注目される。

b) 獣肉食について

古代から近世まで、何度も動物の殺生や肉食を禁じた法令が出されたことから、日本人は獣肉食を忌避したと考えられてきた。しかし、実際には肉食が行われていたために、殺生、肉食を禁

じる法令が出されたのであり、近年の中・近世遺跡の発掘調査では、実際にイノシシやニホンジカといった大型哺乳類の遺存体が出土することも珍しくない。

1区溝160の下層(17世紀前葉)では、ニホンジカの肩甲骨・上腕骨・橈骨・尺骨・中手骨が交連状態で出土している。このように四肢骨が交連状態で出土した例は、平安京左京六条三坊五町跡⁴⁾の町屋に伴う井戸(16世紀末～17世紀初頭)からニホンジカの前足2本・後足1本、平安京左京三条二坊十町跡⁵⁾の武家屋敷内の池(16世紀末～17世紀前葉)からニホンジカの前足1本・後足1本、イノシシの前足1本がある。他地域の中・近世の遺跡でも、ニホンジカの同一個体の四肢骨がしばしば一括で出土しており、足1本が枝肉として流通していたことがわかる。

16世紀末に成立した『料理物語』には、猪、鹿肉の料理法が記される⁶⁾。『料理物語』の記載に加え、実際に出土したイノシシやニホンジカの四肢骨は、枝肉を食用として屋敷地に搬入したことを示す。京都の近世遺跡におけるイノシシとニホンジカの交連状態の四肢骨は、16世紀末から17世紀前葉の遺構から出土したものばかりである。17世紀後半には「生類憐れみ令」によって狩猟や肉食の禁止が厳しく取り締まれるが、それ以前は狩猟も肉食も頻繁に行われたと思われる。

c) 牛角について

2区土坑58(17世紀前葉～中葉)から出土している牛角は、頭蓋骨から遊離した角芯のみであり、先端よりやや下部には、太く浅い溝が刻まれている(図版45-1)。『和漢三才図会』⁷⁾に「角煑軟堅破擴徐踏押窄則再煑擴如板挽櫛煑染黒文琢偽玳瑁」と記されるように、角鞘を切り開き偽鼈甲の原料として牛角が利用されたと考えられる⁸⁾。

京都市内の遺跡における牛角の出土例は平安京左京三条二坊十町跡⁹⁾では17世紀前半の土坑、18世紀後半から19世紀前半の土坑でそれぞれ1点ずつ出土している。また、平安京左京三条四坊十町跡¹⁰⁾では17世紀中葉の土坑から牛角が3点出土している。これらの牛角には明瞭な加工痕は見られないが、細工に利用されたものと考えられる。当遺跡で出土した牛角は京都市内の遺跡で6例目となり、加工痕が明瞭に見られる資料では初出となる。

平安京左京二条三坊十町跡¹¹⁾・三条四坊十町跡¹²⁾・三条四坊十六町跡¹³⁾・六条三坊五町跡¹⁴⁾などでは、ゴミ穴から加工された牛馬骨が多量に出土している。これらは牛馬骨を骨製品の原料として加工した際に生じた廃材である。しかし、当遺跡では牛角の出土量は少なく、鹿角や牛馬骨など細工の原料になる他の動物遺存体は出土しておらず、専門的な骨角細工工房があったとは考えにくい。当地における角細工は、屋敷地内で小規模に営まれたという程度であろう。

(4) 小結

最近の京都市街地の発掘調査において出土した中・近世の動物遺存体のなかには、多様な海産物が含まれており、京都における水産物利用の実態が明らかになりつつある。当遺跡では中世の遺構から解体痕の残ったイルカ類の肩甲骨が出土しており、中世京都の水産物利用および食生活の一端が明らかになった。近世では海水産の魚貝類の出土が豊富になり、鳥獣類の肉も食用に供されたことは近世の食文化を考える上で意義深い。鳥類では、カモ科は食料として一般的であるが、

タンチョウ属の出土が注目される。溝から出土したニホンジカの四肢骨は、近世初期の京都市中において獣肉食が普及していたことを示す。また、当地において、牛角を利用した小規模な細工が行われたことも指摘できる。当調査地が町屋と武家屋敷との中間に位置しており、どちらに属するゴミ穴であるか特定は困難である。しかし、いずれに属するゴミ穴とその内容物であっても、近世京都の動物利用を考える上で貴重な出土例を追加することができた。

謝辞 タンチョウ属の同定について、江田真毅氏（鳥取大学医学部）にご指導いただいた。

註

- 1) 上村和直・小檜山一良『平安京左京三条四坊十町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-10 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 2) 網 伸也・柏田有香『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-10 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 3) 塙保己一編纂「尺素往来」『群書類従』第九輯 続群書類従完成会 1928年 pp.503-520
- 4) 丸川義広ほか『平安京左京六条三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-8 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2005年
- 5) 丸川義広ほか『平安京左京三条二坊十町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-17 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 6) 吉井始子『翻刻江戸時代料理本集成』第一巻 臨川書店 1978年
- 7) 和漢三才図会刊行委員会編『和漢三才図会』東京美術 1970年
- 8) 松井 章「斃牛馬利用の動物考古学的考察」『動物考古学』第14号 動物考古学研究会 2000年 pp.11-22
- 9) 註5に同じ
- 10) 註1に同じ
- 11) 山本雅和・磯部 勝「平安京左京二条三坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 12) 註1に同じ
- 13) 竜子正彦「平安京左京三条四坊(91HL38)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
- 14) 註4に同じ

表5 動物遺存体一覧表

遺構	時期	大分類	小分類	部位	部分1	左右	備考
1区井戸435	13C後葉～15C前葉	哺乳綱	ウマ	遊離歯	上顎臼歯	-	
1区土坑456	14C後葉～15C後葉	腹足綱	アカニシ?	殻質	殻軸	-	
1区土坑291	14C後葉～15C後葉	哺乳綱	イルカ類	椎骨	腰椎(椎体)	-	椎体横径40.91
2区土坑327下層	14C後葉～15C後葉	哺乳綱	不明	不明	破片	-	
2区第1層掘下げ	15C～17C	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	上顎M3	左	歯冠長32.17,幅19.77
2区第1層掘下げ	15C～17C	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	上顎M2	左	
2区井戸364	15C中葉	哺乳綱	ウマ	遊離歯	上顎M3	左	歯冠高60.52以上,5歳以下
1区土坑289	15C中葉～16C中葉	腹足綱	不明	殻質	殻軸	-	
1区溝454上層	15C中葉～後葉	哺乳綱	不明	不明	破片	-	
1区溝160下層	17C前葉	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	近位部-遠位端	右	GLP37.29SLC21.49
1区溝160下層	17C前葉	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	ほぼ完形	右	GL194.84Bp48.25Bd38.01SD18.62
1区溝160下層	17C前葉	哺乳綱	ニホンジカ	橈骨	ほぼ完形	右	GL198.79Bp36.95Bd33.73
1区溝160下層	17C前葉	哺乳綱	ニホンジカ	尺骨	近位端-骨幹部	右	DPA36.05SDO30.95
1区溝160下層	17C前葉	哺乳綱	ニホンジカ	中手骨	ほぼ完形	右	GL198.30Bp27.34Bd24.78
1区溝160下層Sec.より南	17C前葉	腹足綱	不明	殻質	殻軸・殻体	-	
1区溝160中層Sec.より南	17C前葉	腹足綱	アカニシ	殻質	殻軸	-	
1区土坑96下層	17C前葉	腹足綱	不明	殻質	殻軸	-	
1区溝160下層	17C前葉	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	上顎犬歯	右	
1区溝160下層	17C前葉	哺乳綱	イノシシ/ニホンジカ	肋骨	近位部-遠位部	左	
1区溝160下層Sec.より南	17C前葉	哺乳綱	不明	不明	破片	-	
1区溝160北側断割	17C前葉	腹足綱	アカニシ	殻質	殻軸・殻体	-	殻体に穿孔
1区溝160北側断割	17C前葉	腹足綱	アカニシ	殻質	殻軸・殻体	-	
1区溝160北側断割	17C前葉	腹足綱	アカニシ	殻質	殻軸・殻体	-	
1区溝160北側断割	17C前葉	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	近位部-遠位端	右	GLP36.97+SLC20.17
1区溝160北側断割	17C前葉	哺乳綱	イノシシ	大腿骨	近位部-遠位部	右	
1区溝160上層	17C前葉	腹足綱	アカニシ	殻質	殻体	-	殻長110.04,殻体に穿孔
1区溝160中央Sec.整形中	17C前葉	腹足綱	アカニシ	殻質	殻体	-	
1区溝160中央Sec.整形中	17C前葉	腹足綱	アカニシ	殻質	殻体	-	
1区溝160中央Sec.整形中	17C前葉	腹足綱	アカニシ	殻質	殻軸	-	
1区溝160中層	17C前葉	腹足綱/斧足綱	不明	殻質	殻体	-	
1区溝160中層Sec.より北	17C前葉	硬骨魚綱	不明	不明	不明	-	
1区溝160中層Sec.より北	17C前葉	硬骨魚綱	タイ科	椎骨	腹椎	-	
1区溝160中層Sec.より北	17C前葉	硬骨魚綱	タイ科	椎骨	尾椎	-	
1区溝160中層Sec.より北	17C前葉	硬骨魚綱	タイ科	椎骨	尾椎	-	
1区溝160中層Sec.より北	17C前葉	硬骨魚綱	マダイ	前上顎骨		右	顎骨長38.70
1区溝160中層Sec.より北	17C前葉	硬骨魚綱	ブリ属	椎骨	尾椎	-	
1区溝160中層Sec.より北	17C前葉	鳥綱	不明	足根中足骨	骨幹部	-	
1区溝160中層Sec.より北	17C前葉	腹足綱	アカニシ	殻質	殻軸・殻体	-	
1区溝160中層Sec.より北	17C前葉	腹足綱	アカニシ	殻質	殻軸・殻体	-	
1区溝160中層Sec.より南	17C前葉	斧足綱	ハマグリ?	殻質	殻体	-	
1区溝160中層Sec.より南	17C前葉	腹足綱	アカニシ	殻質	殻体	-	
1区溝160中層Sec.より南	17C前葉	腹足綱	アカニシ	殻質	殻体	-	
1区溝160中層Sec.より南	17C前葉	腹足綱	アカニシ	殻質	殻体	-	
1区溝160南側断	17C前葉	腹足綱	アカニシ	殻質	殻体	-	
1区土坑119	17C前葉～18C前葉	哺乳綱	不明	不明	破片	-	
2区土坑75	17C前葉～18C前葉	不明	不明	不明	破片	-	白色
2区土坑128	17C前葉～18C前葉	硬骨魚綱	マダイ	前頭骨		-	
2区土坑128	17C前葉～18C前葉	硬骨魚綱	コチ科	神経頭蓋		-	
2区土坑128	17C前葉～18C前葉	硬骨魚綱	コチ科	主鰓蓋骨		右	
2区土坑128	17C前葉～18C前葉	硬骨魚綱	タイ科	椎骨	尾椎	-	
2区土坑128	17C前葉～18C前葉	硬骨魚綱	不明	鰭棘?	担鰭骨?	-	
2区土坑128	17C前葉～18C前葉	硬骨魚綱	不明	不明	不明	-	
2区土坑128	17C前葉～18C前葉	硬骨魚綱?	不明	不明	不明	-	切断痕
2区土坑128	17C前葉～18C前葉	鳥綱	カモ科	上腕骨	ほぼ完形	左	GL83.71Bp17.94Bd12.35
2区土坑128	17C前葉～18C前葉	鳥綱	カモ科	上腕骨	ほぼ完形	右	Bp19.44
2区土坑128	17C前葉～18C前葉	鳥綱	カモ科	尺骨	ほぼ完形	左	GL73.11Bp8.60Dtp10.84Did8.50
2区土坑128	17C前葉～18C前葉	鳥綱	カモ科	手根中手骨	ほぼ完形	左	GL45.80Bp10.51Did5.68
2区土坑128	17C前葉～18C前葉	鳥綱	カモ科	橈骨	骨幹部-遠位端	左	Bd5.46
2区土坑128	17C前葉～18C前葉	鳥綱	カモ科	橈骨	ほぼ完形	右	GL68.64SC2.51Bd5.43
2区土坑128	17C前葉～18C前葉	鳥綱	カモ科	肩甲骨	ほぼ完形	右	Dic11.22
2区土坑128	17C前葉～18C前葉	鳥綱	カモ科	脛足根骨	ほぼ完形	左	GL77.08+Dip12.83Bd8.66Dd8.46
2区土坑128	17C前葉～18C前葉	鳥綱	不明	肋骨	近位	-	
2区土坑128	17C前葉～18C前葉	鳥綱	カモ科	頭蓋骨		-	GB27.49+
2区土坑50	17C前葉～18C前葉	腹足綱	アワビ類	殻質	殻体	-	
1区土坑94	17C前葉～中葉	腹足綱	アカニシ	殻質	殻軸	-	
1区土坑19	17C前葉～中葉	腹足綱	サザエ	蓋		-	
2区土坑163	17C前葉～中葉	腹足綱	オオニシ?	殻質	殻体	-	殻長124以上
2区土坑186	17C前葉～中葉	硬骨魚綱	不明	椎骨	尾椎	-	白色
2区土坑123	17C前葉～中葉	腹足綱	アカニシ	殻質	殻体	-	
2区井戸30・31	17C前葉～中葉	斧足綱	ハマグリ	殻質	殻体	左	殻高49.37殻長58.62
2区井戸30・31	17C前葉～中葉	斧足綱	ハマグリ	殻質	殻体	左	殻高57.43殻長46.61
2区土坑141	17C前葉～中葉	哺乳綱	ニホンジカ	椎骨	頸椎	-	椎体板未癒合
2区土坑141	17C前葉～中葉	哺乳綱	ウマ	遊離歯	上顎P3	左	歯冠高29.42,長23.15,幅24.77
2区土坑285	17C前葉～中葉	鳥綱	ニワトリ?	大腿骨	骨幹部	右	
2区井戸30	17C前葉～中葉	斧足綱	ハマグリ	殻質	殻体	左	
2区井戸30	17C前葉～中葉	斧足綱	ハマグリ	殻質	殻体	左	
2区井戸30	17C前葉～中葉	斧足綱	ハマグリ	殻質	殻体	右	

遺構	時期	大分類	小分類	部位	部分1	左右	備考
2区土坑118	17C後葉～19C前葉	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	右	
2区土坑118	17C後葉～19C前葉	斧足綱	イタボガキ科	殻質	殻体	-	殻頂欠損
2区土坑118	17C後葉～19C前葉	硬骨魚綱	マダイ	前頭骨	左半分	-	兜割(二分割)
2区土坑118	17C後葉～19C前葉	腹足綱	アカニシ?	殻質	殻軸	-	
2区土坑118	17C後葉～19C前葉	腹足綱	サザエ	殻質	殻軸・殻体	-	殻長82.32
2区土坑118	17C後葉～19C前葉	腹足綱	アワビ類	殻質	殻体	-	
2区土坑118	17C後葉～19C前葉	腹足綱	アワビ類	殻質	殻体	-	
2区土坑118	17C後葉～19C前葉	腹足綱	アワビ類	殻質	殻体	右	
2区土坑128	17C後葉～19C前葉	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	-	
2区土坑128	17C後葉～19C前葉	斧足綱	サザエ?	殻質	殻軸	-	
2区土坑20	17C後葉～19C前葉	斧足綱	アカガイ	殻質	殻体	-	
2区土坑20	17C後葉～19C前葉	硬骨魚綱	マダイ	主上顎骨		左	
2区土坑20	17C後葉～19C前葉	硬骨魚綱	不明	鰓条骨		左	
2区土坑20	17C後葉～19C前葉	腹足綱	サザエ?	殻質	殻軸	-	
2区土坑20	17C後葉～19C前葉	腹足綱	サザエ?	殻質	殻軸	-	
2区土坑61	18C前葉～18C中葉	斧足綱	ハマグリ	殻質	殻体	右	
2区土坑61	18C前葉～18C中葉	斧足綱	フネガイ科	殻質	殻体	-	アカガイ?
1区土坑30	18C中葉～19C前葉	硬骨魚綱	ハモ属	前頭骨		-	右側切断痕
2区土蔵1	18C中葉～19C前葉	斧足綱	ハマグリ	殻質	殻体	右?	
2区土坑11	18C中葉～19C前葉	斧足綱	ハマグリ	殻質	殻体	左	殻高47.26殻長57.73
2区土坑18	18C中葉～19C前葉	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	左	殻高27.56殻長26.03
2区土坑18	18C中葉～19C前葉	腹足綱	アワビ類	殻質	殻体	-	
1区土坑55	18C中葉～後葉	腹足綱	バイ	殻質	殻軸・殻体	-	
1区井戸222	18C中葉～後葉	斧足綱	ハマグリ	殻質	殻体	右	殻高41.07殻長49.78
1区井戸222	18C中葉～後葉	腹足綱	不明	殻質	殻体	-	サザエ、アワビなどか?
1区井戸222壁清掃中	18C中葉～後葉	斧足綱	ハマグリ	殻質	殻体	右	
1区井戸222壁清掃中	18C中葉～後葉	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	右	
1区土坑55	18C中葉～後葉	斧足綱	ハマグリ	殻質	殻体	左	
1区土坑55	18C中葉～後葉	硬骨魚綱	不明	鰓条骨		-	
2区土坑137	18C中葉～後葉	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	左	殻高16.65殻長16.54
2区土坑137	18C中葉～後葉	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	左	殻高19.51殻長18.36
2区土坑137	18C中葉～後葉	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	左	殻高17.05殻長17.67
2区土坑137	18C中葉～後葉	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	左	殻高20.55+殻長21.23
2区土坑137	18C中葉～後葉	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	左	
2区土坑137	18C中葉～後葉	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	左	
2区土坑137	18C中葉～後葉	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	左	
2区土坑137	18C中葉～後葉	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	右	殻高19.95殻長19.18
2区土坑137	18C中葉～後葉	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	右	殻高19.21殻長20.30
2区土坑137	18C中葉～後葉	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	右	
2区土坑137	18C中葉～後葉	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	-	
2区土坑137	18C中葉～後葉	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	-	
2区土坑137	18C中葉～後葉	斧足綱	ハマグリ	殻質	殻体	右	
2区土坑137	18C中葉～後葉	斧足綱	ハマグリ	殻質	殻体	-	殻頂欠損
2区土坑137	18C中葉～後葉	鳥綱	ツル属	趾骨	基節骨(Ⅲ)	右	GL43.68,近位端、遠位端切断
2区土坑137	18C中葉～後葉	鳥綱	ツル属?	中趾骨		左	GL24.15
1区土坑4	18C中葉以降	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	左	
1区土坑4	18C中葉以降	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	左	
1区土坑4	18C中葉以降	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	左	
1区土坑4	18C中葉以降	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	左	
1区土坑4	18C中葉以降	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	左	
1区土坑4	18C中葉以降	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	右	
1区土坑4	18C中葉以降	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	右	
1区土坑4	18C中葉以降	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	右	
1区土坑4	18C中葉以降	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	-	
1区土坑4	18C中葉以降	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	-	
1区土坑4	18C中葉以降	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	-	
1区土坑4	18C中葉以降	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	-	
1区土坑4	18C中葉以降	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	-	殻頂欠損
1区土坑4	18C中葉以降	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	-	殻頂欠損
2区井戸14	18C中葉以降	斧足綱	ハマグリ	殻質	殻体	左	
2区井戸14	18C中葉以降	斧足綱	フネガイ科	殻質	殻体	-	アカガイ?、殻頂欠損
2区井戸14	18C中葉以降	腹足綱	サザエ	殻質	殻軸・殻体	-	
2区井戸14	18C中葉以降	腹足綱	アワビ類	殻質	殻体	-	
2区井戸9	18C中葉以降	斧足綱	ハマグリ	殻質	殻体	左	
2区井戸9	18C中葉以降	斧足綱	ハマグリ	殻質	殻体	右	
2区井戸9	18C中葉以降	斧足綱	ハマグリ	殻質	殻体	右	
2区土坑6	18C中葉以降	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	左	灰褐色
2区土坑6	18C中葉以降	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	右	灰褐色,殻高21.23殻長19.28
2区土坑6	18C中葉以降	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	右	
2区土坑6	18C中葉以降	斧足綱	シジミ類	殻質	殻体	-	
2区井戸12完掘	19C前葉～中葉	硬骨魚綱	マダイ	上後頭骨等		左	

(計測値の単位はmm)

付章2 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

今回の分析調査では、1) 調査区で検出されている中世・近世の遺構のベースをなす堆積物の形成年代推定、2) 近世の遺構覆土中の植物遺体同定を実施した。以下に課題別に調査結果を報告する。

(1) 1区の中・近世の遺構のベースをなす堆積物の形成年代の検討

1) 調査目的

遺跡における人間活動を把握する上で、遺跡が位置する地域の地形発達過程を把握することは重要な課題である。平安京域では、このような視点の研究として、河角(2004)による歴史時代における洪水発生回数の変動と地形変化との関係に関する研究成果が存在する。この研究でも指摘されているが、各遺跡における地層の層相記載および年代測定の蓄積によって、より細かな時間・空間スケールでの上記の検討が可能となる。そこで、今回の分析調査では、このような視点から、調査区の中世の遺構をなす堆積物の形成年代に関する情報を得ることを目的として、遺構のベースをなす堆積物から出土した炭化材について放射性炭素年代測定および樹種同定を実施する。

2) 調査地点・試料

1区の中世および近世の遺構のベースをなす堆積物の累重状況を図50に示す。この遺構のベースをなす堆積物は、最上部は中世の遺構構築のために掘削されており、その外形は不明であるが、その下位層準は砂礫を主体とする上下方向に凸な形をなす流路充填堆積物と、その氾濫堆積物で

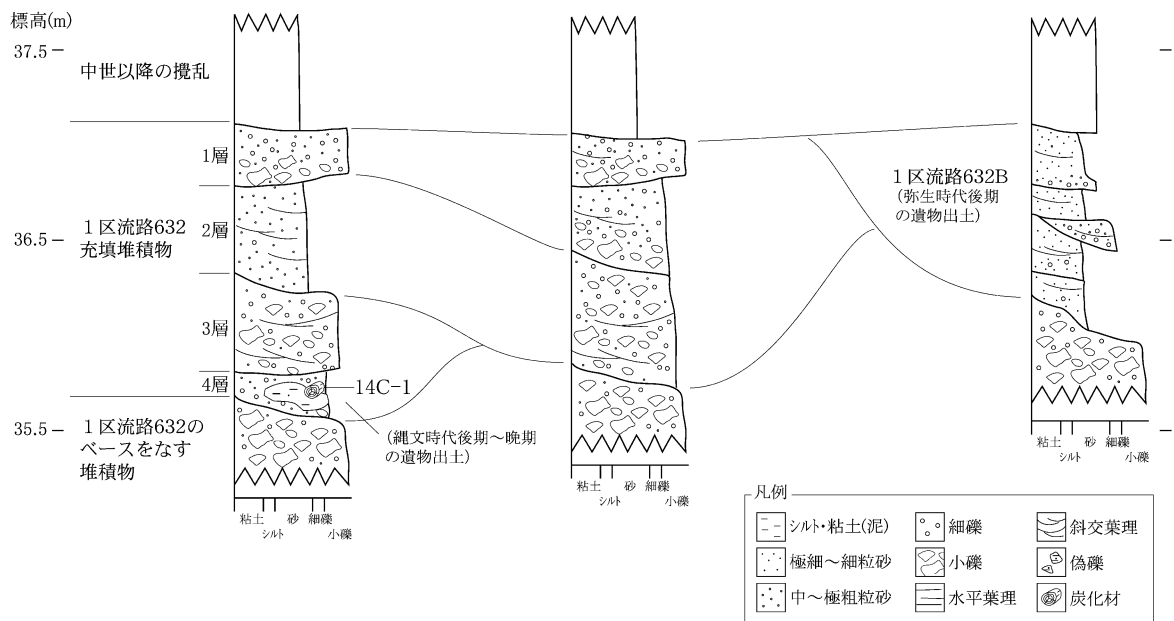


図50 1区の遺構のベースをなす堆積物の累重状況

ある側方級化する砂層の累重からなる。このような層相から、遺構のベースをなす堆積物は、扇状地などで確認される、網状流路の堆積システムで形成されたものと推定される。

放射性炭素年代測定および樹種同定は、1区井戸580底部壁面堆積物、1区流路632充填堆積物から出土した、遺構のベースをなす堆積物から出土した炭化材について実施する。

3) 方法

1 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定はAMS法による。試料に土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。物理的処理を終了した後、HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。得られた測定値は、 $\delta^{13}\text{C}$ の値を元に同位体効果の補正を行う。さらに、補正值をRADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用いて暦年較正を実施する。その際、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表す。2点とも炭化材であることから、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、相対比は、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示した

表6 放射性炭素年代測定結果

遺構	層位	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
1区井戸580	底部壁面堆積物	炭化材	910±30BP	-26.11±0.75‰	930±30BP	IAAA-81887
1区流路632	4層(14C-1)	炭化材	2990±30BP	-24.19±0.63‰	2970±30BP	IAAA-81888

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表7 暦年較正結果

遺構名	層位	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				相対比
			σ	2σ			
1区 井戸 580	底部 壁面 堆積物	910±31	σ	cal AD 1,044 - cal AD 1,099	cal BP 906 - 851	0.576	
				cal AD 1,119 - cal AD 1,142	cal BP 831 - 808	0.241	
				cal AD 1,147 - cal AD 1,164	cal BP 803 - 786	0.182	
			2σ	cal AD 1,034 - cal AD 1,190	cal BP 916 - 760	0.968	
				cal AD 1,197 - cal AD 1,207	cal BP 753 - 743	0.032	
1区 流路 632	4層 (14C-1)	2,985±33	σ	cal BC 1,291 - cal BC 1,279	cal BP 3,241 - 3,229	0.082	
				cal BC 1,271 - cal BC 1,191	cal BP 3,221 - 3,141	0.709	
				cal BC 1,177 - cal BC 1,160	cal BP 3,127 - 3,110	0.117	
			2σ	cal BC 1,144 - cal BC 1,131	cal BP 3,094 - 3,081	0.091	
				cal BC 1,374 - cal BC 1,340	cal BP 3,324 - 3,290	0.045	
				cal BC 1,319 - cal BC 1,117	cal BP 3,269 - 3,067	0.955	

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用した。
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

ものである。

2 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

4) 結果

1 放射性炭素年代測定結果

放射性炭素年代測定結果を表6、暦年較正結果を表7に示す。同位体効果の補正を行った年代測定値は、1区井戸580底部壁面の炭化材が $910 \pm 30\text{BP}$ 、1区流路632の炭化材が $2,990 \pm 30\text{BP}$ を示した。

2 樹種同定結果

樹種同定結果は、1区井戸580底部壁面に認められた年代測定を実施した炭化材は遺存状態が悪く樹種を特定できなかった。同時に出土している炭化材はスギに同定された。また1区流路632の炭化材1点はクリに同定された。これらの解剖学的特徴を以下に示す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

5) 遺構のベースをなす堆積物の形成年代

今回の調査区は、河角(2004)の地形分類によると、完新世段丘面IVに区分される、鴨川流域の扇状地帯に位置する。先述したように今回の調査区の遺構のベースをなす堆積物は、扇状地形成に関わる、網状流路の堆積システム下で形成された堆積物と判断される。1区流路632充填堆積物第4層から出土した炭化材は、補正年代値で $2,990 \pm 30\text{YBP}$ 、暦年較正年代(2 σ)でcalBC1,319-1,117年(相対比0.955)を示した。この年代値は、谷口(2001)や西本編(2006)による縄文時代および弥生時代の年代測定成果に基づくと、縄文時代晩期前半の年代に対応する。1区流路632充填堆積物からは、縄文時代後期の宮滝式土器および縄文時代晩期前半の滋賀里Ⅱ～Ⅲa式土器が出土している。これらの出土遺物の時代と放射性炭素年代測定値は同調的である。したがって、1区流路632は、縄文時代晩期以降に形成されたことになり、縄文時代晩期頃の調査区一帯は扇状地の発達が進行する、不安定な堆積領域であったことが推定される。

1区流路632充填堆積物第4層から出土した炭化材は、冷温帯下部から暖温帯にかけて広く生育する、高木となる落葉広葉樹のクリに同定された。クリは二次林要素でもあり、調査区の地形を踏まえると、本遺跡周辺に生育していた可能性が充分考えられる樹種である。炭化していたことから人間により利用されていたものに由来する可能性もある。なお、北白川追分町遺跡では、縄文時代中期および晩期の埋没林が検出されており、自然木の樹種同定や花粉分析から、常緑広葉樹のアカガシ亜属を中心に、針葉樹のイヌガヤ、カヤ、落葉広葉樹のクリ、ヤマザクラ、ムクロジ、ムクノキ、ヤマグワ、カエデ属、トチノキ、エゴノキ属等からなる植生が推定されている(島

地ほか,1987;五十川,1991)。

一方、1区井戸580底部壁面から出土した炭化材は、補正年代で910±30BP (ca1AD1,044-1,164)を示した。この年代値は、上述の1区流路632充填堆積物の年代とは大きくかけ離れており、炭化材は遺構掘削時などに取り込まれたものに由来する可能性が高い。年代測定を実施した炭化材は、組織が観察できず種類不明であったが、同じく井戸底部から出土した他の炭化材は針葉樹のスギに同定された。スギは木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。平安京では、左京七条一坊十一町や左京七条一坊十三町で検出された古代の井戸部材にスギ、ヒノキ、ネズコが確認されており(岡田,1986;大山,2003)、今回のスギも井戸部材に関わる可能性もある。

(2) 2区第1面出土の植物遺体

1) 調査目的

2区第1面の近世の町屋跡では、炭化植物遺体を含む土坑などの遺構が多数確認されている。ここでは、近世の植物資源の利用状況を把握することを目的として、遺構埋土について微細物分析・

灰の灰像分析を実施し、抽出された炭化材の樹種同定を実施する。2) 試料

分析試料の一覧を表8に示す。

1 微細物分析

試料は、2区土坑65埋土下部より採取された土壌1点である。

2 灰像分析

試料は、2区土坑75・土坑77・土坑186の灰試料各1点、2区土坑65埋土下部の土壌に認められた灰、2区穴蔵1の赤変部に混ざる植物の灰様物(イネ科?)と炭層の炭化した植物繊維で、合計6点である。

3 樹種同定

試料は、2区土坑75・土坑77・土坑186・穴蔵1炭層の一括採取された炭化物の中から無作為に選択した各5点、合計20

点である。また、微細物分析を実施する2区土坑65埋土下部から出土した炭化物が肉眼で認められることから、微細物分析で洗い出された炭化物中に同定可能な炭化材がある場合、5点程度を抽出して分析を実施する。

表8 分析試料一覧

遺構名	試料名	炭化材 樹種同定	微細物 分析	灰像分析
2区土坑65	埋土下部	5	1	1
2区土坑75	灰			1
	炭化材	5		
2区土坑77	灰			1
	炭化材	5		
2区土坑186	灰			1
	炭化材	5		
2区穴蔵1	土壌			1
	炭層	5		1
合計		25	1	6

3) 方法

1 微細物分析

土壌 200 ccを水に浸し、粒径 0.5 mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実の他、炭化材（主に径 4 mm以上）、動物遺存体、土器などの遺物を抽出する。抽出した種実を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等の図鑑との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。炭化材、動物遺存体、土器などは、70℃ 48 時間乾燥後の重量（g）と最大角(mm)を表示する。分析後は、種類別に容器に入れて保管する。種実には 70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

2 灰像分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となる。しかし、植物が燃えた後の灰などは、組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社,1993）。そのため、堆積物から珪化組織片が産出した場合、植物体の存在や利用が推定される。

2区土坑 75・土坑 77・土坑 186 では、試料観察する上で障害となる有機物が少なく、そのまま検鏡試料としたが、2区穴蔵 1 試料は灰像の観察に障害となる有機物が含まれていたため、前処理として過酸化水素水で漂白、灰化した上で検鏡試料とした。各試料は一部をスライドガラスに取り、400 倍の光学顕微鏡下で観察した。その際、出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、これらを含む珪化組織片を近藤（2004）の分類に基づいて同定した。結果は、産出した分類群とその個数の一覧表として示す。

3 炭化材の樹種同定

炭化材の同定は、上述した方法と同様の方法で実施した。4) 結果

1 微細物分析

結果を表 9 に示す。種実は、イネの穎・胚乳 1 個、穎 14 個が検出され、全て炭化している。種実以外では、最大径 1 cmの炭化材 0.259 g、不明炭化物（木材組織が確認されない、種類・部位共に不明の炭化物）3 個、加工品の可能性がある焼骨 1 個（0.006 g）、焼けた魚類の鱗棘 1 個（0.015 g）、魚類と思われる焼骨 0.074 g、径 1.6 cmの土器 1 個（0.35 g）が検出された。その他に、残渣に含めた炭化植物片（径 2 mm以下）には、イネの炭化・灰化した穎の微細片が多く含まれる。以下に、種実の形態的特徴等を記す。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

穎（果）と胚乳が検出された。炭化しており黒色、灰化個体はやや透明な灰白色。やや扁平な長楕円体。穎は、長さ 6-7.5 mm、幅 3- 4 mm、厚さ 2 mm程度。破片は大きさ 1- 3 mm程度。基部に

表9 微細物分析結果

種類	部位	状態	試料名 2区土坑65試料4	備考
種実 イネ	穎・胚乳 穎	完形 炭化 破片 炭化 基部	1 14	基部5個
不明炭化物 炭化材		炭化 炭化	3 0.259g	最大径1cm
動物遺存体 加工品?	骨	破片 被熱	1個(0.006g)	長さ6mm,径1.5mm
魚類	鱗棘	破片 被熱	1個(0.015g)	長さ7mm,径3mm
魚類?	骨	破片 被熱	0.074g	最大径9mm
土器			1個(0.35g)	径1.6cm
分析残渣 植物片			0.561g	イネ穎微細片含む
炭化植物片			1.605g	
砂礫・土粒			4.312g	

斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや扁平な長楕円形の稲糊を構成する。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。穎（果）に包まれる胚乳は、長さ5mm、幅3mm、厚さ1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縦列する。

2 灰像分析

結果を表10に示す。以下に、各遺構での産状を述べる。

・2区土坑65

イネ属の葉部に由来する珪化組織片が多産する。特に、短細胞列の産出が目立つ。

・2区土坑75

イネ属の葉部に由来する珪化組織片が多産する。特に、短細胞列の産出が目立つ。

・2区土坑77

イネ属に由来する珪化組織片が多産する。特に、短細胞列の産出が目立つ。また糊殻に形成さ

表10 灰像分析結果

分類群	遺構・試料名					
	2区土坑65 4	2区土坑75	2区土坑77	2区土坑186	2区穴蔵1	2区穴蔵1 炭層
イネ属穎珪酸体	-	-	++	++	-	-
イネ属短細胞列	+++	+++	+++	+++	++	-
イネ属機動細胞列	+	+	+	-	-	-
ススキ属短細胞列	-	-	+	-	-	-
不明組織片	-	-	-	-	-	+
想定される種類	稲藁	稲藁	稲藁 稲糊	稲藁 稲糊	稲藁	不明
			ススキ属			

+++：非常に多い，++：多い，+：検出，-：非検出

れる穎珪酸体も多い。この他に、ススキ属の葉部に形成される短細胞列も見られる。

・ 2区土坑 186

イネ属に由来する珪化組織片が多産する。特に、短細胞列の産出が目立つ。また穎珪酸体も多い。

・ 2区穴蔵 1

赤変部混ざる植物の灰様物（イネ科？）では、多くのイネ属短細胞列が認められる。一方、炭層の炭化した植物繊維では珪化組織片が見られず、繊維状の炭化物が認められるに過ぎない。

3 樹種同定

樹種同定結果を表 11 に示す。炭化材は、針葉樹 2 分類群（マツ属複維管束亜属・ヒノキ科）、広葉樹 10 分類群（カバノキ属・クマシデ属イヌシデ節・ブナ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・シラキ・クマノミズキ類・アセビ・ガマズミ属）とイネ科に同定された。なお、2区土坑 65 埋土下部から抽出した炭化材のうち、2点は道管が認められることから広葉樹であるが、保存が悪く組織配列が観察できないため樹種の同定に至らない。また、1点は樹皮のみであり、木部が残存していないため樹種不明である。同定された各試料の解剖学的特徴等を記す。

・ マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*） マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急〜やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状で、1分野に1個である。放射仮

表 11 樹種同定結果

遺構名	層位	点数	樹種	備考
2区 土坑65	埋土下部	5	クマシデ属イヌシデ節	
			クマノミズキ類	
			広葉樹	
			広葉樹	
			樹皮	
2区 土坑75	埋土	5	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			クリ	
			アセビ	直径1.5cmの小枝状
			アセビ	
			アセビ	
2区 土坑77	埋土	5	マツ属複維管束亜属	
			カバノキ属	
			ブナ属	
			コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
			クリ	
2区 土坑186	埋土	5	ヒノキ科	板目板状
			クマシデ属イヌシデ節	
			シラキ	
			シラキ	
			イネ科	
2区 穴蔵 1	炭層	5	クマシデ属イヌシデ節	
			クマシデ属イヌシデ節	
			クマシデ属イヌシデ節	
			クリ	
			ガマズミ属	

道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

- ・ヒノキ科 (*Cupressaceae*)

試料は年輪界で割れている。軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1～10細胞高。

- ・カバノキ属 (*Betula*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～30細胞高。

- ・クマシデ属イヌシデ節 (*Carpinus* subgen. *Euarpinus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～4個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～40細胞高のもの集合放射組織とがある。

- ・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織までである。

- ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のもの集合放射組織とがある。

- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のもの集合放射組織とがある。

- ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

- ・シラキ (*Sapium japonicum* (Sieb. et Zucc.) Pax et Hoffm) トウダイグサ科シラキ属

散孔材で、道管は単独または2～5個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列(希に2列)、1～40細胞高。

- ・クマノミズキ類 (*Cornus*) ミズキ科ミズキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で散在し、分布密度は高くない。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～30細胞高。

以上の特徴からミズキ属の中でもクマノミズキやヤマボウシと考えられる。

・アセビ (*Pieris japonica* (Thunb.) D.Don.) ツツジ科アセビ属

散孔材で、年輪始めに横方向に道管が揃うが、その後は単独また2～3個が接線方向に複合しながら散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～3列、1～15細胞高。

・ガマズミ属 (*Viburnum*) スイカズラ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では円形～やや角張った楕円形、ほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は異性、1～4細胞幅、1～40細胞高。

・イネ科 (Gramineae)

試料は薄く脆い。横断面では、2対4個の道管の外側に師部細胞があり、これらを厚壁の繊維細胞(維管束鞘)が囲んで維管束を形成する。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

5) 考察

1 土坑

2区土坑65埋土下部からは、水洗選別の結果、炭化種実、不明炭化物、炭化材、魚骨(鱗棘)、魚類の可能性のある焼骨、加工痕のある焼骨、土器片等が産出した。炭化種実は、栽培種のイネの穎・胚乳、イネの穎、炭化・灰化した多数のイネの穎の微細片に同定された。炭化材はイヌシデ節とクマノミズキ類、樹種不明の広葉樹、樹皮に同定された。一方、本埋土の灰像分析結果では、イネ属の葉部に由来する珪化組織片が多産した。このように2区土坑65から産出した植物遺体は、いずれも炭化していた。また、炭化材以外の植物遺体は全て栽培植物のイネに由来するものからなり、産出部位からみて、胚乳が付いた状態のイネの植物体が燃焼している可能性が高い。

2区土坑75・土坑77・土坑186埋土は廃棄された炭化材を含む灰からなる。この灰試料は、灰像分析の結果、いずれの遺構もイネ属の葉部に由来した珪化組織片が多産し、2区土坑77と2区土坑186ではイネ属の穎、2区土坑77ではススキ属の葉部に由来する組織片が認められた。一方、灰と共に出土した炭化材は、遺構によって樹種構成が異なっていた。2区土坑75では、アセビを中心にコナラ節やクリが混じる。アセビの中には、直径約1.5cmの小枝状の炭化材が含まれている。2区土坑77では、5点の炭化材に5分類群が認められ、針葉樹のマツ属複維管束亜属、広葉樹のカバノキ属、ブナ属、クヌギ節、クリが認められた。2区土坑186は、針葉樹のヒノキ科、広葉樹のイヌシデ節、シラキ、草本のイネ科の稈が認められた。このうち、針葉樹のヒノキ科の炭化材は、薄い板目板状を呈しているが、明瞭な加工痕は見られないこと、自然状態でも板目状に割れることがあるので加工木と特定するには至らない。広葉樹材は、いずれも重硬で強度の高い材質を有している点で共通するものの、遺構によって種類構成が異なり、針葉樹材も混じるなど、各土坑における木材利用には統一性が見られない。産出した樹種のうち、ブナ属・カバノキ属以外の樹種は、遺跡周辺や背後の山地に生育していた可能性が充分考えられる樹種であり、周囲か

ら入手したものを利用している可能性が高い。ただし、ブナ属やカバノキ属は、京都盆地周辺の山地では一般的な樹種ではなく、木製品にも利用される有用材であることを考慮すると、炭化した木製品が混在している可能性もある。

以上、近世の土坑埋土から産出した炭化材以外の植物遺体は、2区土坑77でススキ属が確認されたものの、それ以外は全て栽培植物のイネの各部位に由来するものであった。これら土坑埋土が燃料残滓に由来するものだとすれば、燃料材として稲藁が多用されていたことになる。また、炭化材は、上記したように土坑間で樹種構成が異なるものの、同定された樹種の多くが二次林や河畔林の構成要素からなることから、調査区周辺で入手可能な木材を燃料材として利用していることになる。この点については発掘調査成果を踏まえて評価が必要であろう。また、平安京域における近世の植生情報との比較検討も今後の課題とされる。

2 穴蔵

2区穴蔵1は、石壁を伴う焼成遺構である。この2区穴蔵1の床面に混ざる植物の灰様物からは、多数のイネ属由来の組織片（短細胞列）が産出した。炭層試料中の炭化した植物繊維は珪化組織片が認められなかったため種類を特定できなかった。一方、出土炭化材では、イヌシデ節を中心にクリやガマズミ属が認められた。いずれも重硬で強度の高い材質を有する樹木である。硬い広葉樹材を中心とすること、イネ属の葉部に由来する組織片が認められることは、2区土坑75・土坑77・土坑186と共通する特徴である。なお、クリは、生木の状態では硬いが、製炭すると柔らかく燃焼性の良い炭になり、マツ炭と共に鍛冶などの燃料材に利用される（岸本・杉浦,1980）。

引用文献

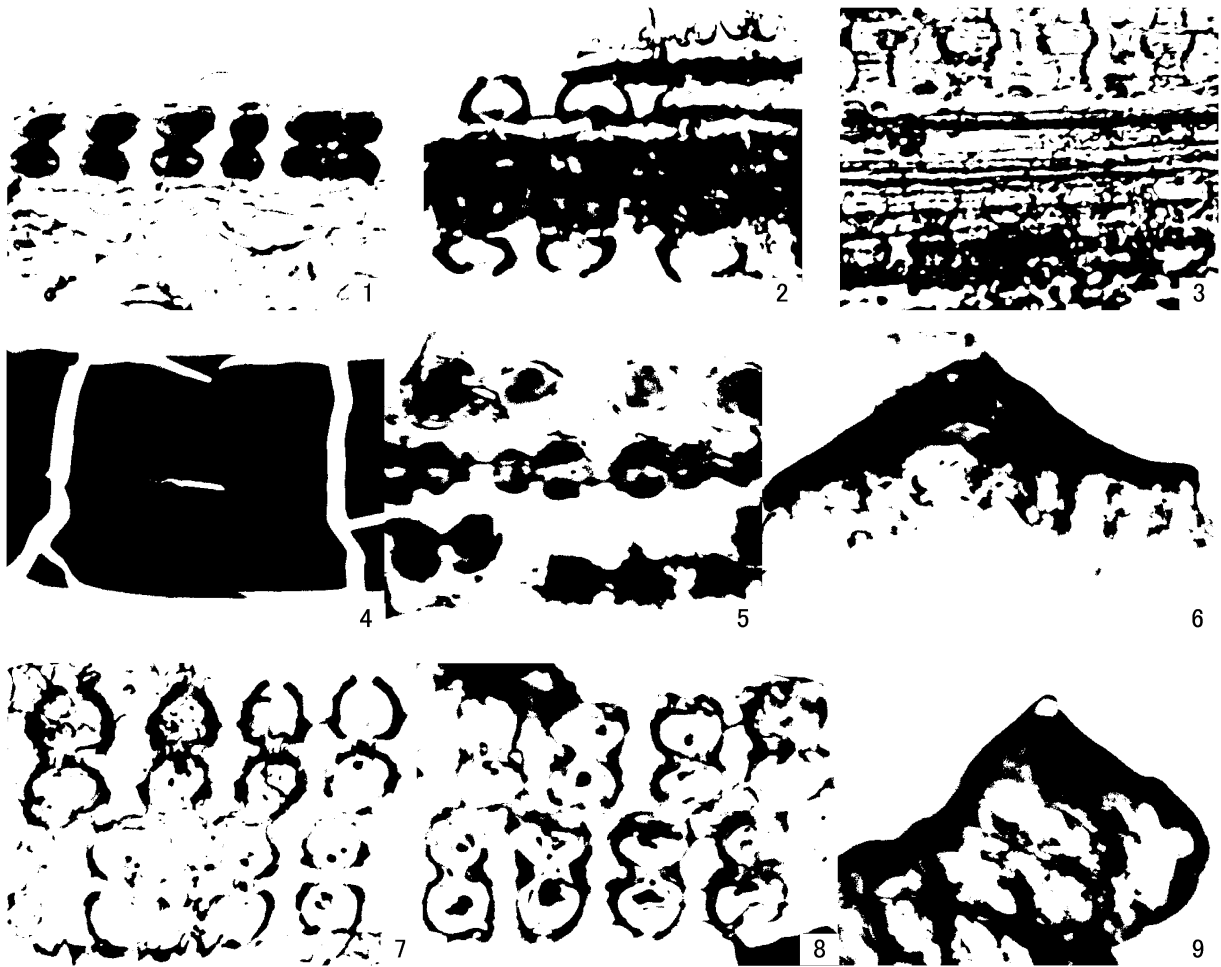
- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 五十川 伸矢,1991,植物相と動物相.「先史時代の北白川」,京都大学文学部博物館,74-75.
- 石川 茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 河角 龍典,2004,歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化—遺跡に記録された災害情報を用いた水害史の再構築—. 京都歴史災害研究, 第1号,13-23.
- 岸本 定吉・杉浦 銀治,1980,日曜炭やき師入門. 総合科学出版,250p.

- 近藤 鍊三,2004,植物ケイ酸体研究.ペドロジスト,48,46-64.
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.
- 西本豊弘 編,2006,新弥生時代のはじまり 第1巻 弥生時代の新年代,雄山閣,143p.
- 岡田 文男,1986,井戸枿部材・木製品の樹種の調査.「左京七条一坊十三町平安京東市外町の調査」,平安学園考古学クラブ,55-60.
- 大山 幹成,2003,井戸枿部材の樹種同定.「左京七条一坊十一町 平安京東市周辺の調査」,平安学園考古学クラブ,44.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,1993,自然科学分析からみた人々の生活(1).慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」,慶應義塾,347-370.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘(日本語版監修),海青社,70p.
[Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- 島地 謙・林 昭三・伊東 隆夫,1987,木材.「京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度」,32-38.
- 谷口 康浩 2001「縄文時代遺跡の年代」『季刊考古学』77(17-21).
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].



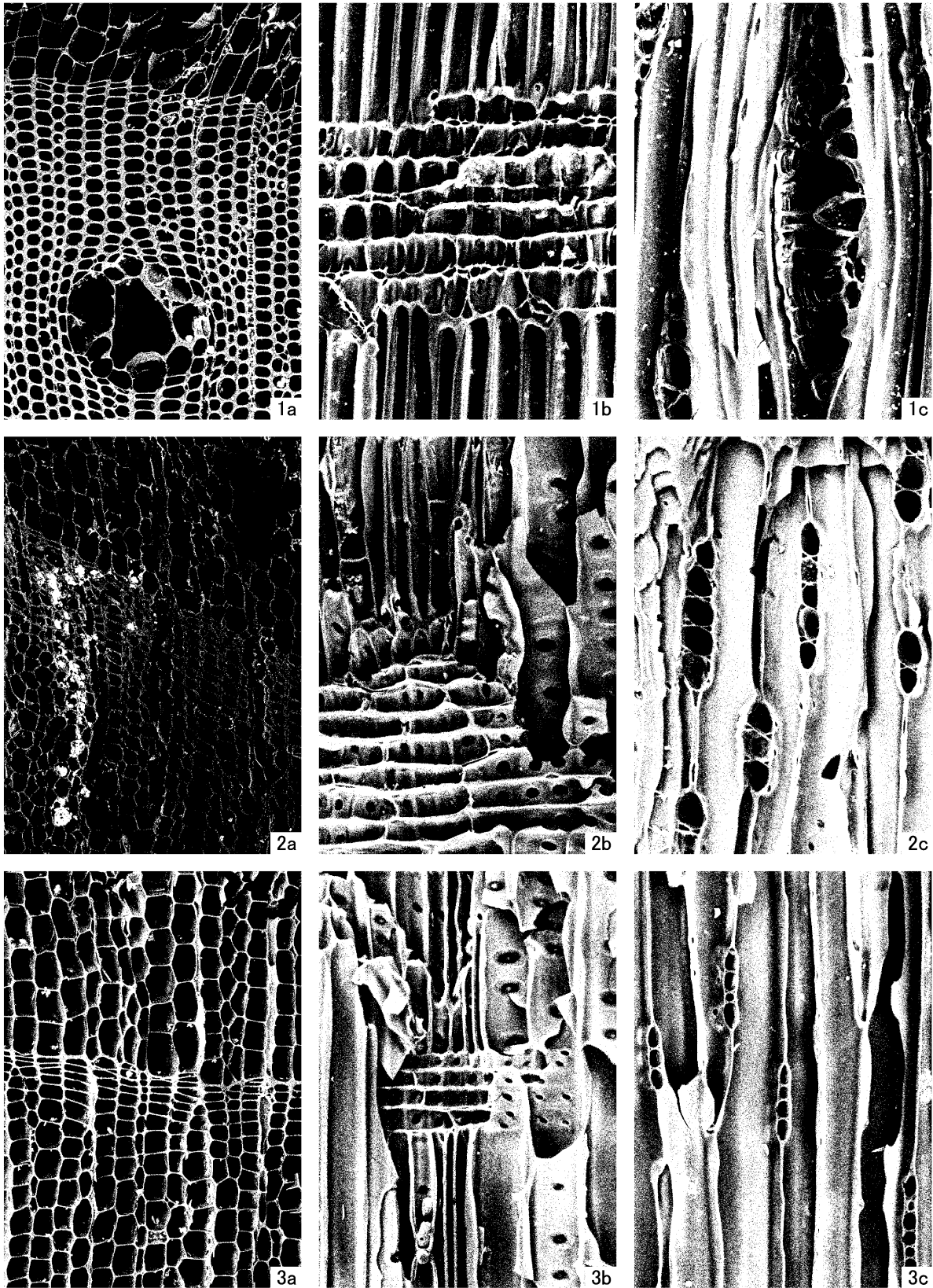
- 1. イネ 穎・胚乳(2区土坑65埋土下部)
- 2. イネ 穎(2区土坑65埋土下部)
- 3. イネ 穎(2区土坑65埋土下部)
- 4. 加工品? 骨(2区土坑65埋土下部)
- 5. 魚類? 骨(2区土坑65埋土下部)
- 6. 魚類 鱗棘(2区土坑65埋土下部)
- 7. 土器(2区土坑65埋土下部)

図 51 微細物 (種実・骨・土器)



1. イネ属短細胞列(2区土坑65埋土下部) 2. イネ属短細胞列(2区土坑75;灰)
 3. イネ属短細胞列(2区穴蔵1) 4. 不明(炭化物)(2区穴蔵1;炭層)
 5. ススキ属短細胞列(2区土坑77;灰) 6. イネ属穎珪酸体(2区土坑77;灰)
 7. イネ属短細胞列(2区土坑77;灰) 8. イネ属短細胞列(2区土坑186;灰)
 9. イネ属穎珪酸体(2区土坑186;灰)

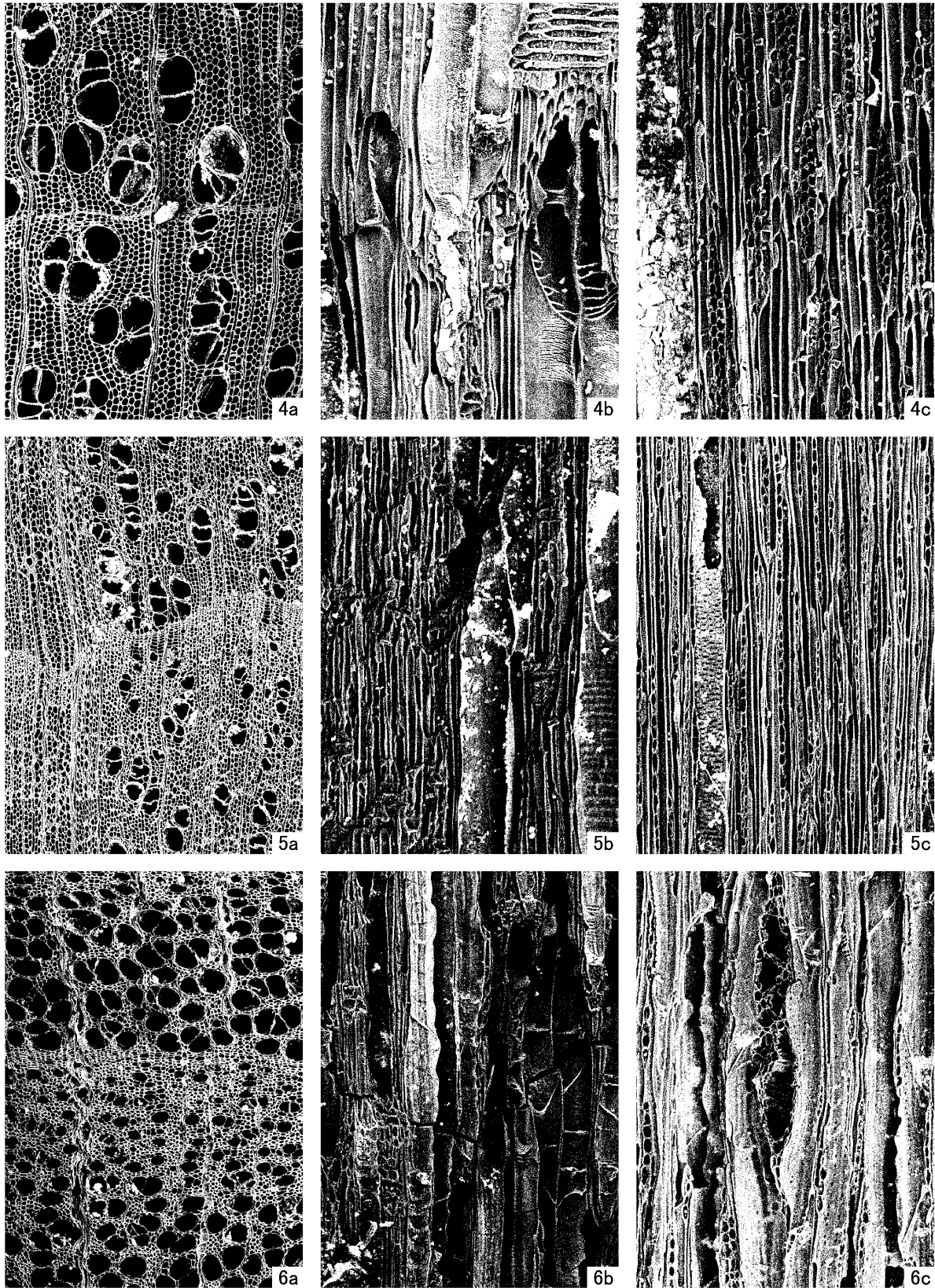
图 52 灰像



- 1. マツ属複維管束亜属(2区土坑77)
- 2. スギ(1区井戸580底部壁面炭化材)
- 3. ヒノキ科(2区土坑186)
- a:木口,b:柁目,c:板目

200 μ m:a
 100 μ m:b,c

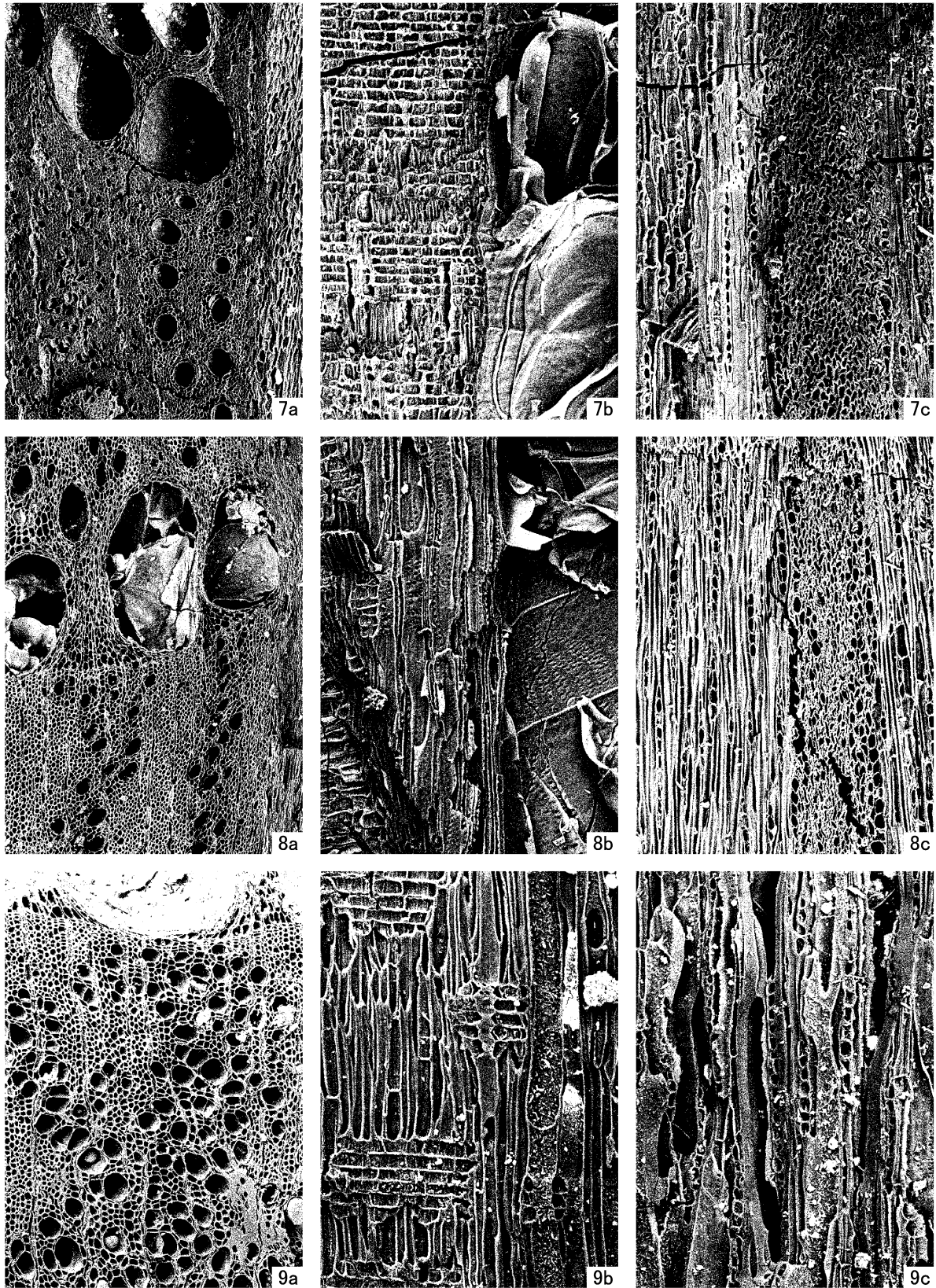
図 53 炭化材 1



4. カバノキ属(2区土坑77)
 5. クマシデ属イヌシデ節(2区土坑186)
 6. ブナ属(2区土坑77)
 a:木口,b:柱目,c:板目

200 μ m:a
 200 μ m:b,c

図 54 炭化材 2



7. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(2区土坑77)

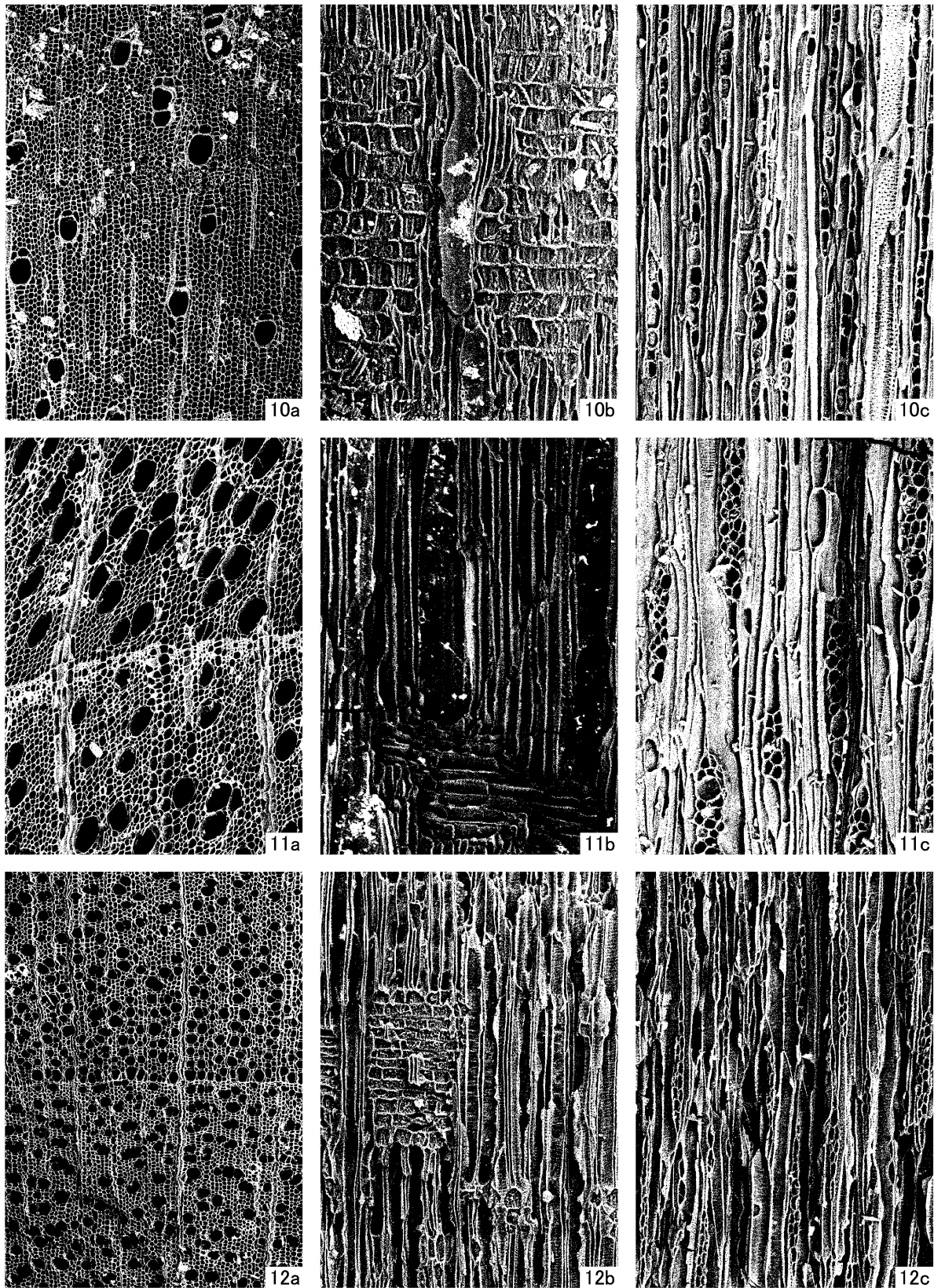
8. コナラ属コナラ亜属コナラ節(2区土坑75)

9. クリ(2区土坑77)

a:木口,b:柾目,c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

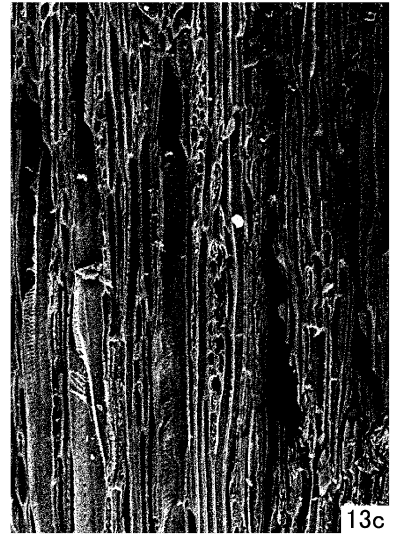
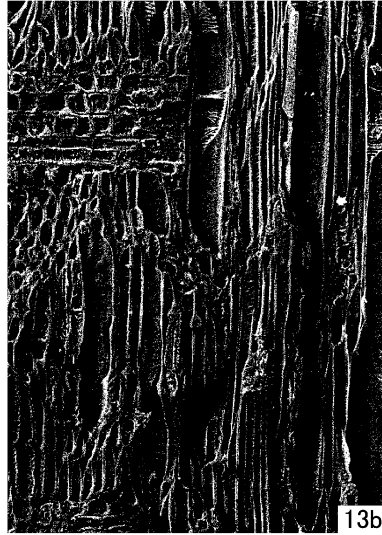
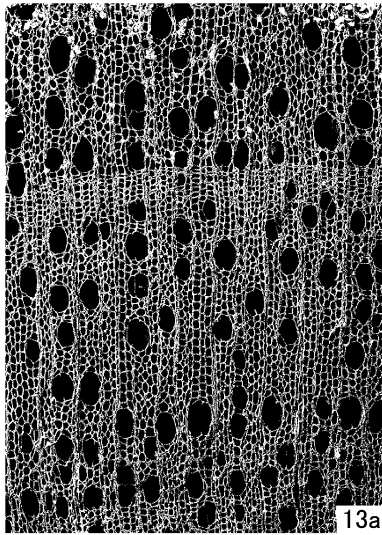
図 55 炭化材 3



10. シラキ(2区土坑186)
 11. クマノミズキ類(2区土坑65)
 12. アセビ(2区土坑75)
 a:木口,b:柁目,c:板目

200 μ m:a
 200 μ m:b,c

図 56 炭化材 4



13. ガマズミ属(2区穴蔵1炭層)
a:木口,b:柁目,c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

図 57 炭化材 5

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうしじょうしぼうにちょうあと							
書名	平安京左京四条四坊二町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2008-12							
編著者名	東 洋一・山本雅和・能芝妙子・近藤奈央							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2009年3月13日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 しじょうしぼうにちょうあと 四条四坊二町跡	きょうとしなかがきょうく 京都市中京区 ひがしのとういんどおりたこやくし 東洞院通蛸薬師 あがるみさやまちょう 上る御射山町 ほかちない 他地内	26100		35度 00分 23秒	135度 45分 41秒	2008年3月 15日～2008 年10月31日	838㎡	地下駐車場建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京 四条四坊二町跡	都城跡	縄文時代 ～古墳時代	流路	縄文土器、弥生土器、 土師器				
		平安時代	井戸	土師器・須恵器・灰釉 陶器、瓦類、金属製品				
		鎌倉時代	井戸、地下室、土 坑、土取穴	土師器・瓦器・須恵器 ・輸入陶磁器、瓦類、 石製品、金属製品				
		室町時代	溝、井戸、甕掘付 穴、集石土坑、土 坑、土取穴	土師器・瓦器・焼締陶 器・施釉陶器・輸入陶 磁器、土製品、石製品、 金属製品				
		江戸時代	溝、柵、井戸、土 蔵、竈、甕掘付穴、 穴蔵、石室、集石 土坑、土坑、柱穴	土師器・瓦器・焼締陶 器・施釉陶器・輸入陶 磁器・磁器、瓦類、土 製品、石製品、金属製 品、骨角製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-12

平安京左京四条四坊二町跡

発行日 2009年3月13日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961